
涼宮ハルヒの激闘 ~ とある時空の平行世界 ~

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの激闘 ～とある時空の平行世界～

【Nコード】

N8365M

【作者名】

brades

【あらすじ】

SOS団が存在するこの世界の平凡な日々^{パラレルワールド}に突如として現れた者たち。
それは、^{パラレルワールド}平行世界を駆使した、その世界に存在してはならない人物たちだった。

1話 く失踪く

その日、いつもと変わらぬ日常だった。休日だったせいか、人は何割が増しているが、平穏な時間なのに変わりはなく、また怠惰な時間を過ごしたかった。

だが、うちの団長はそれを許さない。

「今日も不思議探索をするわよ！」

いつもの集合場所、いつもの時間、いつものメンバー。やれやれ、いつも思うことではあるが、何で揃いも揃って皆いつも時間通りに来るんだ？

そんなに暇なのか、コイツらは？・・・俺も人のこと言える立場じゃないけどさ。

「涼宮さんの精神状態も、貴方のおかげで相当安定してきましたからね。今では滅多なことで閉鎖空間も生み出しませんし、我々も少し今までの分、休息として頂いているんですよ。」

だったら、もっとマシなことに精を出せばいいじゃねーか。わざわざハルヒの言いつけを律儀に守ってここまで来る必要もないだろ。

「おや、僕らが涼宮さんの考案した楽しい余興に参加しないとでも？もしくは、貴方と涼宮さんの二人っきりのデートの方がよろしかったでしょうか？」

そっちの方が嫌だね。色んなとこに振り回されそうだ。むしろ、こっちはのんびりまったりしたい・・・何か負けを認めてるみたいで若干気に食わんが・・・まあいいだろう。それに今回は特別

だしな。

「今日は有希の病魔撃退を祝うために、有希が行きたいところに行きましよう！有希、貴方どこか行きたいところある？」

「・・・図書館」

ですよー。

と、いうわけで現在市立図書館。朝比奈さんは何だか難しい本を眺めて、「ふえっ、これがあの方式の元かぁ。」とか言っていた。古泉は古泉でトランプの本に夢中になっている。弱いのにゲームの提案の種類はすごい多いんだよな。

長門はいつもの長編の小説に目を通してている。・・・そのスピード、本当に読んでも速読術でもそんなに速く読めるもんなのかね？

3

「んー、ここには魔術書とかタイムマシンの設計図みたいなものは無いわね。」

コイツはマジでそんなもんがこんな市立図書館にあると思ってるのか？そんなもんが公共の場にあつたら色々マズいだろうが。最も、コイツが望んだら
できそうで怖いけどな。

そう言いつつ、意外にもハルヒは少女漫画に手を出した。
へえ、お前ってそういうものも読むのか。

「・・・何か文句ある？」

「いいや、ただ、そういったジャンルをお前が読むってのが不思議

でな。」

「・・・ア、アンタには関係ないでしょ！」

わかった、わかったって。だからここで大きい声を出すのはマジで勘弁だ。もう視線が痛すぎる。

ちなみに、俺が手に取ったのは、これまた市立の図書館にあっていいのかは謎だが、某ビリビリな文庫から、「灼眼のシャナ」というライトノベルだ。

結構俺もこの急展開が面白くて一時期ハマったことがある。少し熱は冷めたが、まだ面白いもんは面白いんだよな。

そんな感じで今日という一日は終わりを迎える。そう、この時点では誰も気づかなかったんだ。こんな穏やかな日常があったという間に崩れるなんて。

「緊急事態です。」

翌日、珍しくハルヒから電話が来ないと思い、ふと携帯を覗くと、まるでタイミングを凶ったかのように古泉から電話がかかった。そして俺は半強制的にあの集合場所へ駆けることとなる。

「今度は一体どうしたっていうんだ？」

今日は日曜日。なのに、ほとんど人がいない。まるで、この日は何かあるとの暗示がかかっているかのよう。

「涼宮さんの消息が途絶えました。」

「何!？」

「正確には存在はしているが、場所が掴めない状態。観察を始めて以来、初めてのケース。」

「私も未来とまた連絡が取れなくなりましたあゝ」

何かが起きている、そんな感じはした。自然と俺の全身にも緊張が走る。久しぶりだな。6月の神人、12月の消失の朝、そして分裂と驚愕の日。

その時と全く同じ、嫌な予感。

そして、いきなり大爆発が起こった。

「何だ!？」

そこにいた人物を目の当たりにして、俺は驚きを隠せなかった。

2話 くおとぎ話の者

「お前は・・・まさか、”逆理の裁者”ベルペオル・・・!?”」

嘘だろ? コイツは確か、この前の不思議探索でハルヒが提案した図書館巡り時にたまたま読んだ小説に出てきた、悪役の仮装バル・マスク舞踏会の一人だろ!? 何で現実世界にいるんだ!?

「おそらく、涼宮ハルヒの世界改変能力を利用し、何者かによって具現化されたものだと思われる。」

おいおい、長門、お前はそれで納得なのかもしれんが、明らかにおかしいだろ!

「いや、確かにそう考えれば納得できます。現在涼宮さんは行方不明、時空を超越した情報統合思念体ですら感知不可、さらに朝比奈さんは現在未来と不通。だとすれば、可能性は非常に高いですよ。」

ってことは何だ? その何者かっつのは、おとぎ話に出てくるような魔物とかも出現できる状態だっつてことか?

「・・・そう。」

やれやれ、ごっちゃんごちゃだなあ、チクシヨー!

「フフフ・・・。獲物が自らかかりに来たと思えば、お付きが3人かい? やはりこの世はままならぬ・・・。」

いや、あの、小母さん？その不敵な笑み、実に恐ろしいですよ？

すると、いきなりベルペオル近辺に大きな爆発が起きた。ベルペオルは大きく跳躍し、鎖を投げつける。その鎖を断ち切るかのように、鈍い金属音が響いた。

「今度は何だ!？」

白く深く舞い立つ埃の中に一つ、青白い光を見つけた。
なんだ・・・?あれは・・・星か・・・?
そう思った矢先だった。

「ガキイイイイン!!」

激しい金属音と共に黒いマントを身に纏っただけの、妖艶な女の子が姿を現した。だが、ベルペオルと同じ小説で出てきた女の子とは姿も空気もまるで違う。黒髪に、右が短く左が長いツインテール。そして、青白く燃える左目。長太刀を自分の手足のように自在に動かす。

「ククク・・・ブラックロックシューターか。お前もここに飛ばされたようだね。」

ハッとした。

この子も見たことがある。某動画サイトで盛んに宣伝されていたキラクターだ。

「アンタ、どっかの誰かに似ててね。どうしてもアンタを倒さない

と、あたしの気が収まらないわ。」

「……………」

長門も何か感じ取ったらしい。微動だにはしないが、臨戦態勢であることは俺にも見てとれる。

「フツ。紫色のショートヘアの貴方、ちょっと手を貸してちょうだい！」

その黒髪の女の子が叫ぶと、長門は有無も言わず朝比奈さんからカラーコンタクトを外したときと同じ、ハイスピードで一気にベルペオルとの間合いを詰めた……。

「ほう、意外とやるようだね。」

ベルペオルは妖艶な笑みを浮かべ、鎖を纏う。
長門はすぐさま次なる攻撃を判断、その場を退いた。

「へえ、機動力あるわね！」

「……貴方の大切な人は生きています。」

「……………!!」

「ただし、元の姿を取り戻すためには涼宮ハルヒの力が必要。」

「何故貴方がヨミを……?」

「時間軸ならいつでも送信することは可能。・・・でも」

「フッフ、そうね。まずは一刻も早くこの小母さんを倒さなきゃね」

B RSは太刀をいきなり大銃に変化させ、乱れ撃ちした。

「ほう、二極変化式の神器か。どうやら甘く見すぎていたね。」

ベルペオルは大きく跳躍、全弾を避けた・・・はずだったが。

「!?!?」

「どうやら、紅世の仮面舞踏会最強の参謀も弾の中身まではわからなかったようね。」

B RSがニヤリと微笑む。ベルペオルを狙った弾のいくつかは地面と同化し、植物の根となってベルペオルを捕らえる。

更に、弾は三つに分岐する。一つは根を伝って電撃を浴びせ、一つは根ごと氷結させてベルペオルの腕を完全に押さえる。そして最後の一つは灼熱の鎧を纏った弾。

「属性開放弾：四式か。どうやら私は負けのようだね。だが、その男はいずれ頂くよ。それが世界の理・・・。」

長門の手が光線状に伸びてベルペオルを貫き、灼熱の弾と共にB RSは岩弾を撃つ。

そして、大きな爆発と共にベルペオルは闇に散った。

3話 く平行世界く

俺は呆気に取られていた。

だって普通そつだろ？小説やら某動画サイトでしか見たことの無いようなキャラが、どんどん出てくるんだからな。

「一体お前は・・・？」

「ん？ああ、自己紹介がまだだったわね。あたしはブラックロックシューター。とある電脳世界の救難信号により派遣された、”Buster”の一人よ。」

こら、あんまり外でそんな電波でどつかのアニメのパクリのような台詞を言っちゃいけません。

つと、危ない危ない、ついツッコミ反応センサーが発動するところだった・・・ってのはどうでもいいな。それはそれとしてだ。

俺も自己紹介をしようと思ったのだが・・・

「いや、貴方たちのことはすでに上から聞いてるわ。」

「もしかして、お前もこの3人みたいな経歴の持ち主なのか？」

「いいえ、私達は貴方とは全く違う次元に住む者。」

「んなら、何でわざわざこっちに来るんだ？」

「わかるはずよ、この異常事態が。」

「異常事態？・・・もしかして、ハルヒとなんか関係があるのか？」

「勿論。多分貴方達とは意見に狂いが生じるかもしれないけど、聞いてもらっていいかしら？」

控えめに言ったB　RSの視線の先には、古泉、長門、朝比奈さんが写っていた。

なるほどな、確かにそれぞれの主張を持った3人と話すのは結構神経使うからな。

「大丈夫だ。別にお前らの主張を聞いても、自分なりに解釈するはずだ。」

「そう。なら話は早いわね。」

何故だろう。ものすごくムシクシヤする。心が落ち着かない。何なんだ、このモヤモヤは・・・？

「元々、私達の所属する”Buster”は、それぞれ違うパラレルワールドから来た世界の理を変えた者たちが集まり、ある少女を監視していたの。」

「・・・えらく変な話だな。」

「ええ、おそらく、この世界では私達はアニメや物語に出てくるキャラクターとして描かれるNo15498の世界なの。」

「ああ、確かにお前やさっきのベルペオルって奴には見覚えがある。」

「そう、だから本当なら私達は動く必要は無かった。でもその”Buster”によって倒されてきた奴らが、今ここに集まり始めた。」

「なるほど、つまり異なるパラレルワールドで対立関係にあった両者のうち我々の世界では悪役として描かれた方が、こちらの世界に来てしまったというわけですね。」

おい、古泉、途中でいきなり入ってくるな。読者が誰の台詞かわからなくなっちまうだろ。

・・・おっと、本音が漏れちまったぜ。

「・・・ただ、それが問題なんだ。」

誰の声だかわからなかった。ただ、俺のすぐ脇を誰かが通ったのはわかった。そして、その正体を俺達はすぐ知ることになる。

「お前は……………」

そこにいた人物を目の前にして、俺は我が目を疑った。俺がちよつと前まで欠かさず読んでいた某ジャプのあるマンガの主人公、沢田綱吉その人だったからである。しかも、この額の炎、目の輝き。確か小言弾を当てられた時の物凄く強かったバージョンだ。

「おそらく皆知っていると思うが、俺の名は沢田綱吉。”Buster”のリーダーを務めている。」

「ああ、知ってるさ。ツナ、と呼んでも差し障りないかな？」

「ああ。・・・さて、本題なんだが、その俺達の対になる存在、”Collapse”が、俺達が少し慌しかったのを見てなのか、その監視していた少女を誘拐したんだ。」

「まさか・・・ソイツは・・・」

「その少女の名は・・・涼宮ハルヒ。」

「!!!!」

嫌な予感が当たった、とはこのことだろう。ハルヒが？あんなヤバイ連中に？

「何でだ！？何故ハルヒがその”Collapse”だかカルピスだか知らん奴らにさらわれなきゃいけないんだ!!!」

もう、理性が飛んでいた。落ち着け、そんな自分の心とは裏腹に憎しみが湧いてくるのを感じた。何でだろう、こんな気持ちになるのは。

「・・・すまない・・・!」

「その後の涼宮ハルヒの消息を知りたい。」

そう口を出したのは長門だった。

「奴らは闇宮ダイクケパレスにいる。おそらくそこで涼宮ハルヒの情報改変能力を、摘出して使っつもりなんだろう。」

「長門・・・行くぞ・・・。」

「貴方がそう決断するのならば、私達は否定することは不可。」

「待ってくれ。もう一つ話がある。」

ツナは、更に真剣な顔となった。なんだ、まだ嫌な話があるのか？

「キヨンと言ったな。君も周りも気づいていないだろうが、君の中にある能力が少しずつ目覚めつつある。」

なんだって？俺は凡人として普通の生活をして生きてきたつもりなんだが・・・能力？そんなもんが俺にあるのか？

「詳しいことはわからない。だが、それも絶対に敵に奪われてはいけない力だ。」

「・・・？なんだかわからんが、ツナ、お前らはどうするつもりなんだ？」

「まず、俺達は各地の”Buster”の仲間知らせを送ってから行く。先に行ってってくれ、すぐ追いつくから。」

そうして、キヨンとツナは分かれる。そう、ツナは早くキヨンを自分から離れたかったのだ。・・・超直感が何かを伝えたから。

「さつきから何だ？」

振り返ると、そこには見覚えのある長い黒髪の少女が。

「目覚めし 彼の力 我が元へ ……」

「何!?!」

構えるとすでにその少女は消えていた。マズい、早くキョンの元へ
急がねば、彼が危ない。

しかし、そこへ立ちはだかる者がいた。

「ハツハツハ、貴様らがここにいたとはな。」

そして戦いは幕を開ける。

4話 く破壊者く

「破壊者エクスデス・・・か。」

そう言つてツナはたじろいだ。

今は一刻も早くキヨンの元へと急がねば、彼の身が危ない。だが、ここでこんな大物と会つてしまつては、かなりの時間のロスになつてしまう。

「貴様らが何故ここにいる？」

「アンタこそなんでここにいんの？」

B RSの外見は物静かだったが、内では物凄い怒りと焦りが見てとれる。

「グハハハ、我が無の世界構築の為、とでも言おうか。」

「ということやはり狙いはキヨンの力か。」

ツナは拳を構える。

「ならばその無の世界へのルートを、俺達が断ち切つてやる・・・」

一気にツナはエクスデスの正面へ躍り出て、渾身の一撃を喰らわす。

「小童がつ！」

エクステスはそれに応じるかのようにその拳を受け流し、ツナのみぞおち目がけて無の波動を繰り出す。

吹っ飛ぶツナとB RSが入れ替わり、今度は刀の対決となる。両手持ちのB RSに対してエクステスは剣を持たない。まるで自分の身体の一部のようにして剣を操る。戦っている方としては浮く剣と打ちあっている為、かなりやりにくい。

「チイツー!!」

B RSは高く跳躍し、一旦エクステスと間合いを取る。

「どうした？最初の威勢はもう終わりか？」

B RSは瞬時に刀を大銃に変化させ、乱射する。しかし、エクステスの足元に魔法陣ができるたび、その攻撃を避けていく。ツナも、応戦にと間合いを詰める。

しかし、エクステスは破壊者と呼ばれてはいるが、鉄壁の守りを持つ。このままでは、ジリ貧になるのは目に見えていた。

ツナの大技『BURNER』も、相手がこれだけ動ける状態ならば安易に撃つことはできない。

「無を超える者などおらぬ。全ては無から始まり、無で終わる、そうではないか？」

「無を悟るか。哀れな奴め。」

そこには藍と銀の甲冑に身を包む、美しい女性剣士が立っていた。

「セイバーか！」

B R S の声をも消すほどの勢いでエクステスに接近、素早く居合
いを放つ。

「グツ、しかしこんなもので私が・・・!?」

すでにエクステスは動けなかった。何故だかエクステスにもわかつ
ていない。

「甘い、今の剣は我が聖剣エクスカリバーではない！古のドワーフ
より譲り受けた業物の霊剣ザルガタナスだ！その剣に触れし者は、
数十秒は感覚的な麻痺を脳に伝え、動けまい！」

「何！？馬鹿な、我が無を屠るなど！！」

「悪いな、あまりゆっくりしてられないんだ。」

ツナはグローブを指定位置に構える。

「オペレーション？・・・。」

ツナの周りの大気が変わる。エクステスを貫くような鋭い殺気と共
に、一気に炎を繰り出す。

「？・BURNER!!」

「ぐつ・・・おのれセイバー・・・この復讐、必ずやいずれ・・・
！！」

高密度な炎エネルギーがエクステスを容易に貫き、一瞬にして灰へ
と化す。

「待ってる、キヨン・・・！」

涼宮ハルヒの世界改変能力の抽出開始まで、残り3時間・・・

4 - 2 く緑の少女と緑の少年く

さあて、大体終わったかな。

今日のノルマが150とはいえ、足だけで木をなぎ倒すとなると結構辛いつさね。

おかげで半日経ってしまったか。少し休憩してから家に戻ろう。

そうして、私は丸太を利用して簡単な腰掛け用の椅子と机の代わりになるものを即席で作り、先ほど焼いていた岩魚を手にとった。

「フフツ、そこにいるのは誰さね？それで気配を消したつもりだったかなっ？」

「さすがだね。」

そこにいたのは見たことのない少年だった。緑色の古風な帽子を被り、肩にはこれまた全身緑色のトカゲを乗せている。

一見して私と同じ年齢くらいの穏やかそうな少年だった。でも私は瞬時にその少年の力を悟った。この子は明らかに何かを葬ったことのある男だと。しかもそれは人などではない。もっと恐ろしい何か。

「君みたいな可愛いお客さんがこんな森奥まで私に気づかれずにここまで来るってことは、何か重大な用事があるってことかなっ？」

あくまでも平然を装う。ここは鶴屋所有地の森林公園。並大抵の者がここまで来れるようなセキュリティではない。

「どうしても君の力が必要なんだ。」

「ほうつ。それは私のことを大分知っているような口ぶりさね。」

「名乗り忘れてたね、僕の名はアルス。鶴屋さん、君に”Buster”のメンバーとして協力を求めにきたんだ。」

「へえつ。何だか面白そうなとこだねつ。でもその前に……」

私は構える。前にもこの”Buster”については『彼』にも言われてたね。でも私はこの申し出を断つて中立を保っていた。なるほど、これは大事になりそうさね。

しかしその前に私は彼の技量を試したかった。というよりも、自分がどういう位置にいるのか、把握したかった。

「やっぱり貴方は好戦的なんですね。」

アルスも構えている。なんだろう、こうして立っているだけでこの威圧、一体彼は？

私の力でキヨン君を助けられるのだろうか。どんなに鍛えたって有希っ子や古泉君には敵わない。なぜならば、彼らは普通の人間ではないから。

いや、もう迷うのはやめよう。それが私という人間に対して悪質に影響するなら。

もう失敗はしたくない。あの時のように……。

涼宮ハルヒの世界改変能力の摘出まで、残り2時間30分

4-3 くそれぞれの戦い

「さすがさね、アルスつち。まさかあのタイミングである呪文を撃つとは思ひもしなかったによるよ。」

「いやいや、鶴屋さん、貴方の身のこなしは常人の鍛えられる領域じゃない。おそらく、貴方の先祖は……」

「おーっと！そつから先は言わせないよつ。」

「？」

「どうせ血塗られた歴史さね。今語っていても仕方がないはずつさ。それよりも。」

「そうですね。僕らにはまだやるべきことがある。」

「キヨン君の元へ急ぐつさ。」

「多分今から深奥部を目指しても、充分間に合うはずです。」

「んじやつ、ちょちよいつと行くつさね！」

短い会話だけで行動に移す。そう、それが私だった。込み入った話なんかは関係無い。自分ができることをする、それが拳の主であるキヨン君を助けるならば、この命に代えても、あの二人を守り抜くのだ。

……もう、失敗は許されないから……。

俺達は、一刻も早くハルヒを助けるべく、ダークパレスに向かっていた。やれやれ、走りっぱなしってのは疲れるんだがな。

「もう少しですよ。それに、我々の戦いはこれからです。」

古泉、そんな笑顔を浮かべたつてごまかされんぞ。実際ハルヒを助けるのが目的だ。無駄な戦闘は避けたいところだろ。

「やはり、どこに行っても貴方は貴方らしいですね。羨ましい限りですよ。」

そんな話をしてるのも、俺がすでに息切れ寸前なのを押し切つてまで走っているからだ。運動不足なこの身体、もっと動かしておけばよかったと

今更思うね。所詮、凡人のできる範囲なんて決まってるのs・・・いでっ！

「・・・・・・・・。」

先頭切つて走っていた長門が急に止まる。当然ながら、考え事をしていたこともあって、無様にも鼻を強打してしまう。くうう、地味に痛いんだよな、これが。

「どうしたんだ、長門？」

「・・・・・・・・あれ。」

長門が指差す方向で、黒い霧の塊のようなものが二つ、こちらの道を塞ぐかのように立ちふさがり、そして二人の人間を置いて霧は消える。

「久しぶりだな。」

「・・・お前等!!」

金髪のいけすかない嫌味野郎、そして見た目こそ美人だが古泉同様の頭のちよつとイカれた女子がそこに立つ。

「先に行ってください。」

古泉と朝比奈さんが俺達の前に立つ。そうだった。あの嫌味野郎は朝比奈さんの言う未来人の対抗勢力、あのイカれ女は古泉の機関とやらの対抗勢力だったな。

名は藤原と、橘京子。

「だが、お前等だけでやるより長門とかもいた方が・・・」

「長門さんは、キヨン君と行ってください。」

麗しの朝比奈さんが緊迫した、それでいて覚悟の眼差しを俺に向けてる。この対決は、いずれ決着をつけねばならないのだろう。

「任せても大丈夫なんだな？」

「お任せください。こう見えて、僕達は強いんですよ?」

それには同意だ。赤い火の玉ぶっ飛ばしたり、ワープしたりするんだからな。

「それじゃあ、頼みます。」

「うん、キヨン君も気をつけて。」

そして俺と長門は古泉達と別れ、先を急ぐ。

後ろを振り返ってはいけないと思っていたのでそのまま走ったが、さすがにその直後の爆発はやばいと思ったね。長門が早くと言ってくれなかったら

そのまま古泉のところに戻っていたのかもしれない。

そんな思いを抱きつつ、俺達はダークパレスを目指した。

涼宮ハルヒの情報改変能力摘出まで、残り2時間・・・

5話 　　～突入～

「我々も急がねばならないのです。そこを退いては頂けませんか？」

「残念だけど、それはできないわ。涼宮さんの能力、これは佐々木さんに返さねばならない。」

「元々涼宮さんの力ですよ？奪うのと返すことの違いくらいは把握してるかと思いましたが。」

「どうやら話の余地はなさそうだ。それが必然なのだろう。涼宮ハルヒを中心としたグループ内でさえ、こういった分立や争いは絶えない。」

「てめえはどうなんだ、朝比奈みくる？」

「私は古泉君の意見を完全に受け入れることはできません。でも、あなた達の考えが間違っていることは理解できます。だから、あなた達がここで足止めをしようと言うならば、武力による解決しかありません。」

「本当に皆さん頑固ね。ならばここで決着を付けさせてもらっわ。」
そう言って橘、藤原両者は二方向に散った。

「朝比奈さん、ご健闘をお祈りします。」

「古泉君も。」

朝比奈みくるは藤原の方へ、古泉は橘の方へ向かった・・・

「長門、後だ！」

俺達はすでに、ダークパレスに乗り込んでいた。建物を見た時感じた静けさとは真逆で、中は魔物で溢れかえっていた。

やれやれ、普通の凡人生活を送っていたつもりがついに魔物ときたか・・・。もはや非日常なんてレベルじゃないぜ。

そう言いつつ、長門の例の早口呪文で腕が伸びたり、球体を撃ったりして目の前のおぞましい姿の化け物を倒していく。おお、さすが長門だな。

なんか守られてばっかなのも悪い気がするんだけどな。

「貴方もやってみたい・・・？」

え？やってみるって？

そう言う暇もなかった。長門は再び早口で何かを唱えたかと思うと、一瞬にして俺の手に長太刀の柄が当たる。

長門・・・これは・・・

「以前、涼宮ハルヒの反転世界より貴方が用いていた長太刀を構築した。」

「そんなことできるのか。」

「可能。強制凍結させていた異次元反転データを一部復元し、他の情報に干渉されないよう情報制御フィールドを展開しながら

その異次元反転データのみを実体化させた。」

いや、わからんけどさ。

「とりあえずこれで斬ればいいのか？」

「そう。貴方が”ラストエクデイス”と命名したその長太刀は、反転世界と全く同じもの。ほとんど斬れないものはない。」

そう言われたので手軽に近くに迫っていた小鬼を斬ってみた。何の抵抗もなくその小鬼は真つ二つに割れ、跡形も無く崩れ去る。おお、すごく軽いし扱いやすいな。

そんなこんなで俺達は扉の前でとてつもなくでかい物体と戦っていた。全身石できているらしく、俺の剣もビクともしねえ。

「長門、コイツは一体何なんだ？」

「レジストコード：岩巨人^{ゴーレム}。」

ドクエかつ！

なんてツツコンでる暇じゃない。ゴーレムとか呼ばれているその岩巨人は、動きこそ遅いものの、一撃一撃がとんでもなく重く、一発でも喰らったら

即失神決定だ。そんな奴とまともに戦いたくねーよ。

ん？俺がヘタレすぎるって？悪いか。俺はこれでも凡人なんだよ。

「 ¥ × 」

長門の呪文が響く。すると、長門の周りの温度が急に低くなったように感じる。すると、ゴーレムの周りに冷気が纏い、大きな結晶に閉じ込められる。

長門はすかさずその結晶ごと光って伸びた手で上から斬った。音さえしない無音の世界。そこで切り落とされたゴーレムの腕の周りに雪の結晶が集まって凝縮され、片腕を粉々に打ち砕いた。

だが、それだけではゴーレムは死ななかった。むしろ、さらに猛威を振るい、圧倒的にスピードが増す。

「！！」

気づけば長門がゴーレムのもう片方の腕の餌食になっていた。

「……うかつ。」

そのまま長門は吹っ飛ばされ、そのまま崩れる。

「おいおい、待て待て待て。」

ゴーレムが俺をロックする。

やばい……こりゃ死ぬな……ハルヒ……すまん……。最後に、少しでもコイツにダメージを与えて長門が後始末できるようにするしかない。

そう思った俺は、ゴーレムの振り下ろした腕をかくぐり、ラストエクティシスで一突き。

「……」

・・・あれ？俺・・・生きてる？
おそろおそろ恐怖で瞑った目を開けると、ゴーレムの一切の動きが
停止し、そのままレンガとなってバラバラになった。

「今貴方が攻撃した箇所は、岩巨人の核であり、パズルのように組
み重なっていた岩の接続部分。そこを攻撃したため、岩巨人はその
まま崩れた。」

マジかよ!？

ははは・・・なんかあつけない最後だったな。腰が震えて悲鳴を上
げてるぜ。

「・・・ユニーク。」

そして、改めて扉の前に立つ。

そう、ここからが本番だ。この先にハルヒがいる。俺達はハルヒを
助けねばならない。

団員1として。そして・・・俺自身として。

涼宮ハルヒの情報改変能力抽出まで、残り1時間。

6話 〱宮殿底〱

「待て！！！」

ようやく見つけたぜ。最初にこの宮殿に入ったときはそりゃ焦ったが、何とかハルヒが捕まってる場所へ来れた。

「何者でおじやるか！？」

「何者でござやるか！？」

二人の道化師がこちらを向いた。コイツらが結界の真犯人、ゾーンとゾーンか。見るからに弱そうなんだがな。

「悪いが、そこにいるハルヒを返してもらおうか。」

俺一人だったらこんなセリフ、絶対言えないだろうな。やれやれ、本当俺ってヘタレだな。まあ、長門がいるなら勝率は間違いさ。そう思っただけで油断していたのかもしれない。俺の頬を鋭く長い何かが掠めた。

「お前等はここが敵中の真ん中だと知っていてここに来たのか？」

「無鉄砲さはこの女と変わらん。実に馬鹿な連中だ。」

暗闇から姿を現したのは、いつぞやのゲームで大苦戦したセフィロス、あの時読んだライトノベルで最強の力を誇っていた『壊刃』サブラク。

確かに、本当はここにはいて欲しくないような強い奴ばっかだな。やれやれ、長門一人じゃ敵しいんじゃないか？

「あなた 私 同じ・・・」

ん？まさか・・・嘘だろ・・・。コイツは確か、長門すら理解不能だとか言ってた『天蓋領域』の周防九曜じゃねーか？それに・・・この寒気・・・

「どうやら頃合のようですね。この少年の悲鳴が楽しみですよ。」

「キシイイヤアアア！！！！」

かつて魔王の右腕とかで恐れられたらしい呪術師ゲマ、更には以前俺達がハルヒの力の暴走で行った反転世界：ギルド世界で唯一倒せなかった鋼龍クシャルダオラか・・・。おい、長門・・・こりゃあ・・・。

「周防九曜の出現までは想定内の範囲だった。しかし呪術師ゲマとクシャルダオラとの遭遇は計算に入れていなかった。迂闊、私のミス。」

「俺達がハルヒを救出できる可能性は？」

「周防九曜の出現時までで約32・474%、ゲマ、クシャルダオラ出現時で約0・0063%」

「やれやれ、つてことはここでゲームオーバーかよ・・・。」

まさかここまで相手が守りを固めるとはな。それほどハルヒの力は稀有ってことか・・・いやいや、感心してる場合じゃない。

だがしかし、イマイチ俺の頭は緊張感に欠けていた。今から死にそ

うだつてのにな。理由は……もしかしたら7月7日のあの日の時と同じなのかもしれない……。

そう思ったときだった。

耳に鳴り響くようなとてつもなくデカい爆発音と共に、俺の周りに人影が3つ、煌いた。

「どうやら間に合ったようだな。」

「まだ開戦前みたいね。だったらあたしたちも混ぜてよ。」

「ここまでよくたどり着いた、キヨン。後は我々にお任せを！」

世界最強のマフィア、ボンゴレの若き10代目『沢田綱吉』。蒼く輝く星を見つけ、親友を取り戻すために放浪していた女戦士『ブラツク ロックシューター』。美麗かつ圧倒的戦闘力を誇る剣のサーヴァント『セイバー』。

なんとなくだが、来るような気がした。だから緊張感がなかったのかもしれない。仲間が必ず来ると信じて。

するとゲマにいきなり美しい柄の剣が振り下ろされる。ゲマは身をひるがえして何とか直撃は避けたが、肩から緑色の血を流していた。

「この剣……もしや……!？」

「悪いけど、この人には触れさせない。」

「キヨン君っ、遅くなってごめんねっ！間に合ってたっさ！」

今度は、世界の礎となった水の精霊の加護を持つ伝説のオチエアーノの剣を所持する勇者『アルス』に、SOS団名誉顧問であり超武闘派の『鶴屋さん』が現れた。

自然と笑みがこぼれる。絶望的な空気が続いていただけに、かなり久しぶりな感じがする。ようやく少し余裕が出てきたぜ。

「これで、我々の勝率は、50%上がった。」

おいおい、長門、そんな適当に言っているのか？さっきはお前、小数点第4位くらいまで計算してたぞ？

「・・・そう。」

そんな会話が出るほど、俺達には自信があったんだ。

ハルヒ、待ってるよ、今そっちに行くからな！！！！

7-1 〱セイバーVSセフィロス〱

「器を求めるだけの実体の無いお前が、私の肉体に傷をつけることができるか、本当に思っているのか？」

「その自信、すぐにへし折ってくれよう。」

セフィロスとセイバーは相対し、一步も動かない。互いに相手の力が分からない以上、下手に手を出せば一瞬で消される。それほど両者をの周りを渦巻く気圧は変化していたのだ。

「どうした？時間が無いのではないか？」

「貴様こそ、その力を有り余らせたような殺気は見掛け倒しか？」

「フ・・・どうやら名声ほどでもないらしいな。」

その刹那、セフィロスが消える。セイバーは大きく跳躍し、その場から少し離れる。

「くっ・・・剣圧で斬られただと・・・？」

「私の剣は斬る者を逃さん。」

セフィロスがその場で一振り剣を振るう。するとその剣先から先程セイバーを傷つけたものと同じ剣圧と呼ばれる無数の波動のようなものがセイバーを襲う。

「チツ・・・！」

セイバーは自分が前に進むための邪魔ないくつかの剣圧を弾き飛ばし、一気に間合いを詰める。

「冥府に戻れ！」

セイバーの洋剣が月が大地を照らすかのように美しく光り、セフィロスの大太刀と正面からぶつかる。

「お前の実力はそんなものか？騎士の称号を持つ^{サーヴァント}靈器よ。」

「貴様こそ・・・並の人間のできる剣技ではないぞ・・・!!！」

「私か？確かに私は人間ではないかもな。」

セフィロスの再びの剣圧を防ぎきり、セイバーは口を開ける。

「一体貴様は何者だ。」

「お前と同じ、過去の遺産だ。過去に生き、そして記憶の破片と散った者・・・」

「過去の遺産だと・・・？そんな貴様が何故涼宮ハルヒの持つ世界改変能力にこだわる？」

「これは私のパラレルワールドの復讐の儀式に過ぎん。涼宮ハルヒ・・・彼女の力は全ての造物主としてどんなに足りない物も自ら作り出すことができる。」

それは魅力的だとは思わんか？」

「ならばやはり、貴様はこの手で葬らねばなるまい。」

セイバーは宝具『エクスカリバー』を抜く。別名【約束された勝利の剣】と称されるこの宝具、使用者の魔力の全てを光に変換することとどんなものをも破壊する斬撃となる。

「ほう、正しい選択だ。ならば私もそれなりの技を使うべきだな。」

「エクス・・・カリバー!!」

セフィロスが浮き、その周りに結晶が集まり、そして剣に纏わりつく。

何倍にも威力の増した剣と剣がぶつかり、瞬時に大爆発が起きる。

それが吸力の力だと、セイバーは気づかずに・・・。

7-2 く沢田綱吉VS壊刃サブラク

「貴様が”Baster”のリーダーだな。確か名前は・・・沢田綱吉。」

「・・・だったらどうする?」

「貴様の扱う炎は随一と聞く。しかし炎髪灼眼の討ち手ほどかな?」

「ならば試してみればいい。」

サブラクは真つ赤な炎を身に纏い、それを収縮させ、爆発させた。

ツナはそれを嵐属性の分解の炎と見極め受け流そうとしたが・・・

「・・・!!」

ツナの持つ超直感が危険信号を伝え、すぐさまそれを避けた。幸い、右手のかすり火傷で済んでいる。

「ほう。俺の炎を受けずに避けたのは良い判断だ。だが、どちらにしろ同じことだ。」

「何が言いたい?」

「いずれわかるさ。さて、戦いを続けよう。」

サブラクはツナとの間合いを一気に詰め、拳に炎を交えて振るつた。ツナはそれを大空の調和の炎で静め、自分の拳をサブラクに当てる。するとサブラクの身が一瞬にして燃え上がり、次にはすでに消えて

いた。

「どこだ!？」

「甘いな。」

サブラクはツナの真下、地中より炎を舞い上がらせて爆発させた。ツナはそれを避けようとしたのだが。

「くっ!!……これは……」

急激な痛みを感じ、ツナが目を向けた先……先程サブラクの攻撃をかすった腕。その腕が見るも無残にボロボロになっており、多量の血がにじみ出していた。

知らぬ間に、ツナの右腕は動かなくなっていたのである。

「チツ……!!」

それでもツナは間一髪のところ、かろうじてサブラクの攻撃を左手の炎の噴射によって免れた。すでに右腕は言うことを聞いてくれない。

「これは一体……まさか!？」

「どうやら俺の炎の性質に気がついたようだな。そう、俺の炎はどんな形でもかすりさえすれば、その傷をどんどん拡大させ深めていく自在法ステイグマ。

もう貴様の右腕は使いものにならん。つまり、それは貴様の敗北を意味する。」

どうやらあの時ツナが感じた超直感は、この能力のことだったらしい。しかしツナの右腕に圧倒的負荷がかかっているのにも関わらず、静かに焦点をサブラクに合わせる。

「オペレーション?・・・」

「ほう、右腕を失ってもまだ戦う気か。だが、そんな無防備な貴様に大技を使わせる時間があると思うな!」

サブラクは手をかざし、放射型の炎弾を次々にツナの元へ撃ち続け、大爆発させる。だが舞い上がった煙が止むと・・・そこにツナはいなかった。

「何!?!」

「この命に代えても、お前を倒さねばならない。壊刃サブラク、お前はここで眠ってくれ・・・!」

「? - BURNER」
イクス・バーナー

とてつもない熱量と、異質とも言える爆発の規模が、サブラクを包み込んだ。ツナは本来『柔の炎』で反動を消すが、右手が使えないため、まともに吹っ飛ばされる。

「どうだ・・・!?!」

ツナが目を向けると、そこには多少の傷しか付いていないサブラクが立っていた。

「そんなバカな・・・」

ツナは倒れる。

「どうやら左腕の？ - BURNERは右腕の力の10分の1も出せていないようだ。まともに喰らっていたら傷を負っていたかもしれないが、俺の勝ちだ。さあ、ボンゴレ10代目にして”Basterr”のリーダーよ。地に還るがいい。」

サブラクがとどめの一撃の炎を発した時だった。

「Protection Powered!!」
プロテクション・パワー

その言葉と共に、ツナの周りに強固なバリアが張られ、サブラクの攻撃を防ぐ。

「ようやく来たか・・・待ちかねたぞ、高町なのは。」

ツナの前に立った二人の少女は、ツナに二人の魔力でできた魔石を飲ませる。あらゆる生者を完全に回復させるその道具は、ツナの体内に入ったことよって活性化した。

「なるほどな、ネズミが2匹紛れ込んでいやがったのか。」

「どうかしら。貴方も人のことを言うより、自分の心配をしてみたら？」

その言葉が放たれるや否や、サブラクは魔法陣に囲まれ、その手足は光輪の枷に填められた。

「!?!?」

「フフフ・・・私のLightning Bindの居心地はどうかしら？」
ライトニング・バインド

なのは共に立っていたのはフェイト・テスタロッサ。Lightning Bindは空間に不可視の魔法陣を設置し、それに触れた対象の手足を拘束するトラップ。

「なるほどな、これが貴様らの本気と言う訳か。」

「？ - BURNER!!」
イクス・バーナー

「Divine Buster!」
ディバイン・バスター

「Plasma Smasher!」
プラズマ・スマッシャー

炎と雷が異なる威力を發揮し、お互いを補い、魔力が爆発する。

地獄のような光景を目の当たりに、壊刃サブラクは一瞬にして形を失った・・・

7-3 長門VS周防九曜

「キシヤアアアアアアアアアア!!!」

「その僕ちゃんがあたしの相手かい?・・・腕が鳴るねえ」

気高く咆哮をする鋼龍クシャルダオラと笑みを浮かべるSOS団門外顧問の鶴屋がそこにいた。

元々反転世界で四古龍の一体として存在していたクシャルダオラ。鋼の身体に身を纏いながらも暴風を操り、軽快に飛翔して獲物を追い詰める。その圧倒的力を前に幾人もの狩人が挑み、ことごとく打ち負かされている。

しかし、一方の鶴屋は負けるわけにいかない戦いではあるが楽しんでいるかのような印象を周りに与えていた。

むしろ、その表情自体、相手方にとっては重圧がかかる。

次の瞬間、鋼龍が吼えた。

大きく翼を広げ、竜巻のようなブレスを吐く。

鶴屋はいきなりの攻撃にも慌てず、身を翻して軽々と避けた。

((ほう・・・小娘にしては随分な身のこなし。逃げ道のない竜巻に退路を瞬時に判断するとは・・・))

クシャルダオラは古龍が持つ独特の手段で、言語として鶴屋の脳内に直接送ってきた。

「ふふっ・・・褒めてくれて嬉しいもんだねえ。・・・でも」

鶴屋は一瞬にしてクシャルダオラとの距離を数センチに縮め、渾身の一振りを拳に込めた。

「・・・お前らは私の大事な人を苦しめた。・・・もう謝ったって遅いっさ・・・！」

クシャルダオラは血しぶき一つ流さずその場に力なく倒れた。・・・いや、死に至った。

「あいにくこつちも時間がないっさ・・・次に行かせてもらっつにょろ。」

「長門！右だ！」

俺は長門と一緒にあのデタラメな力を持った九曜と戦っている。正直俺は何の役にも立たん。逆に足手まといになるだろっつからな。・・・そこ、ヘタレって言うな、ヘタレって。

それに対して九曜の奴、どんだけチート能力だよ・・・。どこそその波動球を撃ってきたり、テレポートに周囲を爆発させる能力・・・やれやれだ。

長門も負けてはいない。九曜が長門に急接近するたびに九曜の攻撃をぎりぎりの所で受け流し、自らの攻撃を当てようと腕から光状の渦を九曜に向ける。

「何故 何故 何故 ……？」

ん？

九曜の周囲を包む空気が変わった気がした。

「……下がって。」

「……長門？どうして……」

「……くっ……！」

九曜は自ら核爆弾のような凄まじい爆発を起こした。長門はそれを
かろうじてバリア状の物で防ぐ。

「なんなんだ一体……まさか、自爆……！？」

「……違う。」

気が抜けた一瞬で九曜は爆発の中から長門に一気に迫ってきた。も
ちろん長門はバリア起動中につき対応が少し遅れてしまっていた。

「最期……」

「まだこっちにもいるってことを忘れて欲しくないっさね……！」

光状の刃に切り付けられそうなその場所に、突如として鶴屋さんが
乱入してきた。鶴屋さんはそのままの勢いで横から拳を突き上げ、
九曜を吹っ飛ばす。

「はぁ……はぁ……大丈夫かい、キヨン君。」

「鶴屋さん……ありがとうございます！」

「まだ安堵するには早いによるよ。」

九曜はまるで何事も無かったかのように立ち上がり、刃をまた出してこちらへ間合いを詰めてきた。

長門はそれに応戦し、時折爆発を繰り返しながら剣を交えていく。

「キヨン君……」

「な、何でしょう、鶴屋さん。」

「今有希つ子と戦ってる周防九曜つて子、桁外れさね。まともじゃり合っても勝ち目はない。」

「でも……!」

「そこで提案さね。私と有希つ子で何とか彼女を食い止める。キヨン君にはあそこに向かってほしいによる。」

「……あれは……!」

鶴屋さんが示した方向を見ると、そこには拘束されているハルヒと拘束のためのボタンが取り付けられていた。

「今から作戦を伝えるよ?……」

九曜は長門と剣を交えるうち、かなりの攻勢に入っていた。長門は現在受けてに回りつつ、隙を伺っている。そこへ、とてつもない速度で鶴屋が接近してきた。

「はあああああ！！」

拳を開き、思い切り九曜の腹部にぶつける。九曜はそれを先の長門のようにブロックしていた。

「くっ……これでもダメか……!？」

九曜はそのまま刃を振るい、鶴屋を吹き飛ばす。

「ぐあっ!!!」

致命傷こそ免れたが、肩に鮮血が走った。

長門も疲れの色を見せていた。九曜はテレポートし長門の背後に回り、振り返る無防備な長門に刃を振り切った。

そこへ、大きな音がした。

この宮殿内自体が広いため、その音は鮮明だった。

九曜が目をやると、そこにはキヨンがハルヒを抱きかかえていた。

九曜は有無も言わずキヨンに飛び掛かり、刃を向けようとする……しかし。

「……かかったわね。」

「……!……」

そこにはブラックロックシューターがいた。

「あたしはそのゾーンとゾーンを倒すだけだったからね。手持無沙汰だったし丁度良いわね！」

大きく厚い銃口を九曜に向けた。

「ロックキャノン！！！」

その声がしたや否や、九曜は一気に飛ばされ、その位置には長門と鶴屋が待ち構えていた。

「待っていたっさ、この時をね！！！」

鶴屋は思い切り九曜を蹴り落とし、地面にたたきつけた。

「有希っ子！」

「 ¥ × 」

高速の呪文と共に長門は打ち付けられた九曜の目にさらに手を置く。周防九曜が、動かなくなっていた。

8話 く救出く

「当該データベースより天蓋領域を削除、創造主駆除の表面を凍結、ブラフデータに書き換えを完了する」

長門の言葉と共に、九曜は動かなくなった。これで、天蓋領域からの攻撃を一時的に無効化出来ると言っ。こつちからしたらありがたい限りだな。あんなのがまた襲ってきたりしたら、それこそ命の保障はねえ。

「とりあえず、涼宮さんを早く安全な場所へ避難させる必要があるありますね。」

「そうだな。安全な場所・・・この近くに安全な場所なんかあったか？」

もはや何でもかんでも見たことのある敵キャラがこれでもかと言わんばかりに出現するからな。そんな場所を探す方が大変だ。

「そだつ、あたしん家来るかいつ？」

「鶴屋さんの？」

「そそっ！うちはかなりのセキュリティが張ってあるし、古泉君とこのカモフラージュでどうにかなんないかなっ？どうによる？」

「それは名案です。鶴屋家ならば一般家庭ですし、家が広い分様々なトリックが効きます。」

古泉、俺は鶴屋さんの家は非凡的な気がするぞ。あんな豪華な家見たこと無いし……と、他に良い場所が見つかるはずも無く、モノローグに終わる。

「よし、じゃあ早く行こう!」

「その前に、お忘れじゃありませんか？」

「ん？何をだ？」

「涼宮さんですよ。鶴屋さんの家までどうやって運ぶか。」

「あー、なるほどな。そんなもん、機関の力でどうにかならんのか?」

「こんな敵の多い条件下で機関による搬送を行ってしまったら、それこそバレバレですよ。もっと庶民的な方法で行きましょう。」

「……何で皆俺を見るんだ。」

「えっ、い、いやっ、キヨン君なら力もあるし、涼宮さんをおぶっていけるかなあと……」

そうきましたか、朝比奈さん。

「僕が運んでも良いのですが、貴方から非難の目を浴びさせられそうですね。役者不足な僕よりは、貴方の方が適任かと。」

「凡人に走力を期待しても無駄だぜ?」

「それよりも早く涼宮ハルヒを運ぶべき。」

・・・長門さん、怖い。怖いです、すみません。

「わーった、わかつたつて。俺が運ぶ。ただ、もう一つ純粹な問題がある。ハルヒをおぶった状態で、こんな大人数で突っ走ってたら絶対に敵に感づかれるぜ？」

「それならば最低限の戦力に分けましょう。貴方と涼宮さんは絶対に着かなければならないので長門さんと。朝比奈さんは路中何かと不便でしょうし、鶴屋さんを。僕はブラフを立てながら機関として動きますのでご心配なく。」

「よし、それで行こう。」

そして現在鶴屋さん家に掛ける俺達。

健全な男子の諸君、覚えておきたまえ。気を失った状態の女子を運ぶということは、何よりも気まずいぞ。気を失っているからこそ全体重がかかるわけであって、いろんな柔らかい物が当たr(ry
・・・ゲフンゲフン。それはそれとして、長門はさっきから一体何をやってるんだ？

「ステルスリング。ダークパレスを去る際、沢田綱吉から渡された。」

「なんだそれ？」

「成分は霧系のランクの低いものと思われる。しかし、カモフラージュが専門のため、相手がこっちを見つけにくくなる。」

おお、長門、素晴らしいまでにわかりやすい説明だ。つまり、霧でかく乱させてこっちの位置を分かりにくくするわけだ。

「・・・そう。」

そう言ってから無言で走ること40分。結構走ったな。だが、まだ鶴屋さんの家までは3キロくらいある。

「ついに来やがったか。」

周りを見ると、小さな竜の群れが俺達を囲んでいる。どこから湧いたのか、相当な数だ。

「貴方はただ真っ直ぐ走ればいい。私は貴方を追いながら小竜の群れを消去する。」

そう言っただけで長門は例の早口で呪文のようなものを唱える。すると、地面から火柱が吹き起こり、次々と小竜の群れを薙ぎ払っていく。

「よし、今だ！」

こうして俺は、心に何か引っかかりを持ちながらも、鶴屋さんの家へ全速力で向かうこととなる・・・。

9話 く休息は無し

「皆よく頑張ったねっ。ここなら当分の間、平気なはずだから、ゆっくりしていくっさ。」

はにかみながら鶴屋さんは笑った。すでに俺達は先の戦闘でボロボロになっていたが、ハルヒをここまで運べたのは大きい。

「小休止ですね。僕も、さすがに少しくつろぎたい所です。」

「ふええええええええええ、やっと着きましたあ〜。」

「……………」

皆それぞれ、相当疲れているらしい。俺だってそうさ。なにせ、気を失ったことで全体重がかかるハルヒをおぶってここまで走ったんだからな。だが、やはり一番疲れているのは連戦練磨の長門だろう。

「長門、大丈夫か？」

「問題ない。」

とは言うものの、危うく九曜に消されそうだったからな。

「お前も頑張ったからな。ゆっくり休んでくれ。」

「了解した。」

俺は長門が頷いてテーブルに置いてあるドラ焼きに手を出すのを確認してから、鶴屋さんが用意してくれた布団にハルヒを下ろす。

「・・・ハルヒ、間に合ったぜ。」

そして、小1時間ほど経っただろうか？

「んっ・・・。」

「ハルヒ？」

「ここは・・・？」

「鶴屋さん家だ。」

「何でここに・・・？」

「お前が急に貧血で倒れたんだ。そこへ通りかかった鶴屋さんが、これは大変だと運んでくれたんだ。」

「・・・？」

さすがに強引だったか。だが、これで納得してもらうしかない。口裏合わせでは、そういうことになっている。

長門は食事のためにキッチンへ、朝比奈さんと古泉は、鶴屋さんやここに来ている森さん、荒川さんとともに今後の会議をすると長門について行ったもんだから、ここには俺とハルヒしかない。やれやれ、助け舟は無しだよ。

「アンタ・・・ここまで運んでくれたの？」

「あ、ああ、大変だったんだぞ。ここまでとはいえお前をおぶって走ったんだから。」

「ここは隠さんでも大丈夫だろう。」

「・・・！！アンタ、あたしをおぶってたの！？」

「あ？何を気にし始めるんだ、コイツは？そりやお前をおぶらなきゃ運べんだろ。」

「アンタ、人前で恥ずかしくないの！？」

「・・・。顔を真っ赤にしてハルヒはそんなことをほざきやがった。なんだよ、俺はそれどころじゃなかったんだぞ？敵に見つかったりしたら大変なんだからなって、そんなことを言えるはずもなく。」

「むう・・・今回は大目に見てあげるわ・・・。」

「・・・すいません、コイツ放り投げても良いでしょうか？・・・ま、これが普通の反応なんだろうな。」

「俺もやっと精神的にも回復し始めた・・・その時だった。」

「・・・見つけたぞ、無の少年よ。」

最悪だった。周りには視認するのも難しい特殊なバリアのようなものが張られている。多分長門対策だろう。さらに、この件もある。

「!?!? 一体何なの!?!?」

ハルヒだ。ハルヒが起きちまったことで、この事実を知られてしまったことになる。クソッ、なんつうタイミングで来やがる! しかも、相手は漆黒のマントに身を包む騎士ゴルペーザ。マズいな、今回ばかりは生きられる気がしねえ……。

「おい……ハルヒ……」

「キョン!! これは一体どういうことなの!?!?」

「うるせえ!?!?!」

ハルヒがビクツとして固まる。この時の俺はどういう顔をしていたのだろう、珍しくハルヒが反論しなかった。

「俺から離れるなよ。」

これからが本番だ。

10話 無の力を持つ青年

まずい、まずすぎる。相手は俺の2倍以上の体格なだけでなく、さつき俺達が闇宮で出会したとてつもない奴等と同じ気配を感じる。しかし、それよりもっと気になることがあった。

「無の青年？なんだそりゃ。」

「未だお前の力は覚醒していないようだな。いいだろう。少し話してやる。・・・だがその前に。」

ゴルベージが指を鳴らすと、ハルヒは一瞬にして目蓋を閉じ、崩れ落ちた。

「！！ハルヒに何をした!？」

「案ずるな。少しの間眠ってもらっただけだ。それに、今その少女の力を使われたくないのだ。」

なんだろう、敵にしては随分穏やかな奴だな。まあ、ハルヒがこの話を聞かなくて済むからこっちとしても好都合だからな。

「その少女の力、情報改変能力といったところか。その力は創造主としての役割を与えられた証だ。だが、その力は強大であるが故に自分で

完全に制御することはできん。力の暴発による身の破滅は幾度となく我々が見てきた光景だ。おそらく涼宮ハルヒの消滅は時間の問題であったであろう。・・・お前が存在していなければな。」

「・・・どづいうことだ？」

「力の暴発でいらぬものまで作り出してしまふ世界になる。その真逆の存在がお前なのだ。」

「どうやらコイツも分かりにくく、なおかつもったいぶった言い方が好きなようだ。どこかの超能力男と似てるな。やれやれ。」

「つまり、お前がいることで世界は元あつた形を取り戻すことができる。そう、お前の能力である”全てを打ち消す力”だ。お前が作る消滅の力は制御されれば絶大な効果となるだろう。我々の中にも消滅の力を使う者はいるが、お前は別格だ。だからこそお前とその少女、両方の力が我々は欲しいのだ。」

「・・・悪いな、俺はハルヒがためえらに誘拐されてからかなり頭に血が上つててな。細かい話を聞いても、今の俺には目の前のお前が敵だつて

ことしかわかんねえのさ。」

「そう言つて俺はタンスの上に置いておいた太刀を素早く取り、ゴルベーザに振り下ろす。」

「憎しみとその場の自分の心情だけで倒せるほど敵は甘くは無い。」
「そう言つとゴルベーザはその太刀を軽く受け止め、刀身の真ん中から豪快にへし折りやがった。」

「なつ・・・!?!?」

「誰だつて自慢の・・・というか正確には長門に出してもらつたもの」

だが、自分の持つている太刀をあっさりへし折られたら、驚くだろうし、それに絶望感も漂うだろう？

俺は盛大に尻餅を付き、無残にも散ったラストエクディシスを見た。あーあ、こりゃ絶対使いもんにならんだろうな。やれやれ、もうどうしようもねえじゃねーか。

「見たものが全てではない。輝きを忘れるな、五感を使ってこの状況を打開するのだ。」

・・・は？何言ってるか分からん上に、コイツは随分余裕なのか？さっきから俺に教えるかのように戦いやがって・・・ん？この音・・・どこかで・・・！！

どうやら、俺はこのゴルベーズの言った通り、見るものにはっか気が行つてたようだ。おかげで、わかったことが一つだけあったぜ。

「どうした？ここで終わりか？」

「へっ、お前、中々良いこと言っんだな。」

俺は塞がっている部屋の障子を思いつきりぶつ叩いた。すると、半透明のバリアのようなものが、ガラスのように散らばり、そして・・・。

「フフフ、よく気が付きましたね。」

そこに立っていたのは意外な人物。それはSOS団のメンバーでも、鶴屋さんでも機関の人間でもなかった。長門と同じ空気をもしだしている喜緑さん。彼女がここに来ていた。

「私が薄くしたフィールドを、よく感じて割ってくれました。涼宮

さんも無事の様子ですし、長門さんたちもすぐ着きます。後はゆくりしててください。」

そう、俺が感じた音は、以前長門が朝倉と戦う時、変な空間でカマドウマみたいな奴と戦った時、そして九曜と戦った時に使った某ラム　ライバーのような壁の音。

その音が聞こえたため、その音のする方向で長門辺りが何かやってくれている、そう思ったのが功を奏した。おかげでようやく生きてまたこの地を踏めたような気がするぜ。

「さすがだ。お前の勘も相当冴えているようだ。さて、他の者たちも来るらしいな。ならばここで戦闘データを貰おうか。」

「貴方はどうやらあの方に命じられて来たようですね。しかし、こちらに彼がいる限り、私達はこちら側で戦わせて貰いますよ。」

喜緑さんの目つきが変わった。怒りでも憎しみでもない。ただそこに存在している物体を見るかのような氷点下のように冷たい目のそれだった。

11話 ～”Collapse”のリーダー～

「どうやらお前達を侮っていたようだ。」

まだ喜緑さんと戦ってもいないのに、ゴルベータはそんなことを口にした。一方、喜緑さんも微笑みを崩さないまま、その場に立っている。もしかすると視認できないような情報戦があったのかもな。

「キヨン・・・と言ったか。」

「？」

「忘れるな。お前の力、善悪の判断も無しに使えば全てを無に還す脅威の力となる。元々、その力に感情は無い。純粹な消滅と考えるも良いだろう。それをどう使うか、己自身に問うが良い。」

「お前は一体何なんだ？敵のくせしてさっきからアドバイスばかり言ってるような気がするが。」

「・・・私は己の闇に屠られた弱き者の身だ。現に私に陽が味方することなく、月によって召還された。私は罪を償わなければならぬのだ。私の話したことがお前にとっての助言ならば、それでも良い。」

そう言ってゴルベータは姿を消した。途端、一気に身体中の力が抜けた気がした。やれやれ、とんだ災難だったぜ。

幸い、ハルヒはまだ眠っている。この分ならさっきのこととも夢オチでなんとかかなりそうだ。喜緑さん、ありがとうございました。おかげで助かりましたよ。

「いえ、私も情報伝達に一瞬のミスがあったようです。本当ならばあの結界の中に入れたんですけどね。」

暫くして、古泉たち、さらにはツナたちも駆けつけてくれた。

「申し訳ありません。機関の方での異常確認が数分遅れてしまい、貴方の元へ応援を要請できませんでした。まさに始末書ものですよ。」

「そうかい。まあ、助かったんだからいいさ。俺もハルヒもな。」

「涼宮さんの容態は変化なしですか？」

「いや、さっきのゴルベージとかいう奴が、ハルヒに聞かれるとマズい話だったってんで眠らしたただけだ。」

「なるほど。それにしてもさっきの者……ゴルベージと言いましたか、一体彼は何が目的なのでしょう？」

お前がわからんのに俺がわかるかつーの。やれやれ、とりあえずここで休めるかな。

「束の間の休息だな。」

その聞き覚えのある声色に、全員が振り返った。そこには黒マント

の男と・・・朝倉がいた。

バカな・・・ようやく敵が去ったと思っただらもう来るのかよ・・・。
それにしてもなんだ・・・変な違和感を感じる。

「お久しぶりね。」

「朝倉・・・なんでここに・・・」

「フッフ、連れてきてあげたのよ、こちら側のリーダーを。」

「リーダーだと？まさか”Collapse”のリーダーか。」

ツナが立ち上がった。どうやら、かなりマズい状況のようだ。確かにそうだろう。敵側のリーダーがここに来ているということは、ここももう安全じゃないってことだ。

だが、それにしても妙だ。何故このタイミングでここに来るんだ？
わからない・・・

「さて、それじゃあ早速紹介させてもらおうわ。私たちのリーダー。
名前は・・・」

黒マントの男がその法衣を脱ぎ払った。その見慣れた顔に、SOS
団だけでなく、ツナたちも絶句する。その姿を見て、俺の頭は真っ
白になった。

なんだって・・・？なんでコイツがそこにいるんだ？

「私たちのリーダー、名前は・・・そう、パーソナルネーム・キョ
ン。」

12話 く闇の主人公

「名前は・・・そう、パーソナルネーム：キヨン。」

「なっ・・・!？」

一体何なんだ？そこに立っている男の名前が俺のあだ名と同じ・・・？それに俺にそっくりだと・・・？これは何の冗談なんだ・・・？

「私達”Collapse”は一人一人の力が輝きすぎる。誰か頭の切れる、純真な思考回路のリーダーを立てる必要があったの。ならば話は簡単。貴方がリーダーになるに相応しい。」

「ちょっと待て。それじゃ俺が二人いる理由にはならんぞ。大体・

」

「いや、辻褄は合う。」

ツナはきっぱりと言いきった。そんなアホな。

「”Collapse”の奴らは腕が立ち、気性の荒い者が多い。それを危惧し、また別のパラレルワールドからキヨン、君を連れて来たならば、ここに君が二人いることに説明が付く。」

確かにそうかもしれん。でも、俺は目の前に自分と同じ人間がいることを、黙認することなんて、できなかつた。

「一体お前等は何がしたいんだ・・・？」

「あら、貴方自身がそれをわかっていないのね。それは致命傷ね。それに沢田綱吉と言ったかしら？貴方の考察も間違っている。ここにいる彼は、彼自身。パラレルワールドから連れてきても、彼の今の能力は手に入らない。だったら・・・？」

「・・・！！まつ、まさか、同時空間から連れてきたってことですかああ！？」

「あ、朝比奈さん？それは一体・・・？」

「朝倉さんが言ったことがもし私の解釈で合っているのであれば、そこにいるキョン君は貴方と同じ身体、つまり今のキョン君よりもつと後の世界のキョン君なの。」

「そ、そんなバカな。俺がタイムトラベルして今俺と向かい会うなんて・・・！！」

言ってしまったから気づいた。そう、俺はすでにタイムトラベルで俺自身と会っている。消失のあの日、長門にプログラムを塗布する時。あの時は俺の頭が朦朧としていただけで、その意識がしっかりしているバージョンなだけだ。

それに、朝比奈さんが最初に未来人と名乗った時に言った。時間は流れている物ではなく、コマとして一つ一つが存在しているのだとそれが正しければ、その一つから俺を連れてくるなど、朝倉やさっきのゴルベーザには簡単過ぎることだろう。

そう考えているうちに、B RSが銃を構える。

「！？お、おい！」

「何をボサツと考えている？そこにいるキョンがダメーならばノコノコと出てきた時点で倒しておく方が手っ取り早いでしょう？」

「ふふふ、そっちのグループにも貴方のような人がいるなんてね。もしかすると、こっち側に居た方が心地良いんじゃない？」

「・・・私は、無駄に人を殺したり実験用のモルモットにはしない。」

「あら・・・そんなにデッドマスターのことが心配かしら？」

「・・・!!」

するとB RSは有無も言わずに朝倉に飛びかかった。一瞬の出来事だったため、俺達は見ていることもままならなかった。

その一瞬で大銃を長太刀に変化させたB RSは、そのまま朝倉は斬り抜こうとする。

「なるほどね。」

しかし朝倉は、それを軽やかに避け、空を切ったB RSの足の根元を掴み、こちらへ投げ返した。

「・・・くっ!!」

「貴方達はいずれ絶望を噛んで味わうことになる・・・。でもそれは今じゃない。それまで、せいぜい涼宮さんとお幸せにね。」

何時ぞやと全く同じ台詞を吐き、呆然と立ち尽くす俺を他所に、朝倉とそこにいた”キョン”は砂のように姿を眩ました・・・。

13話 喪失と疾走

さつきから俺は目の前が真っ白だ。
信じられない現実を叩きつけられて。

確かに、俺が二人いたことに、今更何の疑問も持たない。それこそ朝比奈さんの言っていた『今の俺よりも後の世界の俺』で説明が付く。

でも、決定的な違いが一つあった。もう一人の俺が、さつきまでハルヒの力を抽出しようとしてハルヒをさらっていた”Collapse”側にいたってことだ。

何故なんだ？

どうしてあつちの俺は、あんなに笑っていたんだ？

・・・ダメだ、頭が混乱する。あつちの俺は何を考えているんだ？
・・・というより・・・俺は・・・俺は誰なんだ？

「我々も驚いていますが、どうやら彼は完全に錯乱しているようです。長門さん、彼を落ち着かせることは可能ですか？」

「現時点では不可。圧倒的情報量に錯乱している個体に、さらに沈黙プログラムを塗布するのは、リスクが高い。」

長門・・・何を言っているんだ・・・？古泉・・・俺は錯乱なんかしちゃいないぜ・・・？

「・・・どうやら一刻の猶予も無いようだな。」

「沢田氏は何か解決法を？」

「俺達に今すぐ解消しろ、というのは愚策だ。だが、俺達”Bus ter”にも急な事態に対して常に冷静沈着な人物がいる。ブラックロックシューター、紅世へ行き、現在戦えるフレイムヘイズを全員連れてきてくれ。セイバー、麻倉家と恐山の潮来を呼んできて欲しい。俺は守護者を全員集める。」

「わかったわ。」

「承知。」

それぞれ散っていく二人を見て、俺は思ってもいないことを口走った。

「もう・・・やめてくれ・・・。」

「?どうした、キヨン。」

「・・・もうたくさんだ!!何で俺がこんな漫画チックな空間に閉じ込められなければならぬ!!?何故俺は自分と全く同じ人間を見なきゃならない!?!」

俺は・・・俺は・・・ただの人間だ!!」

生まれてこの方、久しぶりに怒鳴り散らした俺は、宛てもなく走っていった。

「・・・キヨン君!?!」

「・・・。」

「まさか彼があそこまでになってしまつとは・・・」

「朝比奈みくる、長門有希、古泉一樹・・・キヨンを頼む。」

ツナも自分の場所へ帰っていった。

「フン、やってくれる。」

闇宮では会合が開かれていた。

「どうかしら。まだ奴らには”涼宮ハルヒ”がいるわ。それにここにいる”彼”は駒に過ぎない。本当に欲しいものは両方”Buster”側にある。」

「ただ、あのキヨンとかいう無の力のガキは今ならこちら側に付けさせることが可能じゃないか？」

「いや、まだだ。もう少し、彼の精神をくすぐるようなものが必要だ。そうすれば彼は完全に”Buster”の手から墮ちる。」

「ならば今度は私がやってみせましょう。必ずや”Buster”壊滅を狙いましょうねえ。」

一筋の闇が、闇から消えた。

14話 く迫り来る闇

ひたすら・・・ひたすら走り続けていた。

行き先もわからない。俺がどこへ向かっているのかもわからない。むしろ、俺は何故走っているのかも忘れかけていた。

ふと気が付くと、辺りは闇色に包まれていた。薄暗く、あまり物も見えない。

どのくらい走ったのかは定かではないが、大分俺は息を切らしていることを今更ながら知り、近くにあった木に手をかける。

「・・・ハルヒ・・・俺は・・・どうしたらいい・・・?」

もはや生きる気力も無かった。いつそこのまま倒れたい。

「じゃあそうしてあげましょうか?」

聞き覚えのある声だ。・・・ハルヒなのか?

「あんたもまだまだね。声だけじゃ判断に迷うなんてね。」

姿を現した声の主はやはりハルヒだった。思わず安堵の溜息をつく。

「よくここがわかったな。」

「ええ。ここに来る気がしたからね。」

「ここに来る気がしたってお前・・・まさか待ってたのか？」

「悪い？」

悪くは無い。ああ、確かに少なからず嬉しいさ。だが・・・。

「全く・・・俺はもうダメかもな・・・。」

「どうして？」

「俺はもう、何も考えることができない・・・というか考えたくなくなっちゃった。この暗闇が今の俺の現状さ。」

「・・・そうね。」

ハルヒは一瞬顔を曇らせた。・・・ハルヒ？

「あんたのその顔じゃ、もうダメなのかもね。」

「・・・。」

「いつその闇に身を委ねちゃったら？闇は全てを覆い隠す。あんなが消えても誰も知ることはない。どう？」

・・・違う。

「・・・え？」

・・・違う。

「キヨン……。」

「違う！！お前はハルヒじゃない！！お前は誰だ！！」

「……。」

ハルヒの姿をしていたソイツは、あふれんばかりの闇と共に姿を変えた。

「人間風情がよく私を見られたものだ。今の貴様ならばあっさり飲み込まれてくれると思ったのだが……。」

「”Collapse”の奴か！？」

「ごもつともな推理だ。我は”Collapse”の将の一人、幽鬼ナズグルのアングマール。貴様という兵器を頂きにきた。」

漆黒の仮面、漆黒のマント、漆黒の鎧。こいつそのものが闇なんじゃないかという錯覚を覚えるほど、アングマールは禍々しい殺気で満ちていた。

その姿は恐ろしく、逃げなければならぬというのに身体が言うことを全く聞かない。俺に待つのは死しかない、そんな幻影も見えた。

「くっ……さっきのはお前の幻術か？」

「幻術……と言えば少し大袈裟だが、大きな齟齬はない。」

ようやく喉の奥底から出た言葉も一瞬で葬り去られ、アングマールはおもむろに剣を抜いた。

「さあ、無の力を秘めし子よ、我が闇に忠誠を誓って”Collapse”の元へ行くか、それともこの場で死期を迎えるか、選ぶが良い。」

闇に溶け込まれそうだった。

死に対する恐怖と闇に対する恐怖が入り混じり、俺は屈しそうになっていた。

・・・でもそうはいかなかった。

少なくともツナは俺が”Collapse”の手に渡ることを恐れている。恩人がだ。なら、もしここで死んだとしても、それはツナには好都合だというわけだよな。

「俺は・・・俺はお前等”Collapse”と手を組むことはない！」

「そうか・・・残念だ・・・ならば決別だ。」

アングマールは剣を大きく上げ、俺に振り下ろし、俺は恐れのおまり目を閉じた。

・・・痛くない。

それより、剣を受けたような気がしない。

ふと目を開けると、目の前にアングマールの剣と打ち合う長太刀が視界に飛び込んできた。

「！！！」

さらに、なにやら包帯のような、触手のようなものが、俺の腹に巻きつき、俺の身体ごと高く持ち上げた。

「じ、これは・・・！？」

「どつやら間に合ったのであります。」

慌てて振り返ると、そこには朝比奈さんのようなメイド服を着た、桃色の髪的女性、そしてアングマールの剣と真正面から打ち合っている炎髪灼眼の女の子を見つけた。

「あんたたちは・・・前読んだ電 文庫の・・・！！」

「安心しなさい。あたし達は敵じゃない。立派な”Buster”の一員よ。」

スーツ姿の金髪の妖艶な女性もいた。間違いない。この人たちはあの文庫で読んだヒロインたちだ。

確か名前は・・・『万乗の仕手 ヴィルヘルミナ・カルメル』、『弔詞の読み手 マージョリー・ドー』、そして『炎髪灼眼の討ち手 シャナ』。我ながら記憶力も感心だが、まさかの援軍だと？こんな所に？

「何故ここがわかったんだ？」

「我々のリーダー格、沢田綱吉からの命があったとブラックロックスシューターから伝達があり、たった今紅世から戻った所なのであります。」

((現状理解))

髪飾りの確か『ティアマトー』とかいうものからも声が聞こえてきた。

「ほう、紅世の者どもを呼び寄せたか。だが止めておけ。我らには敵わん。」

なおもアングマールは薄い笑みを浮かべているように見える。仮面の下の顔は全くわからないが。

「お前が悪名高いナズグル？思ったより弱そうね。」

剣を打ちつけているシャナ自身が一番力量はわかるはずなのだが、そんなに手を抜いているように感じるのだろうか。

「最後の警告だ。我らに刃を向けるのは得策ではない。引くがよい。」

「私達の今の任務はキヨンという人間を守ること。今悠二とカムシスがツナの元へ向かっているわ。じきにこちらに来る。」

「フツッ、貴様の首領である沢田綱吉が着く頃には、ここにいる全員灰と化しておるわ。」

「随分な自信ね。」

「それは、私がいるからさ……。」

急に寒気が俺を襲った。この感じ、俺は受けたことがある。そう思っている……

キイイイイイン!!!

鈍い金属音が再び暗闇に轟いた。

刹那、ヴィルヘルミナは俺を下ろし、シャナの元へと向かう。

「お前は……!!!」

そこには、銀髪長髪。見る者全てを恐怖にさせるシャナの物よりも長い太刀。

セフィロスだった。

15話 深まる闇と紅蓮の炎

俺は、マージョリーさんとやらに見張られ、安全を確保している状態である。

やれやれ、女の人に守ってもらうとはな。長門以来の驚きだぜ。

なんてモノローグはともかく、今戦っている奴ら・・・シヤナたちに目を当ててみようか。

シヤナは、セフィロスと対峙しつつ、ヴィルヘルミナを見る。

「私がこの銀髪の長太刀使いを倒す！ヴィルヘルミナはそっちの竜騎士をお願い！」

「わかったのであります！」

((開戦))

ティアマトーの声と共に二人は大きく跳躍し、セフィロスとナズグルの距離を離れた。

「我らを分断したか。それだとしても、貴様らとて我を倒すことは叶わぬぞ。我が力の根源は怒り。その怒りを断ち切らぬことには、我は倒れぬ。」

「やってみなければわからないのであります。」

ヴィルヘルミナは仮面を纏い、得意の自在法を秘めた包帯を上手く

相手に絡ませ、ナズグルを上包帯もろとも放り投げる。

すると、その包帯は自在式と共に一気に熱を帯び、爆発する。

「ほう……中々やるようだ。」

ナズグルはその攻撃を易々と受けきり、高らかに口笛を吹き鳴らす。ナズグルは本来竜騎士。その口笛と共に現れたのは、鯨のような顔を持った特異な竜。それに跨り、竜は咆哮する。しかしその咆哮は、むしろ金切り声に近く、辺りのものを吹き飛ばしていく。

「なんとという声……これでは手が出せないのです。」

（（時期尚早））

ヴィルヘルミナは一旦間合いを取り、お互いが位置する上で最も着地性に富んだ場所に立った。

一方、銀髪の太刀使い『セフィロス』と炎髪の太刀使い『シャナ』は、未だ打ち合っていない。

「その刀は良い刀だ。刀身も美しく、私の正宗にも匹敵する。……しかし、使い手が幼すぎて文字通り宝の持ち腐れだな。」

（（誘いに乗るな。あの者はまだ我らと戦ってすらいない。焦らず慎重に行け。））

「うん、わかってる、アラストール。」

首に下げたペンダント。これも紅世の王『アラストール』をこの世での意思伝達に使うものである。

「あんたこそ、男にしては華奢なんじゃない？なまくら刀と一緒に葬ってあげましょうか？」

「フフツ・・・面白い娘だ。」

シヤナは先手を切った。

一気にセフィロスの元へ駆け寄り、渾身の斬りを見せる・・・が、セフィロスはそれを一瞬の判断で避け、シヤナの顔面に柄を直撃させる。

「・・・つ・・・!?!」

「やはり戦い方も無防備だ。私が本気になるまでもないか。」

「言ってくれるじゃない!」

今度はシヤナの周りに纏わり付く炎を剣先の一点に集中、炎は大きな円形の塊となり、セフィロスに注がれる。

「・・・ほう・・・。」

セフィロスは剣一振りで炎を打ち砕く・・・も、とつさに左に回りこまれたシヤナに対処できず、左腰にしたたかに太刀を打ち付けられる。

「これでも本気だせない？それとも、今のが本気かしら？」

シヤナも懸命に挑発する。セフィロスの方も、さすがに柄で倒せる相手ではないと見たようだ。

「いいだろう・・・後悔するが良い。」

シヤナに向かって一直線に迫ったセフィロスは居合いの形を取り、シヤナにぶつける。

シヤナもそれに対応していた。

「ふん、まだまだよ・・・!？」

刹那、シヤナの服を、肌をかすめる音がした。・・・次の瞬間には、シヤナは吹っ飛んでいた。

「何・・・これ・・・!？」

シヤナは目を見張った。

セフィロスは一振りしかしていないはずである。だが、確かにシヤナの服は所々引き裂かれ、血がにじみ出ている。

「よく今のかすめるだけで済んだな。当たりが浅いとは思ったが・・・中々の腕前だ。」

「アラ・・・ストール・・・これは・・・!？」

(ふむ・・・。我にも見えなかった。おそらく、一振りしただけで剣圧が幾重にも分かれ、波動のようなものとして襲い掛かってき

たのであるぞ。()

「幻術じゃないの・・・？」

() (そう思いたいのには山々だが、これは本物の傷だ。あの若武者、
恐るべき力を持っているようだ。()

シヤナは劣勢を感じ始めていた。

16話 く召集される剣

「くっ……！」

シヤナは立ち上がり、邪悪な笑みを浮かべるセフィロスを真っ直ぐ見た。

（あの剣撃、おそらく長太刀のもたらす力であろう。並大抵の宝具では無いようだ。）

「じゃあアラストール、あいつを倒すには……」

（うむ……奴の剣をどうにかしない限り、我々に勝機はないであろう。……最も、奴もサブラク同様万能では無いはずだ。必ずやどこかに弱点はあろう。）

次の瞬間、セフィロスは動く。

一度の跳躍で大分離れていたシヤナとの距離を一気に詰め、まるで自分の身体の一部であるかのように太刀を振り回す。

「はあっ……！」

シヤナも太刀【贄殿の遮那】を軽々と扱い、セフィロスの重い何度もの剣撃を受け身していく。

ただし、そのまま一回一回ありのままにぶつけることは許されなかった。

一度剣を交えるだけで剣圧のようなものが飛び散り、拡散されてシヤナに降り注いでくる。シヤナとしても劣勢を余儀なくされ、完全に受け手に回っている。

「貴様ら” Buster”には、3人の偉大なる剣士がいると聞いたが・・・どうやら一人はお前のようだな・・・。」

「何!？」

「私の剣をここまで受けて立っていられるのは、我が友クラウドかその偉大なる3人の剣士だけだからな。

・・・だが・・・所詮は” Buster”。甘さを捨てぬ限り私を斬ることは叶わんぞ?」

「!?!？」

セフィロスは今までとは全く違う方向から剣を降ってきた。

シヤナは決死に対応しようとしたが、剣を打ち合った瞬間、一気に吹き飛ばされる。

先程の剣圧のようなものとはまた違う感触であった。

セフィロスはまるで力を出していないかのような繊細な一発に、これだけの力が込められている。そう考えただけで、シヤナは圧倒的不利に滅入っていた。

「・・・くっ・・・どうやって・・・アイツを・・・。」

「ほう・・・まだ口が利けるほど元気なのか。その華奢な身体にしては上出来だ。」

セフィロスは剣に力を込めた。

「だがまだまだ私を楽しませるほどの力は持ち合わせていないようだ。可哀想な小娘よ・・・。」

「……うるさい、うるさい、うるさい！お前はあたしが倒す！」

シヤナも自分の力の限り太刀を持つととする。だが、もうすでに身体はスタボロ、筋肉にさえ力が入らない。

「決別の頃合だ。跪き、自分の最後を見届けるが良い……。」

セフィロスは剣を一振り、刹那、大きな波動のようなものが剣から発せられ、シヤナへと向かっていく。

『神速：八刀一閃』。

凝縮された剣撃が、刃の形となって具現化され、対象を消滅させる。ただでさえ傷ついたシヤナには、惨すぎる技だ。

((シヤナ!!))

「……!!」

シヤナは灼熱色の目を細めた。もう、動けない。彼女の周りが白く染まった。

「・・・エクスカリバー！！！」

聞き覚えのある声が、空にこだまする。
強すぎる光がセフィロスの一撃を包み込み、やがて消滅した。

「・・・まだ生きていたのか・・・セイバー。」

「貴様は忘れてはいまいか？私は英霊。私には死など無い！」

シヤナとは対象的な蒼いドレスに白銀の甲冑、そして。

「この子に手出しはさせない！・・・大丈夫、シヤナ？」

「・・・ブラック・・・ロックシューター・・・。」

そこに立つのは2人の剣士と1人の銃士。

「中々楽しい茶番になりそうだな・・・。」

セイバー、ブラックロックシューター、シヤナは、セフィロスに相対する。

「今は勝つことよりも、撃退を優先させるのよ！」

「承知！」

そして、火花が散った。

17話 悪夢の災厄

「クク・・・お前達に一度だけ忠告してやろう。私はその無の少年を迎えに来ただけだ。こんな所で小さな抵抗を見せても、むなしくなるだけだぞ?」

セフィロスは改めて大太刀の柄を握り締め、邪悪に微笑む。

「フツ、問題外だな。キヨンは我々の仲間だ! 貴様等”Coilapse”には縁の遠い代物だ!」

身体が思うように動かないシャナをブラックロックシューターに任せ、聖剣エクスカリバーを持つセイバーは、自身に満ちた顔つきでセフィロスを見る。

「セイバー、お前はどうかやら勘違いをしているようだ。3人がかりならば私に傷を負わせることができると思っているようだ、明らかに多勢に無勢だ。」

お前程度の英霊では私に触れることすら叶わん。」

「どうかしらね。過去の英雄:”Buster”のクラウドは一人で貴方を封じ込めたみたいだけど?」

ブラックロックシューターはシャナを担ぎつつ、にんまりと笑う。

「そう、確かにあいつは私を唯一跪かせた男だ。」

「じゃああたし達が二番目よ!」

最初に飛び出したのは、意外にも大ダメージを受けているシャナだった。

灼熱の翼を大きく広げ、剣にも炎を纏わせる。

「親のいない小鳥は巣に帰るがいい。」

セフィロスはその剣を受け流し、そのまま剣圧でシャナを吹っ飛ばす。

刹那、セフィロスの視界が外れた一瞬に、セイバーと銃を太刀に変えたブラックロックシューターが詰めていた。

「はぁあああ!!！」

凄まじい爆発。

立ち込める煙の中、セフィロスだけが不気味なほどの笑みをこぼしていた。

当然、セイバーもブラックロックシューターもことごとく地面に打ち付けられている。

すると、地面に一筋の水が滴った。

「……!?!ま、まさか……あの剣は……」

「どう……したの……セイバー……?」

「あの剣は……まさか妖刀：村雨か……!?!?ということとは……奴は……!!！」

「ほう……さすが数百年の時を超えた英霊だ。そう、私の母の名はジェノバ。500年前の英雄である星間消滅体だ。」

「何！？あの災厄が英雄だと！？とぼけるな！」

「何を怒っている、セイバー？・・・ああ、そうだったな。母はお前の世界にも行ったことがある。」

怒りと憎しみの表情のセイバーに対し、完全なる余裕を洩らすセフィロス。

対極する両者は、睨みあっていた。

「セイバー、一体どうしたの？貴方がそんな顔をするなんて・・・」
ブラックロックシューターでさえ、不安な顔を見せた。それを見て、セイバーはセフィロスから視線を逸らさずに語りかけた。

「私は、私の世界で恐怖の象徴であった聖杯を破壊し、ある男に別れを告げた。だが、私は沢田綱吉の力を借りて再びその男と出会うことが叶った。

・・・しかし、その男はもういない・・・。」

「・・・え・・・？」

「彼は私の大切な人だった。心の底から愛していた。・・・だが、それは断ち切られた。・・・空から降りし忌まわしき災厄ジェノバによって。」

奴の母であるジェノバは、その私の愛する者を何の躊躇いもなく殺めた。私のマスター・・・衛宮士郎を。」

「・・・!!！」

「ならばどうする、セイバー？偉大なるジェノバの遺伝思念を受け

「継ぐ私を殺したくはないのか？」

「ああ・・・もちろん貴様は殺す！」

「セイバー！！」

セイバーの美麗な蒼い眼が、血走った紅い眼に変わった。増幅する怒りや憎しみが、セイバーを抑えられなくなっていた。

ブラックロックシューターとシャナは、瞬間にしてセイバーがセフィロスの罠に掛かってしまっていることを感じ取った。

秩序や平和に捧げる”Buster”の力よりも、今は憎悪の念を強くしているからである。まさしくそれは、”Collapse”の力だった。

だが、二人にセイバーを止めることはできなかった。ブラックロックシューターも大切な者を”Collapse”に奪われ、シャナも奪われたときのことを思い一概に制止させることができなかったのである。

そんな戸惑う二人を他所に、セイバーは力のままにセフィロスに打ち付けていく。

一度対戦している相手だからこそ、何とか互角に渡り合っている。

セフィロスの剣圧を鉄壁の護りを持つエクスカリバーの鞘で防ぎ、スキあらばセフィロスへ攻めの一手を付く。

「そつだ・・・己の力を全て出せ。私を殺したいという欲望の赴くままに剣を握れ！」

セイバーはエクスカリバーに靈力を注ぎ込み、黄金に輝く大剣をセフィロスへと降り注ぐ。

セフィロスは剣を横一線にする。

「・・・!!」

その瞬間、黒き翼がはためいた。

セイバーの腹部のアーマーは無残にも碎け散り、またしても地上に叩きつけられる。

閃光。

相手の渾身の一撃を受け流し、まさしく閃光のごとき数撃を加える高度な技。

「セイバー・・・もっと怒りを剣に込めろ。聖剣はこんな弱き力ではない。」

「待ちなさい!」

ブラックロックシューターがセイバーの前に立つ。

「今度は私よね。」

「フフ・・・ブラックロックシューターか。お前の親友は元気か?」

「!?!」

「ああ、今はこう呼ぶべきだったか?デッドマスターと。」

「くっ・・・!」

「お前も怒りと憎しみを最大限に活かせ。そうすれば私に一撃でも触れることができる。」

「同じ手は食わない！」

ブラックロックシューターは黒太刀『ブラックブレード』を3段変化させ、ロックキャノン強化させた。

「ふっ！」

ぶつかり合う火花が、幾度も放たれた。

18話 く延ばされた時間く

「どうだ？少しはお前と私の力の差は理解できたか・・・？」

「・・・くつ・・・！」

かすり傷一つ負わせることも叶わない状況下で、ブラッククロックシューターはただがむしゃらにセフィロスと剣を交えていた。

「お前は型こそ崩しはしないが戦い方が幼稚すぎる。まるで剣を与えられた子供のようだな。」

「・・・何が言いたい？」

「そこにいるセイバーのように怒りで心を支配して見せる。そうすれば剣の切れ味は自ずと増していく。」

セフィロスはもう何度見せたか分からない剣圧を再び巻き起こし、その中で一歩ずつブラッククロックシューターを追い詰めていく。すでにシヤナは重なる怪我で戦闘不可、セイバーも血走る目とは裏腹に立っていることもままならない。

更にはセフィロスの何度交えても衰えぬ体力と余裕のある笑み。実際問題、セイバーのエクスカリバー、シヤナの炎撃、ブラッククロックシューターのロックキャノンと強力な技を全て見るも無残に打ち碎かれ、ほぼ打つ手無しでこの圧倒的戦力差の相手と対峙している、それだけでも彼女にとって苦痛である。

力に溺れる者は更に力のある者によって滅ぼされる。

こういった決まりはあるものだが、この現状でそんな迷信を信じら

れるほどブラックロックシューターに覇気はなかった。

「……そろそろ約束の時間だ。そこにいる無の少年を貰おう。」

「それは……させな……!!」

最後まで言う隙も与えられなかった。

「……おいおい……!! 一体どういことなんだ……!!?」

”Buster”と”Collapse”の戦力つてのは同じくらいだったんじゃないのか……?

ここまで連れ出してくれたマージョリー・ドーさんとやらもこの状況を震えている。

「アンタ……キョンって言ったわね。今のうちに早く”Buster”領内に戻りなさい。」

「……え……?」

「あの炎髪灼眼のチビジャリも、英霊セイバーも、かの有名なBR Sも負けた。そしたら次は……アンタが狙いよ。」

……そうだった。

ここ少しの間モノログがお……じゃなくてだ、ここ少しの間とんでもなく高度な戦いを見せられて、見入ってしまった。そのせいでセフィロスの狙いが俺だったってことも完全に頭から消え

てしまつてたよ。やれやれ・・・と言つてる暇じゃないよな。

「でも・・・貴方は・・・!?!」

「私はあの顔だけイケメン残忍野郎にここで時間を使わせる役。大丈夫、体力には自信あるから、3分は持つわ。」

カップラーメンか!?

などとツツコミを入れてる場合でもない。時間を使わせるって・・・まさか・・・!?!

「当たり前でしょ。アンタをあつちに渡す訳にはいかない。ま、私みたいな脇役さんにはこれが適任よ。チビジャリが負けた分、せいぜい暴れさせてもらつわ。」

「でも・・・」

「うるさいわね!他人を気遣うより自分の心配をなさい!全く・・・どっかのミスレスと一緒にだわ・・・」

「・・・」

「早く行きなさい。私だって万能じゃない。気が変わらないうちに逃げなさい。」

多分、何を言つても今は無駄なのだろう。こつこつ怖そうなお姉さまキャラには素直に従つておくのがベタつてもんだろ。

俺は無言も言わず走りだした。

「・・・茶番は終わりか・・・？」

「ふっ・・・最期のひと時を随分楽しませてくれたじゃない。」

「自から最期とは・・・話が早くて助かる。」

「アンタ、私を甘く見ないで欲しいものね。これでも紅世では戦闘狂で通ってたんだからね。」

「・・・面白い。」

セフィロスは動く。

あっという間に両者は反対岸に着く。

「・・・本当面白いわね、アンタ。フレームヘイズに欲しいくらいの人材だわ。」

「・・・お前の望みは叶わん。目的は果たさせてもらおう。」

「そうね・・・正直こんなに早いとは思っていなかったわ・・・私も落ちたものね・・・。」

マジヨリー・ドーは音も無く崩れ倒れた。

「・・・私達の負け・・・ね・・・アイツを取られたら・・・もう・・・チエックメイトだわ・・・。」

薄茶色の岩が赤く染まった。

ただひたすら走り続ける。
全く、本当に自分の運動神経の無さには脱帽するね。

確かに戦場からかなり離れたさ。小高い丘も見えなくなったしな。
ただ、少し走っただけでこれだけ息切れするとは・・・我ながら情けないもんだぜ。

とりあえずここは”Buster”領内なのか？

行きはもう何も考えずに来ちまったから、どこからどこまでが安全圏内なのか全く見当がつかん。

まあ、状況が状況だったからあれだが・・・もう少しオプション的な感じで付け加えて欲しかったもんだね。

「どうした？まだお前の場所には程遠いぞ。」

おいおい・・・嘘だろう・・・。

ははは・・・久しぶりに足が震えてるぜ。

冗談は夢だけにしてくれ・・・。

「何も抵抗を見せなければお前が死ぬことはない。これも契約だ。」

目の前に現れたセフィロス。

足にも限界が来ていた俺にとって、逃げ切れる要素はもはやゼロである。

コイツらに大層な力が渡っちまったらマズい、確かツナはそう言っていた。・・・なら俺が万が一殺されても、それは成功・・・なんだよな・・・？

「だが断る。俺は一般人だ。人間だ。そんな大層な力を持っているとも思わないし、お前らにやる義理もない。」

・・・言っちゃまったよ俺・・・

「・・・お前は彼奴に似ているな。」

「・・・は・・・？」

「自らが死を請い願うというのならば・・・絶望を送ってやるっ、キョン。」

セフィロスは太刀を構え、振りかざさんと俺を狙う。

俺は・・・目を閉じるしか無かった。

そして・・・

一瞬にして目の前が炎に包まれた・・・そんな気がした。

19話 度重なる護衛

目を瞑っていたからか、何が起きたのかさっぱりわからない。目を開けて自分の状況を確認しようと思っても、恐ろしさ故に目を開けることができない。

というか、俺はもう死んだのだ。あのセフィロスとかいうとんでもない剣士に。あの恐ろしい刀で。

・・・あれ？それならなぜ俺は目を瞑っているとわかるんだ・・・？

「・・・!!」

自分が生きているのか死んでいるのかもわからず薄目を開けると、視界に飛び込んできた光景で一杯になり、俺はハッと我に返っていた。

「・・・まだネズミが生き残っていたのか・・・。」

「大丈夫でありますか、キヨン殿」

桃色の髪、どこぞで見たメイド姿、そしてこの包帯。間違いない、ヴィルヘルミナ・カルメルさんだ。

「カルメルさん・・・どうしてここに・・・!？」

「アングマールを討伐した故、貴方を追ってきたのであります。」

((現状理解))

「ほう・・・あの獰猛なナズグルを倒したのか。フレイムヘイズと

いうだけのことはあるようだ。だが・・・」

セフィロスは刀を持ち替え、俺達に悪魔のような笑みを見せる。最初こそただムカつくだけだったが、今となってはもはや恐ろしさばかりがこみ上げ、俺の脳に危険信号を送ってくる。

もどかしいが、俺にどうにかできる相手じゃねえ・・・悔しいがカメルさんが今の俺の命綱だ。

「そこをどけ。私に勝てるかと本気で思っているわけではないだろう。」

「我々の任務は彼を”Collapse”の手から逃がすこと。例え自らが力尽きるがあっても、我々は任務を果たすだけなのであります！」

「ならば少しだけ遊んでやろう。先の金髪の魔女同様に早く片付けるのも悪くはないが、私も少し飽きてきた所だ。」

「・・・弔詞の読み手が・・・？まさか・・・」

「どうした？仲間の最期に怯えているのか？」

「・・・くっ・・・！」

「せいぜい楽しませてくれ・・・。」

セフィロスは跳躍し、ヴィルヘルミナも後に続く。セフィロスの剣が空を切り、剣圧となってヴィルヘルミナに降り注ぐ。

「はぁあっ・・・」

するとヴィルヘルミナは自らに取り巻く包帯を自在に操り、剣圧を跳ね返していく。
武器として使っている包帯自体、すぐ千切れてしまいそんな外見なのだが、そこはおそらく魔法か何かの力なのだろう、全く剣圧に劣らず長さを保っている。

跳ね返された剣圧はセフィロスが自ら処理し、ヴィルヘルミナに一気に詰め寄る。

セフィロスは剣を振るい、剣圧と共にヴィルヘルミナの包帯を切り裂かんとする。だが、ヴィルヘルミナもその剣圧とまともにやり合おうとはせず、攻撃を無駄のない動きでかわしつつ、自在法を練る。

「闇と共に散れ！」

ヴィルヘルミナの掛け声と共に幾重にも切り裂かれた包帯が光を帯び始め……

「ほう……」

セフィロスの元で一斉に爆発した。

それでもヴィルヘルミナは気を抜かず、爆発と共に出る煙からすぐさま離れ、セフィロスに近づかれたことで掠めた傷に包帯を巻き付け、そこに魔法陣のような文様を出す。

その文様が出たか出ないかの所でヴィルヘルミナは包帯を解き放ち、傷をあっという間に回復させていた。

味方という点を差し置いても、これは結構いけるんじゃないか……？
そう思って楽観視していた自分がいた。

しかしヴィルヘルミナの読み通り、セフィロスにはかすり傷一ついておらず、先程の攻撃が無だったことが見て取れていた。

「・・・少しは楽しめそうだな。一つ一つの攻撃が出が速く相手に読ませぬようにしている。・・・だが・・・」

そのセフィロスの言葉を最後に、周囲が急に慌ただしくなった。

「な、何だ・・・？・・・ジェット機の音か・・・？」

そう思った瞬間だった。

いきなり上空に見たことも無い飛行機が見えたかと思うと、俺達めがけて幾つもの何かが飛んできた。

お、おい！こんな時に爆撃か！？

「大丈夫か、キヨン！」

「・・・ツナか！？」

飛行機からダイブしてきたツナと見たこともない連中が俺とセフィロスの間に立った。

・・・どうでもいいことだが、一人ハルヒにそっくりな奴がいる。カチューシャまでつけて・・・髪は派手なピンクだが。

「助太刀ご苦労であります。」

「ヴィルヘルミナ、よくやってくれた。後は俺達に任せてくれ。」

「助太刀か・・・。意味の無いことだ・・・。」

セフィロスはまた悪魔のような笑みを浮かべた。・・・おいおい、この人数がいて平気な顔するって・・・どんな化け物なんだよあいつは・・・。

「俺が来て余裕をかましていられると思っているのか・・・？」

「お前たちが何人束になっても結果は同じだ。・・・だが、私にも契約条件がある。・・・また逢おう・・・」Buster”の戦士よ・・・。」

セフィロスは影と共に姿をくらました。

俺はもう、がくと膝をつき、盛大な溜息を吐いた。

やれやれ、今回は本当に死ぬかと思っただぜ・・・。・・・そういえば！！

「ツナ！他の皆が向こうの方でセフィロスにやられて倒れたんだ！」

「・・・分かっている。」

「え・・・？」

「今”Buster”側の医療チームを向かわせた。とりあえず”Buster”本部医療室まで搬送するつもりだ。」

何だかよくわからんが・・・助かりそうなのか？

半端じゃない疲れと精神的なダメージから、俺はヘトヘトになって身体がふらついていた。

「・・・大丈夫？」

白銀の髪少女に声をかけられた。

何だ？長門みたいな口調だが・・・さっきのハルヒみたいな奴と言
い、似てる奴らが集まった集団がいるのか？

「ほら、今から搬送してあげるから、早く立ちなさいよ。」

「よく頑張ってくれた。もう安心していい。俺達が来たんだから。」

前者のセリフは例のハルヒみたいな奴から、後者は橙色の髪の奴か
らのものだ。

・・・何か見たことある風景だな・・・。

そんな愚痴も、今は安心感がこもっていた。

20話 く嵐去って一段落く

”Buster”の基地とやらに着いた俺達は、地下18階から地下26階まである各グループの部屋に案内された。

・・・どうでもいいが、地下26階で・・・しかもまだまだあるみたいだし、地底人の風情である。ハルヒならこういうのも好きそうだな。俺となっちゃんこういう普通からかけ離れたことはどうも慣れない。やれやれ・・・ここまで深いと地中深くのマグマとかが心配になってくるね。

もちろん、心配するだけで他に何をしようとも思わんが。

「・・・！大丈夫でしたか!？」

「きよ、キヨン君!？・・・良かったあ・・・。」

「・・・。」

三者三様の反応である。まあ一応セリフだけじゃ理解に困る人もいるだろうから付け足しておく、上から順に古泉、朝比奈さん、長門だ。・・・って誰に言い訳してるんだろうね、俺は。

「心配かけてすまなかった。・・・あれ、ハルヒは？」

「涼宮さんはお休みでいらっしやいます。貴方のことを心配しておられましたか、何とか誤魔化せている状況です。」

「ほう・・・何て誤魔化したんだ？」

「現在貴方は我々の食物の確保のため買い出しに行っていると。」

おいおい、作り話もいいとこじゃねーか……。
ハルヒはそんなんで騙されたのか？

「最初こそ怪しんでおりましたが、地上が少し危ないという状況説明、そして若干改ざんした情報で何とか納得して頂きましたよ。」

素直っつーかなんっつーか……俺の前でもそのくらい大らかな心でいて欲しいもんだね。

「おや、彼女が素直に自分の本当の気持ちか伝えられないのはご存じでしょう？しかも相手が貴方とくれば……ククッ」

「その薄気味悪い笑みをやめろ。負けたみたいで無性に腹が立つ。」

「それはそれは……申し訳ありませんでした。」

そう言いつつ、まだ笑ってやがる。……何だ、俺の顔に何かついているのか？

「いえいえ、貴方がこうして元のままで帰ってきて頂けただけで僕は身に余りある喜びですよ。涼宮さんもこの状況を知っていたら心配なさったはずですよ。そうでしょうっ？」

確かにそれは認める。ハルヒは団長の役目とか言いつつ全員にきちんと気を配っているもんな……なんてな。

「いずれにしても、このままでは涼宮さんに事の真相がわかってし

まづのは時間の問題です。その前になんとしても手を打たねば。真実を知れば当然、涼宮さんの力が暴走しかねません。ただでさえ混としたこの世界にそれだけは避けたいものです。」

ああ、それは俺もよく分かってる……。

そんなこんなで話していると、ツナがこの階に訪れた。

「ツナ……皆は!？」

「ああ……シャナ、セイバー、BRSは何とか一命を取り留めた。だが……マージョリー・ドーは少し遅かった……。」

「そんな……」

「彼女が受けた傷はシャナ達に比べて明らかにピンポイントで深かった。しかも受けたのはたった一発。……向こうも本気になったという証拠だ。」

「つてことは……本当にマージョリーさんは死んだつてのか……?……俺のために……?」

「キヨン、お前の責任じゃない。自らが選択した道なんだ。……それに彼女は死んだわけではない。」

……え?

「この世界にいる”Buster”は意識のみがこの世界に集中し、肉体を具現化させている。言わばバーチャル世界というようなものだ。仮にマージョリーのようにこの世界の肉体が滅んだところで、それは意識が作り上げたかりその肉体でしかなく、肉体の無くな

った意識は元の世界に戻される。」

ということ、マジヨリーさんは死んだってわけではなく、元の世界に強制送還させられたって方が正しいのか？

「そういうことになる。」

なんか色々ややこしいのだが……ん、待てよ？それじゃ……

「ツナ！」

話しかけようと思ったらさっき俺が助けてもらったあのハルヒにそっくりな奴らの一団が、ツナを呼びに来た。

「悪い、少しいいか？」

「ああ、わかった。……キョン、また後でこっちにくる。話はあとで。」

「ああ……あ、待ってくれツナ！」

「……？どうした？」

「ほら、まだ俺はその一団を知らなくてさ。味方なんだろ？」

「ああ、そういえばまだだったな。彼らはSSSと言う。『死んだ世界戦線』と言ってな、死後の世界の住人だったんだ。」

死んだ……なんかゴツいな……しかもSSSで俺達と似通ってるし……何か似てる奴もいるし……もしかして何か俺達と関

係あるのだろうか・・・？

結論から言おう。

俺達に似ている、それはとても重要なことだったんだ。

21話 く緋の訪問者く

キヨン達と別れたツナ、そしてSSSの面々は本部地下11階にて負傷したセイバー、シャナの代理であるアーチャーと凜、ヴィルヘルミナ、そして悠二と合流していた。

「む？麻倉家の者はどこでありますか？」

「麻倉の者は戦闘時のみの契約なんだそうだ。・・・しかも”Collapse”との大戦時のみ霊力を解放させるという話だ。」

「何それ、アーチャー。それじゃ呼んだ意味ほとんどないじゃない！」

「落ち着いてくれ！」

ツナがなんとかヴィルヘルミナ、アーチャー、凜をなだめる。麻倉家の人間は何度も契約を破棄された上で、妥協点を見出してもらってギリギリで”Buster”との協力関係を得たものである。例え経過はどうあれ、麻倉家の実力には疑いの余地がない。ここでの安易な味方間での鬭争は避けたかった。

「悠二、”Collapse”側の情報は集まったか？」

「え？あ、うん。とりあえず地上を制圧している部隊は一人一人そこまでの力は持っていないみたいだ。ただし」

そう言っている一か所を指した。

「この地点にだけ他とは比べものにならないほどの力を感じたんだ。おそらくここに将クラスの”Collapse”がいる。」

「なるほど・・・感じた力は一つか？」

「大きいのは一つだけだったよ。ただ、かなり小さいものが複数周りにいることも確認できた。」

「ふむ・・・」

ツナは考え込む。地上を制圧する場合、確かに一般人に邪魔をさせない程度なら雑魚を従えた中堅クラスの者でも十分である。しかし、キヨンやハルヒが真の狙いの場合、地上に将クラスを一駒だけでは明らかに分が悪い。何かの罠なのかもしれない。あらゆる可能性を探ることは必要不可欠だった。

「沢田綱吉氏。」

そこへSSSの制服を身に纏う金髪の少女が現れた。インカムに手を当てた彼女は、”Buster”本部の諜報やサーチを担当している。

「遊佐か。どうした？」

「沢田氏に面会を求めている団体が到着しました。」

「・・・？面会？誰だ？」

「・・・・・・高校です」

「・・・何？」

「名前の提示はされませんでした。面会者は5人。いずれも一貫して沢田氏への面会希望だそうです。」

「ふむ・・・。」

ツナは考え込む。ツナ自身はその場所を知っている。なおかつ該当する人物との接触は過去に一度ある。ただし、その時点で彼女らは中立の立場を表明し、“Buster”にも“Collapse”にも無干渉方針を打ち立てていた。

「何故彼らが・・・？しかもこのタイミングで・・・？」

「・・・じっくりきませんか？」

「とりあえず会ってみよう。一度会議は解散だ。皆各自身体を休めてくれ。」

そう伝えてツナは面会者の待つ地下3階へ上がっていった。

「ヴィルヘルミナ。」

アーチャーはツナを見届けた後、自室へ戻ろうとするヴィルヘルミナを呼びとめた。

「何でありましょうか？」

「坂井悠二。彼奴は本当に信頼できるのかという話だ。」

「どういつ意味でありますか？」

「君の話によればそつちの世界では敵軍の長祭礼の蛇だったと聞く。その時の記憶は無いようだが、私にはその点では全く信用が置けない。・・・最も君は、坂井悠二を高く評価しているようだが。」

「坂井悠二は確かに我々がずっと追い求めてきた敵陣の盟主だった。その事実は変えられないものであります。ですがこの世界での坂井悠二は何者にも代えがたい成績を残してきたのも確かなのであります。ナズグル、セフィロス戦闘時にキヨンの場所特定をいち早く行い誰よりも早く感じ取ったのも彼なのであります。」

「・・・我々”Buster”は一つだ。それを忘れさせるな。」

ツナは地下3階へ上がり、客人の元へ急いだ。

「どうした？ここに何か用か？」

「これはこれにご挨拶ね。ボンゴレボスにして”Buster”ライダーは客人に対してまともな挨拶一つできないのかしら？」

「質問はこちらが先だ。」

「相変わらずのようね・・・いいわ、教えてあげる。私達はあなた達の実力つてのを見に来たのよ。」

「・・・何？」

「実はあんな達の対立組織”Collapse”からオフアールが来てね。あたし達の実践重視の強襲に目を付けたらしいわ。そこで中立にいるかどうかでこちら側で混乱しているためにとりあえず力試しにここに来てたってわけよ。」

「なるほど・・・運が良ければ”Buster”に来てくれる可能性があるというわけか。」

「ふふふ・・・まだあたし達はどちらかに付くとも言っていないわ。まあ、とりあえず・・・！」

「やるしかないか・・・！」

未だ日差しは強く地上を照らしていた。

22話 炎弾戦

訪問者はフードで身を包んだまま二つの銃を取り出し、ツナ目掛けて引き金を引いた。

ツナは跳躍し、その銃弾を避け、一気に加速。訪問者へ直行する。

「はやっ……さすが”Buster”リーダー！」

訪問者は猛スピードで接近するツナの懐に入り込み、連射してくる。さしものツナも攻撃を一旦止め、訪問者の弾を調和の炎で基地周りのコンクリートと同化させ、勢いを殺して弾を真っ二つに割っている。

「二丁拳銃……しかも隙を付くタイプか……厄介だな。」

ツナは柔の炎で素早く態勢を整え、訪問者に拳を突き出す。

一方訪問者も負けじとその拳を銃で押さえ、もう一丁の銃でツナの眉間目がけて撃ちこんだ。

しかし、ツナは一瞬で訪問者の目の前から姿を消し、後ろを取る。

「なっ……!?!」

「はあああっ!!」

大空の炎の灯った拳が訪問者のフードを掠め、フードごと焼き払った。

「あつっ……!危ない危ない……防災体質の服着ておいて良かったわ……。」

「・・・これで終わりか、アリア？」

ツナは構えを崩さずアリアと呼ばれた訪問者を真っ直ぐ見る。その凄みにアリアは一瞬だけ怯んだが、後ろにいた仲間に野次を飛ばされず我に返る。

「アリア、まだ倒せないの？そんなお子ちゃま相手に必死じゃない。理子が代わりに戦ってあげようかあ？」

「・・・！うるさいわね、黙ってなさいよ！」

「アリア！くるぞ！」

「くっ・・・！」

ツナは無言無言柔の炎を逆噴射、脅しの意味も込めてとてつもない速さで突っ込んでいく。

アリアは真っ直ぐにツナが飛んでくるのを確認すると、隠していたもう一つの武器をツナに突き出す。

「・・・！小太刀・・・！？」

「あたしが使うのは銃だけかと思ったかしら？」

アリアは小太刀を振り回し、素早く回避行動に移ったツナに追い打ちをかける。

もちろんツナは微妙な炎の出力変化で加速減速を繰り返し、アリアの小太刀を受け流していく。

ジリ貧を感じ取ったアリアは小太刀を上空に投げ、再び銃に持ち変える。その後アリアは小太刀の高さまで跳躍、手を使わずに小太刀を元あつた場所へ戻し、直後銃を連射する。

「・・・しまった・・・！」

ツナは小太刀への回避行動をとった直後だった。その一瞬でさらに回避行動をとるよりも銃弾の速度の方がわずかに速いであろうことは、ツナもわかっていた。

「ぐっ・・・！」

間一髪急所を避け、最低限のダメージにとどめた。

それでもツナは、アリアが地に足がつく瞬間を見逃していなかった。

「今だ！」

「えっ！？ちよっ・・・！」

ツナの急加速からの拳はアリアの腹部へ直接入り、アリアを吹っ飛ばしていた。

「ぐっっっ！！！」

「アリア！！！」

男声のするフードを被った他の訪問者の一人がアリアの元へ駆け寄る。幸い、アリアは無事であった。

「あらぁ・・・？アリア負けちゃったのお？」

「くっ……まだ……まだ……！」

「ふふっ……でもアリアにしては十分。沢田綱吉にダメージを与えたものねえ……そろそろ理子に交代させてもらおっかなあ？」

理子、と呼ばれたフードを被った訪問者もそれを脱ぎ、金髪自身の髪を整える。

そしてアリアと同じく、二丁拳銃を取り出した。

「綱吉君もそろそろ疲れて来たんじゃない？」

「く……」

ツナは同じく一度間合いを取り、柔の炎を逆噴射しての急接近をした。

「同じ手は……理子には通用しないってえの……！」

理子は一気に近づいてきたツナの顔面を思い切り回し蹴り、ツナ自身腕でガードはしたものの、基地の内壁に思い切り打ちつけられた。

「あらあ？もう終わりい？こんな子にアリアが負けちゃうなんて、信じられないわね。」

理子は銃をツナに向けた。

「さ・よ・な・ら」

理子が引き金を引くや否や、激しい爆発音と共に、理子は爆風で吹

き飛ばされた。

「!?!?・・・誰だ!?!?」

「・・・貴方達が複数戦を望むのなら私が出るわ。」

クリーム色の制服に、特徴的である白き天使のような翼。

「理子!コイツは・・・コイツは”Buster”の誇る『天使』だ!」

「へっ・・・!?!?もうSSSが来てたの!?!?」

驚く理子だったが、双銃を操り隙なく弾を撃ち込んでいく。

「ガードスキル：Distortion^{ディストーション}。」

天使・・・またの名を立華奏。

その能力は攻撃よりも防御に富んでおり、ディストーションというスキルも周りに発生させたバリア状のもので相手の攻撃をねじ曲げて流す力である。

「まずいな・・・アリアは立つことすらままならねえ・・・俺も加勢に・・・」

「キンジ・・・。」

アリアはキンジと呼ばれた訪問者をじっと見つめ、微笑む。キンジはそこに、ある意図を見出した。

「まさか・・・アリア・・・!!」

キンジの視界がフラッシュバックし、血の流れが変わる。彼には先祖代々持つてのある特殊な環境下での多重人格のようなものを引き出す能力があった。

「ふっ・・・さて俺も行かせてもら・・・」

肩に手が乗せられた感触がし、ふと振り返る。

「キンジ君と言ったね。・・・君の相手は僕だ!!」

そこには学ラン姿の坂井悠二が『ブルート吸血鬼』という名の大剣を持ち、待ち構えていた。

「くっ・・・ここにもいたのか・・・!」

しばしの睨み合いが続き、お互いがお互いを警戒する。その時だった。

「待ちなさい!そこまでよ!」

辺りに響き渡ったその声に、皆一斉に声の主の方を向く。

「凜、どうした?」

ツナは立ち上がり、なおも相手の攻撃を警戒しながら凜に話しかける。

「ツナ、ここで争っている場合じゃなくなっただわよ。地上での坂井

君の言っていた将クラスの気配が、どんどん増殖し始めた。」

「何!？」

「詳しいことはまだ分かっていないのだけれど、その反応は今も地上の将を中心に広がり続けている。アーチャーとヴィルヘルミナが様子を見に行っただけけれど、最悪の事態の場合、急いで救援を送って欲しいの。」

「わかった。今すぐモニター室へ行く。先に待っていてくれ。」

凜に指示したツナは、武偵高校のエリア達に事情を説明した。

「しょうがないわね・・・今回の戦いは次に持越しね。」

「ああ、すまない。」

「ただし、早めにあたし達に連絡した方が良いかもね?あたしは別に”Buster”でも”Collapse”でも所属は構わない。次会う時は”Collapse”側として貴方達と戦う可能性もあるわ。」

「わかっている。」

エリア達を見送ったツナは、急ぎモニター室へ向かった。

「遊佐、現状は?」

「アーチャー氏、ヴィルヘルミナ氏双方とも未だ敵との接触はありません。」

「よし。今から地上探査へ更に人をさく。SSSより立華奏、仲村ゆり。そして坂井悠二、フェイト・テストロッサの計4名を送れ！」

「了解しました。各人、ハッチを開けます。」

ハッチから飛び出した4人は、それぞれの方角からアーチャー、ヴィルヘルミナの元へと合流へ急いだ。

23話 く地上戦の将

「こちらヴィルヘルミナ・カルメル。アーチャー、そちらはいかがでありますか？」

「ああ、少々厄介なことになりそうだ。”Collapse”の奴らめ、この数の駒を揃えていたとは・・・まあいい、暫く回線は使っている暇がない。切るぞ。」

「了解であります。」

連絡を終えたヴィルヘルミナは、極限まで抑えていた炎を一気に爆発させ、ティアマトーを身に付ける。

刹那、地上ビルの陰から数十の殺気と共に人間や魔物が飛び出してきた。

「む・・・これだけの数の敵がいたとは・・・」

（（玉碎覚悟））

「いや、この状況で彼らと戦うのはあらゆる面で我々に不利。しかも一つ一つの殺気自体が強く倒すよりも先にこちらが力尽きてしまう可能性の方が高い。まともに相手をするのは難しいのであります。」

（（早期決断））

「了解であります。」

言うが早いか、ヴィルヘルミナに対して、火や水、雷など様々な攻撃が襲いかかった。

ヴィルヘルミナは自身を自らの包帯で完全に包み、繭のような状態を作る。相手の攻撃が全てあたり、繭ごと爆発すると、その場所からヴィルヘルミナは姿を消していた。

「上手く行ったのであります。」

ヴィルヘルミナは地上へ降り、大きな気配の元凶の場所へとすでに辿り着いていた。

そこは公園となっており、広場付近の一本の木の下にヴィルヘルミナは強い力を感じていた。

「あの車から気配が・・・？」

ヴィルヘルミナが近づくと、青い車から二人の男女が降り、ヴィルヘルミナに対峙した。

「・・・！お前たちは・・・！！」

アーチャーは二本の短剣を振るい、次々と敵を薙ぎ払っていった。その途中、アーチャーはふとあることに気づいた。

「ん・・・？戦い方はまるで素人だ。私の一連の攻撃で沈むことから、決してタフなわけでもない。・・・ならば何故・・・？」

アーチャーは敵の群れに囲まれつつも、双剣を身体の一部であるかのように振り回し、鮮やかに斬っていた。

「何故・・・ここまでの破壊力のある技は使えるのだ・・・？」

ひとまず周りにいる敵を壊滅させたアーチャーだったが、高層ビルのいくつかは完全に灰と化しており、あちらこちらに戦いの爪痕として地面に穴が開いている。無論、双剣のみの体術勝負で戦ったアーチャーに、こういった爪痕を残すことは不可能である。”collapse”側の駒である先程まで戦闘を行っていた敵が、こうしたのである。

「坂井悠二が言ったように、初めはここまでの規模の力は全く感じ取れなかった。急激に力を伸ばすにしても限度が・・・まさか・・・」

アーチャーは再び切り刻まれた敵の死体と破壊された周囲を見た。

「まさか・・・強制的に短時間での能力上げを行ったのか・・・？」

そこへ、無線通信が入る。他でもない、先程まで通信を行っていたヴィルヘルミナからである。

「こちらアーチャー。どうした？」

「こちらヴィルヘルミナ！敵陣将と戦闘中なのであります！」

「本当か！？」

「敵は二人、相当厄介な能力を使用しており、我々の技は完全に攻略されているのであります！沢田綱吉へ急遽連絡を！」

「！？技を完全に攻略だと？」

「相手は我々の型ある力を全て熟知しており、しかも使用することができる。私一人では5分持ちこたえるのが限界であります。」

「すぐさま沢田に連絡し、私もそちらに向かう。ヴィルヘルミナ、お前は引き続き敵将のデータ取得をしつつ、できるだけ時間を稼げ。」

「了解であります！」

「アーチャーはヴィルヘルミナとの無線を切り、すぐさま”Buster”本部との連絡を試みた。」

「こちらオペレーター遊佐。」

「遊佐か。私だ、アーチャーだ。緊急を要する。沢田綱吉に通してくれ。」

「了解しました。メイン回線を沢田氏のサブ画面に切り替えます。」

「こちら沢田綱吉。アーチャー、どうした？」

「ヴィルヘルミナ・カルメルが敵陣将と戦闘に入った。だが、戦況はかなりこちらに分が悪いらしい。更なる応援を頼みたい。」

「応援ならば奏たちを送っている。もうすぐ・・・」

「それだけではおそらく足りん。ヴィルヘルミナが言うに、相手は我々の型のある技を全て知っているらしい。しかもその技すら使用

「できるというチート性能ぶりだ。倒すには相当な力が必要なはずだ。」

「……型のある技……まさか……？」

「……どうした、綱吉。」

「……わかった、俺が行く。」

「……何？だがお前が行ったら……」

「大丈夫だ。指揮官代役は立ててある。それに……おそらくその相手は俺でしか止められない。」

「……大した自信だな。私もすぐヴィルヘルミナの元へ向かう。相手は二人。ただし、地上にまだ雑魚が残っている可能性が高い。細心の注意をしてくれ。」

「ああ……。」

ツナは無線を切り、急いで準備を始める。

ツナの心当たりのある人物は、かつてツナの世界で世界規模の戦争を起こし、関係のない人々を次々と殺めていった、最悪の敵だった。しかし、当時その人物に敵の技を全て使えるようになる能力など無かった。敵は二人、その言葉が妙にツナの引っかかりを強めていた。

準備を終えたツナは、第7ハッチへと向かっていた。

そこへ、キヨンが通りかかる。

「ツナ……？どしたんだ？」

「ちょっと急用でな。すぐ戻る。」

「あ、ああ・・・わかった。」

その時、ツナの超直感が何かを伝えようとしていた。

(・・・この感じ・・・？何だこの感じは・・・。何かが来ているのか・・・？)

そう思いつつも、ツナはハッチを開けて走る。

「待っている、ヴィルヘルミナ・・・白蘭！」

凄まじいスピードを出し、ヴィルヘルミナの元へと直行した。

24話 く究極の双将く

それまで明るく照らしていた太陽が、まるで闇にすっかり溶け込んでしまふかのように、分厚い雲の中にすっぽりと埋まっていた。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

ヴィルヘルミナは、公園に姿を現した”Collapse”敵将2人と交戦、その圧倒的力に息も絶え絶えとなっていた。

「ふうん、カルメルちゃんはタフだねえ。君の自在式は全て攻略され、僕らに傷一つ負わせることすらままならない。しかもこっちは君の技を全て使用することができる”彼女”がいるからね。もはや君に殺される以外の選択肢はないんだよ。」

「それが何だと言うのでありますか・・・。私はまだこの通り戦える・・・！」

ヴィルヘルミナは自らの包帯を鋭く変形させ、猛スピードで敵へ飛ばす。自在式の籠ったこの包帯は、使用者の思い描く軌道で敵へ向かうため、反応することはできても、避けることは困難である。

「だからさぁ・・・知ってるんだって、その技も。」

男は向かってきた包帯を一度左に避け、案の定追いかけてきた包帯を下から挟むようにして斬っていく。まさに敵の技を知り尽くしているとはこのことで、鋭く見えた包帯もほとんど抵抗なくあっさり切り刻まれていく。

「くっ……!!」

「もつと頑張りなよ、カルメルちゃん。こんなんじゃない気がしてきたよ。先生、君にあの子あげるよ。」

先生と呼ばれた”Collapse”将の一人は、手を掲げヴィルヘルミナの方へ向ける。

「Divine Buster」

「……!!その技は、高町なのはの……!?!」

突如放たれた粒子状の光弾は、なのはのそれより遙かに威力があるにも関わらず、チャージしたような形跡は全くなかった。

手からあふれるようにして、光弾は真っ直ぐにヴィルヘルミナへ注がれていく。

「!!」

「ガードスキル：Distortion^{ディストーション}。」

その光弾をねじ曲げ、はじき返した者がいた。

「……立華奏!」

「……大丈夫?ゆっくり休んでて。」

奏が敵将の方へ振り向くと、茂みから仲村ゆり、坂井悠二、そしてフェイト・テストアロツサがこちらへ飛び出し、ヴィルヘルミナを囲む。

「全く、ウザい敵ばっかだったけど、何とか間に合ったみたいね。」

「カルメルさん！大丈夫ですか！？」

「ここは私達に任せて。」

4人は二人の前に立ち、ヴィルヘルミナを下がらせた。

「なんだ君たちかぁ。僕の出番はないかな。」

「そんな余裕をいつまでかましていられるのかしらね、白蘭。」

ゆりは白蘭と男を呼び、白蘭はゆりを見て、お互いにやりと笑う。

「本当の話さ。僕無しでも彼女一人いれば十分すぎるくらいだよ。ねえ、木山先生。」

白蘭が微笑んだ先、その女性は腫れぼったい目をこすり、小さくうなずいた。

「様々なパラレルワールドを見てきた白蘭の知識を私に埋め込ませたんだ、君達に万の一つも勝率はないさ。」

「木山春生……！！そうか、僕らの技を完全に使うことができる
とカルメルさんが言ったのは、元々木山に備わっている多重能力
者キルによって他の世界の武器を回収してたからか！」

「零時迷子の宝具箱ミステクスの坂井悠二か……。話通りの男だ。君を」C

「o l l a p s e」に迎え入れることができなくて、本当に残念だね。」

「……？何を言っている！？僕は自分の欲望だけで満たしているような連中とは違う！」

その瞬間、坂井悠二以外の人間はお互い振り向きあっていた。

坂井悠二は元の世界で自分の身に起きたことの記憶を全て忘却された状態で”Buster”メンバーに手を貸している。余計なことで『祭礼の蛇』に戻ってしまう事態だけは、避けねばならない。

すると、真つ先に奏が飛び出した。

一気に接近して攻撃範囲になったと思いきや、高く跳躍して木山を上空から捉える。

「ハンソニックhandsonic：バージョン5。」

猛獣の爪のような、そんな武器が光状になって奏の小さい手に装備され、そのまま木山に急降下してくる。

「……惜しいね。」

木山がすつと片腕を上げると、腕の周りに黒い霧が発生、徐々に収まっていったかと思うと、纏わりついた霧は確かに銃口の形をしていた。

「……！」

「ロック……キャノン。」

言葉と共に銃口から凄まじい数の弾が飛び交い、奏目がけて突進してくる。
奏も不意な攻撃によりディストーションを展開する時間は無いため、何とかハンドソニックで弾を撃ち返して行くが、如何せん相手の圧倒的な弾数の前に、一発の返し損ないから全弾を喰らうハメになった。

「くっ……!!」

「……」死んだ世界の天使”とだけあってさすがの機動力だ。……だが、君の行動パターンも既に攻略済みだ……」

白蘭は相変わらず微笑むままであった。

25話 〈崩壊と襲撃〉

ツナが出て行ったつきり、俺達は手持無沙汰になってしまっていた。必要な話も聞けなかったしな。

「ここは”Buster”本部地下23階。元々基地として成り立っているのにも関わらず、何故か高級感溢れるカフェテリアが存在している・・・なんでだろう。」

しかし給仕にはロボットが使われており、ここが基地だったという現実に引き戻してくれる。やれやれ・・・。

「あらキョン、もうここに来てたの?」

ハルヒが来ていた。

この前の一件は完全に記憶から飛んでおり、こいつには外が危ないという状況、そしてここで暫く暮さなければならぬという事実だけが提示されてる。

実際敵はハルヒの力が最大の狙いなんだ、あまり刺激を与えるのは良くない。

「おう・・・ん?もうってどういうことだ?誰かから俺がここに来るってことを聞いたのか?」

「何寝ぼけてるのよ。あんたさっきもあたしと会ったじゃない。どこ行くの?って聞いたら用足した後カフェテリアに行くって。」

「・・・はあ?そんなこと俺は一言も・・・」

一瞬、俺に嫌な予感がよぎった。

この前ハルヒの言葉にズレが生じたとき、ハルヒは偽物だということがわかって、敵襲を先に気づくことができた。だが、今回ハルヒから何かを感じたわけではなかった。・・・そう、この世界に俺は・・・二人いるのだ。

「このくらいあれば足りるでしょう。朝比奈さん、山本さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、私も何か皆で心がリフレッシュできるものと思っただけですから。」

「気にすんなって。俺もこつというのは大好きだぜ。」

古泉は朝比奈みくるの提案により、暗い雰囲気を少しでも明るくしようとして本部の倉庫にある娯楽用のレトロゲームをいくつか出してきたところである。

幸いにも娯楽用のゲームはまとまっており、探すまでに時間はかからなかった。

「よう、古泉。何してるんだ？」

そこへ、”彼”が通りかかった。

「あ、キヨン君。今古泉君たちと皆で遊ぶ用のゲームを持っていく

ところだったんです。」

「そうですか。それは残念だ……。」

キヨンは急に俯く。3人は怪訝な顔をしてキヨンを見た。

「……どうなされたのですか？ 様子がおかしいですよ？」

「それはな……。」

キヨンが言葉を発するや否や、次元から一人の少女が現れた。

「あらあ 揃ってるじゃないの。」

「……！？ あさ……くらさん……！？ ！」

「セキュリティがまるで策だな。沢田綱吉含めほとんどの戦力がいなくなった今、ここはどうにでもなる。そうだな、朝比奈さん、古泉？」

「まさか”Collapse”側の貴方がここにいるとは……いつの間に……。」

古泉は珍しく冷や汗をかきながら”Collapse”リーダーであるキヨンを見つめる。実際、沢田ら戦闘可能な主要メンバーはほぼ地上戦に裂かれており、セイバーやシャナ、BRSの容態も全く傷が癒えていない状況。武偵との契約も今回の一件で凍結状態となっており、相手側に圧倒的なハンデがあった。

「ざまあねえな。あの沢田ですら、俺を見分けることができなかつ

た。ちよつと奴に会つた時に細工しただけで、俺を”Buster”のキヨンだと思ひ込んでいたぜ。ハツチを開けるときも何も警戒しないから、俺が入り込んだのに気付かないわけだな。」

キヨンの周りには、いつの間にか朝倉の他に将クラスではないが中堅クラスの”Collapse”軍が数十人の規模で襲来していた。

「古泉、朝比奈、下がつてろ。俺が行く。」

山本は二人に指示すると、専用ボックスから柴犬「次郎」を呼び出す。

「行かせ、じり……」

「忘れたか？」

キヨンが空気を潰すような動作をとると、次郎はガラスが割れるように飛び散り、跡形も無く消える。

「なっ……!?!?」

「貴様らの大事なもう一人の俺は全てを無に帰す力があつたはずだ。それは……俺にも継承されている。」

”Collapse”のキヨンは”Buster”のキヨンでは絶対にしないような、悪魔のような笑みを浮かべた。

朝比奈みくるは恐怖に怯え、古泉もその不気味さに前に出ることができない。

「そ、そりゃ反則だぜ……。」

「残念だったな。」

大きく踏み出したキヨンは、無防備に剣も構えずに立っている山本の腹へ拳を入れる。

山本は無抵抗にも沈み、その場に倒れ込んで意識を失った。

「く……朝比奈さんはここにいてください。」

「古泉君!?!」

「貴方には涼宮さんや彼にこの出来事を伝え、一刻も早い避難を促してください。僕は”Collapse”を何とかします。」

「む、無理ですう!古泉君一人じゃ!!」

「大丈夫です。遊佐さんにこの緊急システムのボタンを受け取っていますから、ここで足止めする時間と人数は集められるはずです。朝比奈さん……お願いします。」

古泉はそう言い、笑顔を崩さず澄ました顔で”Collapse”に相対した。

「さて、山本君がこうなってしまった以上、僕がでるより他はなさそうだ。」

「あら、あっさり降伏の旗を上げるのかと思ったわ。案外頑張るのね、古泉君。」

「お褒めの言葉として頂きましようか。・・・セカンドレイド！」
掛け声と共に放たれた灼熱の球体は、またしてもキヨンの手のひらに吸い込まれ、無と化す。

「これでもまだ殺る気か？」

「ええ、もちろんですよ。」

緊急システムの警報が、五月蠅いほどに”Buster”本部に鳴り響いていた。

26話 く偽りの逃亡

何が起きたかはわからなかった。

いきなり激しい爆音がしたかと思うと、凄まじい地震のような横揺れに俺とハルヒは身を投げ出されていた。

「いててて・・・ハルヒ、大丈夫か・・・？」

「ええ、キヨン・・・。あたしはなんともないわ・・・。」

そう言いつつ俺達は起き上がる。それにしても今のはなんだったんだ？とてつもない寒気が俺に纏わりつき、嫌な予感しかしなかった。

・・・俺の勘も捨てたもんじゃない。その嫌な予感は、モニターで写し出された麗しの朝比奈さんの身も心も凍りついたかのような真っ青な顔という形で浮き彫りになった。

「キヨン君！？無事ですか！？」

「ええ、まあ。俺もハルヒも無事です。それで、一体何が起きて・・・。」

「一刻も早く涼宮さんを連れて基地内の安全な場所に避難してくださいー！」

・・・さっぱり理解できなかった。

だが、朝比奈さんがここまで焦っていらっしやるんだ。とんでもない事態だったことはこのミジンコ並の俺の知能だってわかるさ。

でも、だからこそ、知っておかなければいけない情報があるわけで。

「一体何が起こっているんです？古泉は一緒じゃないんですか？」

「ふえっ、あつ、すみません！現在、”Collapse”側のキオン君が朝倉さんたちと攻めてきたんですっ！今古泉君が凌いでくれているんですが、それも長くは持たないと思います・・・」

「そんな・・・!?」

「なんで”Collapse”の連中がこの場所を知ってるんだ!? しかも何故か今日はここに残っている人間が少ない。ツナでさえ、用があると言って出て行ったままだ。」

「悪いことは重なるもので、セイバーやシャナの傷も全く癒えていないと聞いた。」

「これは・・・どうしたのか・・・。」

「とにかく、私達は残った人数で朝倉さんたちを足止めします。キオン君はできるだけ下の階へ行くよう逃げてください！」

「こうして、朝比奈さんとの連絡は途絶えた。」

「キオン！今何が起きてるの!?みくるちゃんが言ってたこの意味がわからないわ！説明しなさいよ！」

「悪い、ハルヒ。今はそんな話をしてる暇がないんだ。安全な場所に着いたらゆっくり話す、な？今回ばかりはゆっくりしてられないんだ。」

「・・・延滞料取るからね！」

・・・へいへい。

困った。

さつき起きた爆発と地震で、基地内のエレベーターに異常が起きたらしい。完全に止まってしまったようだ。

・・・やれやれ、何でこう間が悪いんだよ。これじゃ朝比奈さんや古泉が足止めしてくれてる意味が全くないじゃないか。

「参ったな・・・。」

「他に通路はないの？こういう場所って地下深いから、何かの時のために二か所の移動手段を用意しておくものだと思わない？」

なるほど・・・さすがハルヒ、こういう所は無い頭を使う俺よりずっと頼りになるね。

だが、その移動手段というのも俺は伝えられていない。ハルヒの言ったことは確かに正論な気がするが、どう足掻いてもそういった通路は見つからない・・・ん？

「ここにいたか！」

この前見た橙色の髪の男が立っていた。・・・誰だっけか。

「俺は音無結弦。この前”Buster”側へ参戦したSSSのメンバーだよ。」

「そついえばそうだったな。他のメンバーは？」

「今他のメンバーはキヨン、君の仲間である古泉への補助に行った。俺は独自行動で、二人を安全な場所へ移動させる役と護衛の役をこなすつもりだ。よろしく。」

そう言って、音無はカフェテリアの一角をなぞり、思い切り蹴る。すると、なんとまあ、開いたよ。まさしく階段だよ。

「ここからは緊急用の非常階段を使う。気を付けて付いてきてくれ。」

俺達は先を急いだ。

「どうやら、本当に僕的能力では貴方に触れることさえ不可能なようです。」

古泉は“Collapse”のキヨンを相変わらずの笑みで見つめる。しかし、その笑みには明らかな焦りがあった。

「どう、古泉君？そろそろ諦めたくなかったかしら？」

「どうでしょうね。僕の身体に聞かないと、僕が動けるのかどうかわかりませんからね。」

すると古泉は朝倉目がけて一気に拳を突き出し、なおも攻勢に出る。それでも朝倉の不可視のバリア状のものによって、完全にシャツアウトされていた。

朝倉はそのまま古泉の拳を掴み、空中に舞い上げる。飛ばされたも

のの追撃がないことで、古泉は朝倉たちと間合いを取った。

「随分と強固なものだ・・・情報統合思念体の力には、全く畏怖の念を感じますよ。」

「あら、ありがとう 私には褒め言葉にしか聞こえなかったわ。さあ、どんな最期が良い？貴方のお望み通りの死に方を選ばせてあげる。」

朝倉は満面の笑みを浮かべ、光状の槍のような形を作る。一方の古泉は・・・動かない。

「そろそろおやすみなさい、古泉君。」

朝倉はその槍状の光を古泉目かけて振る。光は一瞬の速さで伸び、古泉に向かって一直線に走る。
・・・音もしなかった。

「・・・!?!」

「貴方は・・・忘れている。」

そこに立っていたのは・・・長門だった。
槍状の光を受け止め、沈め、そして拡散させた。

「今度は長門さんね。今までどこで何をしていたのかしら。遅すぎ
るわ。」

「・・・。」

長門は答えない。

だが、周りはその沈黙には怒りのような感情が籠っている、そんな印象を受けていた。

次の瞬間、長門は凄まじい速さで”Collapse”のキヨンの目の前に現れる。有無も言わずにキヨンを蹴り上げると、キヨンは吹き飛ばされた。それでも、キヨンは上手く受け身をとってダメージを緩和させ、ニヤリと笑みをこぼした。

「確かに長門。お前は厄介な相手に相違はない。俺がそのまま戦う選択肢もあるが、生憎スケジュールが詰まっているのでね。お前の相手はコイツらにしてみらう。」

そう言つてキヨンと朝倉は消え去る。

後に残ったのは、数十体の感情無き魔物だった。

長門は魔物たちを倒すべく構える。すると……。

どこからともなく光が降り注ぎ、そこにいる全ての魔物を消滅させた。

「……高町なのは。」

「大丈夫だった、みなさん？」

「私と朝比奈みくるは問題ない。ただし古泉一樹が負傷。」

「了解。ただちに医療チームへ運びましょう。」

そこへ、SSSの面々も来ていた。

「彼らは見つかりましたか？」

「いや、それが見つかってないんだ。地下23階をくまなく探しまわったんだが・・・もしかして独自でどこかに行ったのか？」

古泉は、心配そうな目つきで音無を見上げた。

27話 く明かされる罫

空がだんだんと翳り、地上も昼間の時間帯の終わりを知らせる。

ロックキャノンをもともに浴びた奏だったが、すぐさま態勢を立て直し、木山から身体を一旦引いた。

幸い、ハンドソニックで切り返した分、被弾は少ない。それでも、”Buster”側の攻撃を本当に使えるという事実には不利を感じざるをえなかった。

「得意のハンドソニックで攻撃を弾いたのは見事なものだな……。だが実際君は攻撃を仕掛け、ダメージを負い、私には触れられていない。」

「……そうね。貴方の能力、少しずるいわ……。」

奏はハンドソニックを解き、膝を付く。冷静に言葉を発しているながらも、被弾した箇所から激痛が走り邪魔となっているようで、先程のような動きは全くできていない。

「……次は私が行きます。」

構えたのはフェイトだった。戦闘用のフォームに切り替わった鎌形の武器であるバルディッシュを掴み直し、木山を見る。

「ほほう……武器持ちか……興味深い……。」

「……行くよ、バルディッシュ。」

(Yes, sir.)

言葉ともとれるかどうかの音が発するや否や、フェイトは木山に猛スピードで突進する。木山はその場に猫背のまま立っているだけだった。その表情は、無にも微笑にも見える。

その表情に多少の違和感を感じながらも、フェイトは空中から木山を捕らえた。

「H a k e n ハーケン・セイバー
S a b e r ! !」

その言葉と共にバルディッシュがごだまし、三日月状の光刃を作り上げる。すでに至近距離に迫っていたフェイトは、そのままバルディッシュを振りかざす。

「・・・確か・・・これだったか・・・。」

木山はふと何かを思いついたかのように右手を見る。・・・そこには金色に輝く剣が映し出されていた。

「・・・それは・・・! ?」

「フフフ・・・エクス・・・カリバー。」

聞き覚えある声と共に剣は瞬く間に光り輝き、真つ直ぐに光刃を打ち砕く。

ただし、フェイトは落ち着いていた。自らは光刃もろとも一度バルディッシュを手放し、エクスカリバーを分断によって回避、地に打ち付けられたバルディッシュを拾い上げ隙の大きいその技に二次攻撃を仕掛ける。

「Plasma Lance」
プラズマ・ランサー

バルディッシュから放たれたのは槍状の複数の光弾。一つ一つがバラバラの軌道で木山に襲い掛かり、エクスカリバーを警戒する。

「・・・中々だな。」

木山の手元にすでにエクスカリバーは無かった。代わりに、大太刀を発生させている。

「あれは・・・贄殿の遮那!？」

思わず傍観していた悠二も叫ぶ。セイバーの宝具、エクスカリバーに続きシャナの宝具もコピーされていた。

大太刀を一発振り回した木山は、その軌道だけで光弾を吹き飛ばす。

「ターン!」

フェイトの言葉と共に打ち払われたはずの光弾たちは再度方向転換、木山へと向かう。

「くっ・・・!」

さすがに予想だにできなかったか、木山にそれは直撃する。

大きな爆風と共に公園独特の砂煙が舞い上がり、辺りの視界を奪った。

「・・・さすがは”Buster”の誇るエリートの一人と言った所か・・・。どうやら君が光弾の軌道をいじることができるという

のは、白蘭の行った世界のどこにも無かったようだ。・・・まさかダメージを喰らうとは思ってもいなかったね。」

木山の白衣の左側が真っ赤に染まり、右腕で左腕を押さえていた。その瞬間、動いた者がいた。

「木山春生、確保よ。大人しくなさい。」

ゆりは迅速な動きで愛銃『ベレッタM92F』を木山の後頭部に突いていた。

「・・・どうやら私はここまでのようだ。」

「十分さ、木山ちゃん。君のおかげで”Buster”は更なる援軍をこつちに渡してきているみたいだ。ねえ、綱吉君。」

「・・・!?!?」

白蘭を除く全員が驚愕したのであるう、同じタイミングで皆振り向くと、いつからいたであろうか、沢田綱吉その人が地上に降り立っていた。

「ツナ君!?!何故貴方がここへ!?!」

「ゆり、どうやら俺達は騙されていたようだ。」

「!?!?どういふこと!?!?」

ツナは視界を完全に白蘭に絞り、冷静ながらも燃え滾る怒りを向けている。

「白蘭と木山春生による”Collapse”の著しい力の増殖は、俺達を地上に引きずり出すための罠だったんだ。たつた今アーチャーから連絡があった。その内容は、『今地上に拡散している大きな力の数々は、木山春生の元いた学園都市世界のレベルアップ事件に関連している』というものだった。・・・白蘭、お前等・・・俺たちの基地の場所を知っていたな？」

その言葉に悠二もゆりも、そしてフェイトさえ絶句する。その通りだった。”Buster”の核となる何人かの精鋭のうち、セイバ―やBRSなど多くが戦闘によって負傷し、まともに戦うことすらできない。そこへ追い風が吹くかのように地上へ人が裂かれていった。これはもう一つしか結論はない。

・・・”Collapse”は知っていた。涼宮ハルヒとキヨンを匿っている”Buster”本部の場所を。

その絶句やツナの表情に、白蘭はより一層にんまり笑う。

「・・・まずいわ！早く戻らないとハルヒちゃんたちが・・・」

「・・・いや、ダメだ。」

「え!？」

「アーチャーに急遽戻るよう伝えたが、何者かによって結界を張られたらしい・・・。内からは出られるが、外からのいかなる侵入も絶たれているらしい。」

「そんな・・・!？」

「どうだい？君達みたいな子供の集会とは訳が違うのさ。今頃仲間が涼宮ハルヒとキヨンを確保している頃じゃないかな。もうどう足掻いても遅いんだよ。」

刹那、ツナは凄まじい速度で白蘭に詰め寄る。その圧倒的スピードに誰も視覚が追い付いていなかった。

「白蘭！！！！！」

「おおっと。」

繰り出された炎の拳を白蘭は同じ拳で止める。両者の力自体互角と言え、次々と攻勢に出るツナに対し、白蘭はそれをどんどん受け流していった。

「どうしたんだい、綱吉君。随分力が無いね。・・・もしかしてすでに戦闘をしていたのかな？」

「・・・だつたら何だ？」

「いやあ、もしかして武偵さんとかいう新勢力かな、と思つてね。彼らには僕達”Collapse”も注目を置いている。この前もオファー送つただけで、まだ保留なんだよね。」

「・・・何の話だ！」

ツナは炎の純度を高め、より高温の炎で白蘭を殴る。白蘭はそれを直撃し、吹き飛ばされる。・・・わざと当たつたかにも思えた。

「あれ？知らないのかい？」Collapse”は保留の勢力は潰

すのが基本方針なんだよ？」

「・・・何!？」

ツナの額に一滴の汗が加わった。

28話 〈起動する無〉

暗闇の中、足元も覚束ない状態ではあるが、一步一步螺旋階段を下りていく。

音無とかいうSSSの男に連れられ、俺とハルヒは安全な場所を求め付き従っていた。

この基地に”Collapse”側の、もう一人の俺が朝倉たちと攻めてきている。その事実には、本当に滅入る。あっちの俺は、何故かハルヒと俺が必要らしい。ハルヒの力が欲しいというのは、癪には触るがわかる気はする。

だが、一つ気になるのは、俺もまた狙われている身だということだ。

さっぱりわからん。いつぞやの黒騎士が言っていた、「無の力」がどうかって話。どうやら”Collapse”の連中は、その力を求めて俺に迫るらしい。だが、そんなけつたいな代物が俺にあるのだから、向こうの俺にもあるんじゃないか？ だったら何故俺を・
・？

いや、考えるのは止めよう。こういう作業は俺は苦手だし、第一俺は誰もが認めるところの一般人であつたはずだ。そんな俺が悪の組織だか何だか知らんが、付け狙われてたまるかつつの。

ふと、ハルヒに目が行った。非常時の螺旋階段とはいえ、とてつもなく広いから、俺とハルヒは並んで歩いているわけだが、さしものハルヒからも不安げな表情が見て取れた。

そりゃそうだ。こいつは何も聞かされていない。何も知らずにさらに安全な場所へ移動せにや危険だと言われれば、どんな奴だって疑心暗鬼だろう。もしかしたら、本当のことを説明しなきゃならない

時も出てくるのかもな。

そう思っていたら、どうしてか俺の中の何かがどよめいた気がした。後になって考えると、俺が絶対に一生使わないような恥ずかしいセリフだな。

「ハルヒ。」

「・・・何？」

「もしかしたら、この後危険な状況にまた巻き込まれるかもしれない。その時、絶対に俺の傍を離れるな、いいか？」

「・・・つつ!!」

ハルヒは一旦目を見開いてから俯き、耳まで真っ赤な顔をして俺を見た。ふむ、随分お前の表情は芸達者だな。感情の起伏が激しいだけなのかもしれんが。

「あ・・・あ、あああなたね、い、いつからその・・・そんなに・・・そ、そう!いつからそんなに偉そうな口があたしに聞けるようになったわけ!？」

「あのなあ・・・今は本当にそういうのを気にしてる場合じゃねえんだって・・・まあ、頼むからその時は離れるなよ?」

「・・・バカキョン・・・。」

もはや我らが団長様の代名詞となったアヒル顔。だがそれでも、少し嬉しそうな表情をしているように見えたのは自分を過大評価し

ぎかね？

それにしても長いな……。音無の後に付いて行って、もう2時間くらい歩いたんじゃないかなろうか……？

ふと純粹な疑念を持った俺は、音無におそろおそろ話しかける。

「なあ、音無。いつまで階段下るつもりなんだ？というか、今ここはどこなんだ？」

ふと気づいたことを述べてみる。薄暗闇の中では、俺達が一体どこを目指しているのか、全くわからない。しかも地下だからか、寒気がする。それも、嫌な寒気が。

俺の純粹の疑念は、やがてある解答を導き出し、俺の脳内の警告システムが一気に上がっていくのを感じた。

「ああ、ここか？ここは……」

音無が笑う。この上なく邪悪な微笑だ。俺の警告は……。間違っていないかった。

「ここは……。"Buster"と"Collapse"の勢力境界線。ここまで来れば……。十分だな。」

音無の声質がどんどん変わっていく。まるで冷徹な魔女のような声だ。

「お前……。音無じゃないな？一体誰なんだ？」

「ククク……。気づくのが遅すぎたな。確かにここは境界線だが、"Collapse"の領土の方が近い。もはやお前は『かこの

とり』だ。」

音無を語っていた人物が、おもむろにマスクをはがす。そこに現れた姿は・・・やはり女性のものだった。

白銀に光る髪に藍色の瞳。そして髪の色に合わせた甲冑を身に纏った、れっきとした剣士である。

「私の名は・・・」

そう言うや否や、ハルヒが倒れる。どうやら気を失ったらしい。

「ハルヒ！？大丈夫か!？」

「片時もその少女を離さんと話していたのでは無かったのか？ふん、お前の器が知れるな。」

「てめえ・・・ハルヒに何をした!？」

「我が氷で一時的に睡眠凍結させただけだ。お前にとってもその方が都合がいいのではないのか？」

確かにハルヒに危険であることの内容を教えることはできれば避けたい・・・か・・・。

「紹介が途中だったな。私の名はジャンヌ・ダルク30世。通り名を『魔剣デュランダル』、『銀氷の魔女』。」

「そんなことはどうでもいい。何が望みだ？さっさと見え。・・・大体わかってるがな。」

ジャンヌ・ダルクという名のその女は、俺の方へ剣を投げ、自らも剣を抜いた。

「何をしている。さっさと剣を取れ。」

「……は……?」

「お前が”Buster”の一員だと言うのなら、抵抗を見せてみる。私が一度だけチャンスを与えてやる。」

「何を言つて……?」

「この闘いにルールは無い。どんな”力”を使つても構わない。どちらかが一太刀浴びせた時点でその者の勝ちだ。」

全く意味がわからん。こいつは”Collapse”の人間だろ? ならば俺とハルヒの力が目当てなわけで、こんな茶番を何故用意する必要がある?

……いや、考えるのはあとだ。とりあえず、折角のチャンスなんだ、逃す手はねえ。

「……わかった。やってやる。」

俺は目の前に落とされた太刀を拾い、ジャンヌの前に立つ。こちとら素人なんだ、構え方もわからんのだがな。

「……行くぞ!」

そう言い、ジャンヌは俺に飛び掛かってきやがった。おいおい、そのスピードは凡人には酷過ぎる仕打ちじゃないか?

そうも言っただけでいられるわけでもなく、俺は何とか剣の軌道を予想して真正面から打つ。刀同士がぶつかり、火花が散る。

「うおっ!?!」

「大した奴だな。いや、考え無しと言う方が正しいか。素人が剣士相手にまともにやり合おうなどと思うな!力負けは歴然だ!」

そう怒鳴ると、ジャンヌは俺の太刀を跳ね除け、回し蹴り。俺の左肩に蹴りが見事なまでに炸裂し、俺は吹っ飛ばされた。

……いてえ……。

「剣士同士でも同じ、力負けを悟った場合は瞬時に作戦を練らねばならない。たとえ相手が待ってくれなくてもだ。」

またしてもジャンヌは俺との間合いを急激に詰めてくる。

俺は急な相手の動きに付いて行けず、尻もちをつく。

それでもジャンヌの痛みまでの殺気は衰えず、尻もちのついた俺に、さらに刃を向けてくる。くっそ!

ガキイイイイン!!

かろうじてまた受け手になることはできた。……だが、先にジャンヌに言われた通り、力負けしており、どんどん剣の距離を縮められていく。

「く……!!」

「どつやらお前にはそこで寝ている涼宮ハルヒを守ることもできないらしいな。弱すぎて話にならん。」

ジャンヌはそう囁くと、俺の剣がいきなり凍り始めた。・・・何だつて!?

「最初に言っただけだ。この戦いにルールはない、とな。私の能力は氷。芯ま凍りつくがいい。」

待て・・・待ってくれ・・・。まだ俺は・・・死ぬわけにはいかないんだ・・・。

くそ・・・だがもうどうしようもない。氷はどんどん俺の手に迫ってきており、だんだん身体が冷えてくるのを感じる。

「どうした。抵抗することももう止めたのか？お前がここで凍りつけば、涼宮ハルヒの能力はもらっていくぞ？」

ハルヒ・・・。

そう言われて俺は気づく。俺は何故変装した音無とはいえ素直に逃げる道を選択したのか。

ハルヒの能力はハルヒのものであって、他の誰のものでもない。奪われる？ふざけるな。そんなことは絶対に許さん。何があってもだ。

「・・・」

「そろそろ頃合いだな。死ぬ、キョン。」

「・・・まだだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そう俺が叫ぶと、周りが振動したかのように思えた。

次の瞬間には、ジャンヌは吹き飛ばされ、俺の手首くらいまで浸食していた氷も一切消える。

「……これが……無……？」

そんな声が聞こえた気がした。

29話 く騙し合い

俺にも何が起こったのかさっぱりわからない。

だが、俺の中の何かがジャンヌを襲い、吹っ飛ばしたのは紛れもない事実であり、同時に俺は自分に対して恐怖を覚えた。

いつぞやのカマドウマ退治の時にふと思った疑問が、俺の脳内を駆けめぐる。

『俺は・・・何者なんだ・・・？』

一度は解けた疑問が、違う形で俺に降り注いできやがった。一体、いつから俺はこんなトンデモ能力が使えるようになったんだ・・・？

だが、そんなに考えている余裕などなく、すでにジャンヌは態勢を立て直していた。

「なるほど、どうやら本当に全てを無に帰す能力があるようだ。だが、その力は未だ全く制御できる見込みはないらしい。そんなギャンブル性に富む付け焼刃で果たしてどこまで生き残れるか？」

ジャンヌの言い分はもつともだった。

辛うじて死は免れたが、俺の中で何が起きたのかは全くわかっておらず、次も同じことができる自信は絶対がない。

「だが、本当に無の力を持っているという事実はあるようだ。Collapse”にとつてこれほど厄介な力はないだろうな。それ故に”Buster”はお前を保護する。お前が最後の切り札だからだ。」

こいつは一体何を言っているんだ？第一、お前だつて”Colla
pse”なんだろ？

すると、ジャン又は剣を柄に戻していた。・・・何が何なんだ？

「あたしが説明してあげるわ！」

どこからともなくジャン又のものとは全く違う声が耳に飛び込んで
きていた。しかし、暗闇のため姿は見えない。

どちらかと言うと、シャナの声に似ているような・・・？

「あんたとは初めまして、になるかしらね。」

暗闇の中から現れたのは、緋色の髪、目を持ったツインテールの少
女だった。他にも、巫女の姿をした黒髪の美麗な女性、長門のよう
な気配を感じる鮮やかな碧色のショートヘアの少女、そして俺と同
じように特に特徴を上げることできないくらいの男。
まるで、古泉を抜かしたSOS団そのものようだった。

「あたしの名前はアリア。正式名称は神崎・H・アリア^{ホムレ}だけど、ア
リアでいいわ。そっちの巫女服が星伽白雪、そっちの子が蕾^{レキ}姫、あ
と余りがキンジ。遠山キンジね。」

「ちょっと待て、アリア。何で俺は余り扱いなんだ？」

「うるさいわね、バカキンジ。一人紹介が余つたから余りなのよ！」

・・・この理不尽さには見覚えがあるね。

キンジとやらだったっけか。・・・南無三。

「話がズレたわね。私達は東京武偵高校からこの世界に迷い込んだ者よ。」

「迷い込んだ・・・？」

「ええ。その時、今この世界では大規模な戦争が起きていると知った。その目的は涼宮ハルヒとキョンという二人の男女の能力の争奪。少しでも戦力になる者は”Buster”と”Collapse”のどちらかに配属されるらしいわ。ただし、色々な理由があつて私達はどちらの面子からもオファーを受け、返答を保留中にしていたつてわけ。」

「・・・よくはわからんが、それなら何故ここに来た？」Collapse”側に付いたということか？」

俺は怪訝そうに、警戒を強める。

そんなことをしたところでこの人数相手に俺がどうこうできるはずではないわけなんだが。

「まだ保留のつもりだったんだけどね。涼宮ハルヒとキョンという男女を保有する”Buster”が”Collapse”からの直接打撃を受けているという連絡がそのジャンヌから入ったのよ。そこで、私達は二人の保護と能力の有無について調べに来たの。」

なるほどな・・・ん・・・？ということはお前らは・・・？

「ええ。私達『バスカービル』は”Buster”メンバーとして共に戦つと宣言するわ。」

・・・確かにうれしいんだが、イマイチ喜びに欠ける。それもその

はず、ジャンヌは俺を襲ってきたんだぞ？他のメンバーに化けてまで。

「それについては俺から説明させてもらう。」

一番特徴の無い、キンジという名の奴が前へ出た。

「俺達バスカービルという組織は元々俺、アリア、白雪、レキ、そしてもう一人理子つてのが居るんだが、その5人で形成されている。その中でも理子は”Collapse”方に通じていてな。意図的に独自行動をとり、今”Collapse”内部であっちの一員という名目で内部の情報を俺達に提供してくえようとしている。ジャンヌはその協力者。つまりアイツも名目上は”Collapse”だが、実際は”Buster”側の人間なんだ。」

ふむ・・・おそらくキンジは俺と同じような思考を持っているんだろう。さっきのアリアの説明よりは余程わかりやすかった。つまりはそっちのメンバーの中で二人スパイがいるってことだな。ならばジャンヌが俺を襲った理由はなんだ？

「ああ、それは本当にすまなかった。キヨン、お前の全てを無に帰す能力、その力がどの程度発揮されるものなのかのデータを取るために、できるだけ本気の戦いをして欲しかったんだ。重ねて詫びる。」

やれやれ、わざわざ不透明だった俺のトンデモパワーを顕在化してくれたってわけだ。この場合褒めるべきか怒るべきか・・・ま、助かったんだからどうってことないぞ。

「ついでに言っておくと、ここは”Buster”本部地下42階

に続く非常螺旋階段だ。もうわかるとは思うが、ジャンヌの言った言葉は全部挑発だったのさ。」

なるほどな。それなら納得だ。

そう謎解きが終わりかけてたんだがな……。

「……くっ……！」

突然、金髪の見た目は可愛らしい少女が目飛び込んできた。何故そんな表現をしたか。

それはその子の身体中を生々しい赤黒い液体が包み、制服の白い部分を覆っていたからだ。

「理子!?!」

キンジに呼ばれたその人物は、力無く倒れ込む。キンジがそつと支えを作ると、止まらない流血がキンジの制服の腕をあっという間に包み込んだ。

どういうことだ……? 理子ってのは確か……スパイをやっているっていうメンバーだったっけか?

「理子、何があつた!?!」

「キー……く……ん……まず……いよ……。なん……のし……らせ……なく……やら……て……その……こ

「……」

「慌てないで良い。とりあえず血を止めるのが先決だ。白雪、応急処置を頼む。」

「えっ、あっ、うん！」

キンジはそっと理子を下ろし、白雪に預ける。まさにその瞬間だった。

今日という日だけで数えて、三度の爆発音が階段中に鳴り響いていた。

30話 く剣帝：英雄王く

全く、今日は本当に騒がしい。

いきなり”Buster”基地に”Collapse”が侵入してきたと言われあたふたし、SSSの音無に隠し非常階段を薦められ爆発音を聞きながらもどんどん進み、いくら歩いたところで実は音無はジャンヌが化けた姿だとわかり、しかも一方的に攻撃しておきながら”Collapse”のフリをした”Buster”だった。

そしてまた問題が起きる。

目の前には血まみれになった”Collapse”のスパイ。そしてやってきた方向から突如として発した爆発音。只ならぬ殺気も感じた。一応一般人のはずの俺でも感じるのだから、相当なもんだろう。

以下、現在に至る。・・・やれやれ。

爆発音と共に白煙が舞い上がり、辺りを包む。

ハルヒは今気を失っており、理子とかいう武偵さんも致命傷を負っているため、逃げるという選択肢は俺達にはない。

どうもこういう展開に俺は嫌な予感しか抱けなくなっちゃった。俺ですらバシバシくるような、痛いまでのこの殺気からして、簡単に終わりそうな相手ではない。むしろ、戦況としてはこっちの方が不利な気もする。

まあ、実際にはそこまで考える余裕なんかなかったさ。

異常なまでの緊張感に包まれた場。皆本気の目をしてたからな。

「誰だ!？」

キンジが声を張り上げた。・・・しばしの無音の後、その声は聞こえた。

「ふん、出来損ないの雑種を追ってみれば、まさかターゲットに直接たどり着けるとはな。でかしたぞ、理子。」

金ピカの鎧を身に纏い、自ら髪も金髪。眩しすぎる男がそこにいた。

「てめえらが”Buster”と”Collapse”を行き来するスパイだったってことは初耳だったが、まあその集めた情報もここで塵と化す。残念だったなあ。」

「貴様・・・ギルガメツシュー!!」

ジャンヌは剣を引き抜く。そのジャンヌの威圧感でさえ半端じゃなかったが、それでもギルガメツシュと呼ばれた金ピカ男は全く姿勢を崩さずヘラヘラ笑っている。

「お前もだったな、ジャンヌ・ダルク。だがお前も知っているはずだ。どうあがこうが”Buster”に未来はない。待つのは・・・」

ギルガメツシュが動く。

スピードこそツナのような凄まじさはない。だが、威圧感はい前対峙したセフィロス並である。俺なんかはその凄みに身体が拒否反応を起こし、恐怖に怯えている。

ジャンヌはギルガメツシュが迫ったところを大きく跳躍し、叩きつけるようにして剣を振りかざす。
ギルガメツシュもその剣を下から一気に引き上げ、互いの剣をぶつける。

勢いよく飛び散った火花が、そのぶつかり合った剣同士の力の強さを物語っている。

「そんなものか？」

ギルガメツシュは再びニヤリと笑みをこぼし、剣を握っていない方の手をジャンヌの方に向ける。

刹那、どこからともなく操り主のいない様々な種類の無数の剣が顔を出し、ジャンヌに牙を向いた。

「……!!」

ジャンヌはその剣のいくつかを自分の持つ冷気で凍らせて勢いを消す。しかし、ジャンヌを襲う剣の数は減るどころかますます増していき、次々と襲いかかっていく。

その数に劣勢を悟ったジャンヌは、いくつかの剣を吹き飛ばし、自らギルガメツシュと間合いを取った。

「さすが自称『英雄王』と言ったところか……。まさか数を知らぬ剣を扱えるとは……。」

「ゲート・オブ・パレロン 我のコレクション：王の財宝とまともにやり合おうとするとは、余程命知らずのようだな。」

ギルガメツシュは再び剣を雨のように降り注がせる。ジャンヌは剣

を構えるが、その目は一瞬泳いでいたように思える。
そこへ……

「星伽候天流：緋ひのかがび? 毘び!!」

高らかな声と共に、熱を帯びた……いや、炎を帯びた刀が剣の雨の一陣をあっという間に吹き飛ばした。

「……白……雪……?」

「……下がって……。」

ジャンヌは言われた通り、一步引いた。先程まで理子を看護していた白雪さんとやらが、血相を変えてギルガメツシュと相對していた。

「今度は貴様か? ジャンヌよりはできるようだが、どちらにしろ我に傷を負わせることなんざ100万年ほど早い。さっさと涼宮ハルヒとそこの震えてるガキを渡せ。」

「ギルガメツシュ……貴方がどんな人なのかは真の意味では私にはわからない。良い人なのか悪い人なのかも。でも、私に言えることが一つだけあります。……仲間を傷つけるなら、私は傷つけた相手を許さない……!」

白雪は刀を水平に持ち、そのままギルガメツシュに迫る。

ギルガメツシュは数多の剣から風変りな一本を選択、空を切った。

「……!?!?」

紅く怪しく光る波動のようなものが、白雪を捕らえていた。

31話 〈潰えぬ疑問〉

「奏！悠二！後手に回って援護を頼む！ゆりはヴィルヘルミナと木山を看ててくれ。フェイト、行くぞ！」

ツナが高らかに叫ぶ。”Collapse”の罠によって分断された地上と地下のうち、地上の隊が急遽”Buster”本部へ戻ることとなった。

しかし、白蘭が瞬時に消えた後でも下つ端から中将クラスの無数の敵が行く手を阻み、本部へ戻れることは中々叶わなかった。

指示通りツナとフェイトはその圧倒的な攻撃力をフルに生かし、相手に致命傷を負わせない程度に敵をなぎ倒していく。対して奏と悠二は二人の死角から迫る敵を未然に防ぎ、それぞれハンドソニックとブルートザオガーで応戦していた。

「木山春生、あれを止める方法はないの？」

次々と戦っている仲間を前に、ゆりは訪ねていた。

「・・・止める方法などない・・・と言いたいところだが、一つだけあいつらの戦意をなくし、戦闘を中断させる方法がある。」

「教えなさい。貴方はもうこちらの身よ？」

「ふっ・・・君はまだ勘違いをしているんだな・・・やれやれ。」

木山は大袈裟に溜息を吐き、戸惑いを見せたゆりに対し、続ける。

「私は元々涼宮ハルヒの能力に興味はあったが使用しようなど微塵も思ったことがない、と言えはわかるか？」

「まさか・・・本当は”Buster”側だったって言いたいのか・・・!?」

「私に”Collapse”の奴らと手を組む義理はない。大体、私はあの日以来心に誓っているからね・・・。」

木山は一瞬思いつめたような顔をし、また向き直って言った。

「そんな・・・じゃあ何故”Collapse”なんか・・・」

「話が逸れたな。ここの戦闘員は皆力が格段に上がっているのは知っているだろう？」

ゆりの言葉を遮るようにして、木山は喋り始めている。

「それは、ある一定の脳から発する電波を、一時的にある人物とリンクさせ、波数を合わせたことにある。その電波は常時その人物から発せられ、例えどんな普通の人間であろうと期間限定で演算能力を数万倍にも高めることができる。本当の意味でのリンクという奴だ。」

「ということは、その人物を倒し、なおかつリンク先との波数の調整を止めれば、力は納まり迎撃プログラムが切れるってことね！」

「やすやすとやってくれる・・・。ここにいる全員とリンクしているんだ、とてつもない力を持っているということ自体、お前もわかるだろう・・・。実際問題、あの”Buster”リーダー格の沢

田綱吉が戦って勝てるかどうか・・・そのくらいの相手だ。」

その言葉に思わずゆりは息を呑んだ。

もし木山が放った話が事実であるとすれば、敵の数が多い分”Buster”側の方が圧倒的に不利である。しかも、前線で張って戦えるヴィルヘルミナが重傷を負っており、現時点でも戦力不足の感
は否めない。

現実、戦場に目を移せば、倒し続けても減らない圧倒的な数の”Collapse”の前に、ツナたちの息も絶え絶えになってきている。しかも、一般人すら混じっているこの”Collapse”部下の手前、大規模な攻撃による一斉ダメージを狙うこともままならない。このまま戦い続ければ、体力も精神力も尽きてしまい、全滅は免れない。それだけは避けねばならなかった。

「木山、今そいつがどこにいるかわかる!？」

「・・・君が挑むつもりか・・・? 見くびっているわけではないが、君一人が万一にも勝てるような相手ではないぞ・・・?」

「それでも、ツナ君たちが戦ってる以上、私が行くしかないわ。」

「・・・中々勇敢な女性だな、君は。・・・安心しろ、すでにこちらに来ている。・・・私も感じとった。」

そう言っつて木山は斜め前方にあるビルを指す。すると敵も味方も含め、全員がそちらに視線を移していた。

そこにいた人物は、ビルの屋上で直立し、こちらを見ていた。

「・・・お前は!？」

「・・・こちら”Collapse”将。”Buster”主戦力を発見。迎撃のち殲滅いたします。」

その言葉を発したと共に、彼女、はツナへ接近する。ツナは慌てて敵の目を振りほどき、彼女、と間を取った。

「・・・何故お前が・・・？」

ツナも驚愕の表情を崩せず、その場に固まっていた。

「一体誰なのよ、あの子は!?!」

地団駄を踏むゆりに対し、木山は声を震わして話しかける。

「・・・私が”Collapse”に潜り込んだ理由だ。あの子は・・・」

その言葉に誰もが耳を疑った。

「あの子は・・・学園都市が誇る常盤台のレールガン：御坂美琴だ・・・。」

32話 く全てを無に帰す力く

ギルガメツシユの剣から放たれた紅い波動のようなものは、瞬く間に白雪を包み込み、圧縮し、爆発した。

「……！？一体何が……！？」

「貴様が我に触れることは叶わんと言ったはずだ。」

ギルガメツシユは不気味な笑顔を崩すことなく、剣を握っている。

『天地乖離す開闢の星』エヌケヒツツ。

『乖離剣エア』と呼ばれるギルガメツシユの持つ大剣から放たれる斬撃の一種であり、その効果は空間をも切断すると言われている。

「話にならん。刀を持っているだけで、使い方はまるで赤子だ。貴様は引っ込んでいる。我は創造主たる力と無の力を回収してきただけだ。貴様らなどに興味はない。」

「まだ……まだ……っ！」

舞い上がった煙の中からかうじて白雪が立ち上がる。それでも彼女の手は先程の恐怖で震えており、肩からは鮮血が滴っている。実際、他のバスカービルメンバーも各々に恐怖感を覚え、全く動くことができない。ましてや、狙いの対象であるキヨンなどは戦況を見つめることしかできずにいた。

「その身体でまだ我に挑もうとするか。死にぞこないの雑種が！」

ギルガメツシユは再び剣を握る。爆発的な不可視のエネルギーが

乖離剣エア』に一気に溜まっていく。
白雪は重い身体を鼓舞し、凄まじいスピードでギルガメッシュに迫った。

「星伽候天流：緋緋星伽神！！」
ひひのほとぎがみ

「消える雑種！！！！」

再び炎の灯った太刀が、とてつもない力と対峙する。

先の技とは型の違うそれは、刀を巡る炎の流れが違っていた。
エネルギー体に流し込まれたかに思えた白雪の太刀は一定の炎量に達した瞬間、太刀自体が大きな炎の渦となったかのように、瞬間にエネルギーから逆流して相殺した。

「なに！？？」

一瞬怯んだギルガメッシュを見て、白雪は反撃に転じた。

ギルガメッシュの振るう乖離剣エアを身体ごと受け流し、どんどん攻勢に出ていく。数撃を浴びせてもなお固く刀を通さぬ金色の鎧に、白雪は一步下がって袖から5枚の札を出す。

「伍法緋焰札」
いほつひはむいふだ

ギルガメッシュ目がけて投げつけられたその札は、それぞれが炎を身に纏い、手数で襲う。

「ゲート・オブ・バビロン！！！！」

とっさに放つギルガメッシュの後ろから、無数の剣がまたしても降り注ぐ。

「白雪！！」

声に発したのはキンジ。しかし・・・行動に出たのはジャンヌだった。

デュランダルに氷を纏わせるようにして、正面の剣を凍らせて勢いを殺し、白雪をかばうようにして伏せた。

「遠山！お前はキヨンにアレを話せ！」

「・・・！！」

キンジはキヨンの元へと走った。

だ、ダメだ・・・。

身体が怯えてやがるぜ・・・。

セフィロスとの戦いで恐怖感というものを嫌ってほど打ち付けられた俺は、知らない巫女さんが血を流しつつも戦っている姿を見守っているしか選択肢が無かった。

・・・ヘタレだって？ふん、言ってる。

戦況を見つめていると、キンジとか呼ばれた男が俺の元へ駆け寄ってきた。・・・お前も顔が近いぞ。

「悪いな。だが・・・お前にやってもらいたいことがある。」

「俺は一般人のつもりだったんだがな。それに、無の力とか言う話なら、俺ですら訳わかってねえんだから期待しない方がいいぜ?」

「ああ、それは承知での頼みなんだ。ジャンヌからの情報だ。・・・
どうやら、ギルガメツシュの強さは奴自身にあるのではなく、奴の持つ無数の宝具にあるらしい。奴から宝具を取ってしまえば、こちらにも勝機が出てくる。その中で一番の厄介さを誇るもの・・・あのゲートオブバビロンだ。俺達がアレをどうにかしない限り、いくらやっても勝ち目はない。だが、幸いお前には全てを無に帰す力がある。しかも、それはお前の願いと連結しているんだ。無自覚なわけじゃない。」

そう言われて、ふと気づく。

確かに、あの時ジャンヌに凍らされそうになった時も、俺はこの氷を無くしてほしいと願った。そしてそれは現実になった・・・つか。

だが、今の俺はギルガメツシュに対する恐怖でいっぱいになってまともに考えることすらできねえ・・・どうすりゃいいんだ・・・?

「キヨン・・・涼宮ハルヒさんと共にSOS団の元に帰りたくはないか?」

「・・・!」

「ギルガメツシュを倒せ、なんて言っているわけじゃない。俺は”Buster”の元に戻りたいと思っただけだ。”Collaps e”は自らの欲望のみを追求する場所・・・そんな所にお前は行きたいか?」

「……俺は……俺はSOS団が全員揃っている場所に……帰らなかった。」

「キヨン……今お前の願うものは何だ？」

「俺は……ゲートオブバビロンを消す！」

俺の声が地下階段内に響き渡った。

すると……激しい金属音と共に無数の剣が……灰に変わっていた。

「……！？貴様、何をした!？」

ギルガメッシュが怒声を上げる。しかしその怒声は、一種の焦りも含まれていた。実際ギルガメッシュの持つ剣以外の剣、そしてその剣を格納している特殊な空間までもが灰と化した。

「アリア!白雪!レキ!今だ!!!」

キンジの張り裂けんとばかりの声と共に、レキはライフルを構え、アリアと白雪は大きく跳躍した。

「風穴覚悟しなさい!!!」

「……跳弾射撃……」

エル・スナイプ

「星伽候天流: 緋緋星伽神斬環!!!」

ひひのほとぎがみ

3者3様の武器が、ギルガメッシュを正確に捕らえた。

「おのれ、このような・・・雑種雑種ごときにい・・・!!!!!!」

俺は・・・この日四度目となる大爆発音をこの耳で聞いた。

33話 く歪められた運命

何度見たかわからない爆発煙が収まると、そこには身動き一つ取らずに倒れているギルガメツシュとそれを見るアリアと白雪の姿があった。

「勝った……のか……？」

俺は半信半疑で声に出す。

実際、あれほど痛いくらいの殺気を出すような奴が、この場に倒れ伏せるなど俺には到底想像もつかなかったからな。

だが、その疑念もすぐに解決した。

ギルガメツシュの身体が淡白く光り、その輝きと共にギルガメツシュ自体が足元からどんだん砂のように舞っていき、次には消え去っていたからである。

……あの時の朝倉を思い出すな……。

「あいつは元居た世界へ戻った。もうこっちに出てくることはない。キヨン、ありがとな。」

啞然としていた俺に、キンジが声を掛けてくる。……まさか本当に俺にあんなトンデモパワーがあったとはな……。

「ギルガメツシュも……いや、”Collapse”自体その力が目的だ。あと涼宮ハルヒさんの創造主たる力もな。だが今回理子とジャンヌが命懸けで潜り込んでくれたおかげで、敵の勢力図はある程度把握できたはずだ。あとはツナと正式に”Buster”契約を結べば、俺達は正式に”Buster”として活動できる。」

「お前らは何でここに来たんだ？」

「二人には確かにとてつもない力が宿っている。だが、それを仮に“Collapse”が手に入れた場合、俺達の元いたパラレルワールドに多大な影響が出る。それを何があっても食い止める必要がある。おそらく、“Buster”側の人間は全員同じことを考えていると思う。」

なるほどな。

自分たちのいた世界に対する悪影響の阻止……。もっともな理屈だ。

だが一つ疑問に思ったことが俺にはあった。

そうだとして、一体どうしたらこの戦いに決着はつくのか……。と。

「おっと、こうしている場合じゃない。理子も白雪も重傷を負った。早く医療室に運ばないと……！」

そうだったな。両方とも奇跡的に一命は取り留めてるみたいだが・
・セイバーやシャナ同様、しばらく医療室で手当しなければいけないのは顕著だ。

俺はハルヒをおぶった。

・前にも言った気がするが、背中感触がやっぱり嫌だな・
・つたく・やれやれ。

螺旋階段から非常扉を潜り抜けて本部に戻った頃、再び俺に連絡があった。

「おう、古泉か。」

「大丈夫ですか！？お二人とも怪我は！？」

古泉にしては慌てた声だな。

まあ、状況が状況だったんだ、無理もないな。

「ああ、一時は大変だったが、武偵つちゅう新しい仲間が敵を殲滅してくれてな。今医療室に向かっている。」

電話の向こうで、何やら安堵の溜息のような音が聞こえたようなきがした。

「わかりました、僕達もすぐ向かいます。どうやら、”Collapse”の奇襲は何とか防ぎ切ったようです。ただし、未だコケラが残っている可能性がありますので、注意を怠らずにお願いします。」

「ああ、わかった。」

俺とハルヒ、そして武偵の面子は、医療室へと急いだ。

一方、地上では戦いが中断し、皆驚愕の表情を浮かべていた。ビルの屋上でこちらを見つめていた”彼女”は、まるで瞳に生気がない。何か異変が起きている、それだけは事実だった。

「・・・木山・・・お前・・・今何て・・・」

「・・・一回で理解してほしいものだな、沢田綱吉。あの子がいる、それが私が”Collapse”に所属していた理由だ。・・・エレクトロマスター・・・御坂美琴・・・。」

再び口にした木山の発言に、ゆりは反論する。

「そんな馬鹿な！？だってあの子のデータは”Buster”のバンクにあつたわ！御坂さんの過去に”Collapse”に重なる思考は全くないはずよ！？」

「・・・意図的かつ武力的な脳内介入、そう言ったら君達は信じてくれるのか・・・？」

木山の鉛のように重い口は、ツナ達に新たな衝撃を与える。無論、”Collapse”に”Buster”のメンバーの脳を軽くあしらえるほどの能力者は未だかつて遭遇したことがない。それがかえって彼らに疑念を抱かせた。

「そんなことのできる異常な力の持ち主が、”Collapse”にはいるのか？」

「・・・いない。」

その言葉を言うが早いか、真っ先に掴みかかったのは・・・意外にもフェイトだった。木山の白衣の胸倉を掴み、目には怒りを顕著に表していた。

「貴方は・・・何を知っている？」

「……なるほど、そういうことか……。」

木山はそつとフェイトの手を制し、続けた。

「"Collapse"は何か企んでいるようだ……。7人もの力の保持者を捕らえ、ある式によってその全ての脳を狂わせた……。あの子もその一人だ。」

「……ということは、"Buster"側につく予定の7人を"Collapse"が何らかの形で操った……。と言いたいのか？」

「頭の方は切れるようだな、沢田綱吉……。私もそんな妄言を手放しに信じられるほどの人間ではない……。だが……。事実あの子は"Collapse"将として君臨しているんだ……！」

苦痛に木山が顔を歪める。話自体があり得ないものではあったが、到底嘘をついているような口ぶりでは無かった。そこへ、今一度フェイトが寄り添う。

「……私もその話はある程度の信頼に値すると思う……。」

「……君は何か知っているのか……？」

「いえ……。ただ、私となのはがこの世界に来たとき……。もう一人の子が行方不明になった。」

「……。まさか……！」

「・・・おそろく、御坂さんと戦うことで・・・情報が得られるはず・・・。」

フェイトは踵を返し、御坂に向き直る。

「・・・こちら”Collapse”将：御坂美琴。これより”Buster”将相当の5名を殲滅します・・・。」

地上に雷鳴が響き渡った。

34話 〈電撃と電撃〉

「……接近者に明確な敵意を確認……照合。」 Buster
中将相当：フェイト・テスタロッサと確定。殲滅します。」

ビルの屋上から一気に飛び降りた御坂は、対して登り詰めてくるフェイトとすれ違いざまに一局交える。

雷を纏った御坂の拳は、フェイトのデバイスである『バルディッシュ』を的確打ち据える。しかしフェイトは咄嗟に受け身を取り、バルディッシュのダメージを完全にカバー、御坂を追いかけるようにして地上へと降り立った。

「……やるよ、バルディッシュ。」

(Yes, sir.)

機械音と共にフェイトは飛翔、圧倒的スピードで御坂の後ろに回り込み、一撃を与えるべくバルディッシュを振りかざす。

対して御坂もその攻撃の直前に跳躍、やや距離を取ってフェイトの振り向き様に高純度の電撃を放つ。

「ディフェンサー
Defensor」

バルディッシュの判断で魔法を自動詠唱、広範囲に放たれた電撃の中で一番純度の低い場所を選びその正面へ、そのまま電撃を受け止めた。

「……（確か”Buster”の資料では御坂美琴は電撃と磁場を操る能力者。主な攻撃には電撃そのものや磁場を使った砂鉄の剣、

そしてもう一つ、レールガン。一つ一つの威力は凄いけど、行けるはず……！」

フェイトは無言わず間合いを詰める。御坂はそれに反応して磁場を利用してビル横に退避、張り付いた直後にまたしても電撃を発生させる。

フェイトもまたバルディッシュを前に突き出しており、詠唱させている。

「Plasma Lance」

プラズマランサー

バルディッシュの元に高密度の電気エネルギーが凝縮され、雷の槍が御坂目掛けて突進、命中のち爆発する。その瞬間、空気が変わった。

「……これは……？」

「……！フェイト、下がれ……！」

ツナの怒声がフェイトの耳を貫通したとほぼ同時に、フェイトの身体は水球……としか表現のしようの無い物体に包み込まれる。そしてその球体を稲妻が貫いた。

「うっ……！？げほっ、げほっ……！こ、これは……！？」

かろうじて稲妻の直撃を避けたフェイトだったが、息苦しさを未だ感じているようで、息遣いが荒く疲労困憊のように顔をしかめた。

「どうなっているの、ツナ？何故いきなり水が……」

「木山。」

ゆりの言葉をツナは全力で遮った。彼も超直感で危険を察知したに過ぎず、詳細は完全に不明瞭である。

「まさか今のは・・・御坂美琴の能力か・・・？」

ツナの一言に全員驚愕する。無論”Buster”のバンクに記されている御坂の能力に、こんな歪なものはなかった。

「いや・・・私も見たことがない・・・。彼女は確かにレベル5の能力者だが、能力は電撃のはず・・・？」

言いかけた木山の顔色が疑念から驚愕に変わる。

「まさか・・・そんなことが・・・!？」

「木山？何か知っているのか？」

尋ねるツナに、木山は目を見開いたまま震えた声でしゃべり始めた。

「・・・意図的かつ武力的な脳内介入・・・。」

「・・・!？」

「私が先程言った言葉だ。我々の世界では、演算能力を基礎として能力を量子力学で実現させていることを知っているか？」

「・・・というとは・・・。」

「ああ……。脳内介入をされるといことは、演算能力にも影響が出るはずだ。……底上げすることも可能かもしれない。そして今の能力、私がもし仮定したことが正しいものであれば、恐ろしい現実になりうる。」

「どういうことだ？」

「君は稲妻の原理を知っているか？上層と下層の電位差が拡大して空気の絶縁の限界値（約300万V/m）を超えると電子が放出され、放出された電子は空気中にある気体原子と衝突してこれを電離させる。電離によって生じた陽イオンは、電子とは逆に向かって突進し新たな電子を叩き出す。この2次電子が更なる電子雪崩を引き起こし、持続的な放電現象となつて下層へ向つて稲妻が飛んでいく、というわけだ。……これを彼女に当てはめると……。」

木山の言葉は、全員を震え上がらせ、この先の戦いを困難にさせるという点において十分すぎるものだった。

「……御坂美琴。レベルがどれだけ上がったのか想像もできないが……。今の彼女には分子自体を操ることができる能力があるらしい……。」

「！？分子だと！？そんなものが操れてしまったら、人間の身体ないしあらゆる生命を消滅することができることになる、そういうことか！？」

「だが私達は現に一息で殺されずに生きている。……それが彼女が敢えて能力を駆使しないのか、それとも根本的にそこまでの能力ではないのかまでは定かではないが……。もう一つ悪い知らせがある。」

「まだ何かあるって言うの!？」

ゆりも表向き凛々しくしてはいるが、目は愕然としていて、絶望を滲み出している。

「むしろ条件によってはこちらの方が悪い……。稲妻がここで発生するということは、真空状態……。つまり、エネルギーを最低限にすることも可能だというわけだ……。その証拠に……。周辺の空気がどんどん薄くなっていく、そう思わないか？」

ツナは我に返り、爆発煙の中の御坂の方を向くフェイトに叫ぶ。

「くっ……。!?フェイト!一旦引くぞ!今のままでは皆の生命が危ない!！」

「いえ……。残ります。」

「何!？」

フェイトの眼は、決意の表情をしていた、そう思わせるほどフェイトを取り巻く風が変化していた。

「彼女をここで止めなければ、確実に被害は凄まじいものになる。
”Collapse”の狙いは一貫してキョンさんと涼宮さんの二人。あの人達を守るには、この異常な能力だけは止めなければなら
ない、そうでしょう?」

ツナはフェイトの言葉に息を呑んだ。

その言葉はまさに事実であり、本部襲撃によって安否はわからない

にしる、本部へ戻って態勢を立て直す間に攻め込まれるよりは遙かに理にかなった行動である。

「沢田さんは力を温存しておいてください。・・・私が仕留めます。」

フェイトはそう言うと、バルディッシュの周りに雷が発生、その全エネルギーがバルディッシュに集中し、巨大な剣となった。一方、ダメージらしいダメージのない御坂も、自らスカートポケットからコインを取り出し、空中に弾かせる。

「雷光一闪・・・」

フェイトの唸り上げるような声と御坂の無言の殺意がその場の空気を完全に飲み込む。

「Plasma Zamber Breaker（プラズマ ザンバー ブレイカー）！！」

とてつもない剣撃による雷と発射されたレールガンが身に纏う超高度な雷がぶつかり合い、お互いの身体ごと爆風へ巻き込んだ。

「やったか!？」

ツナの声が響き渡る。全員目を見張るが、激しい爆風と磁界が視界の邪魔をし、中がどうなっているかもわからない。動揺する中で、木山はただ一人啞然として立っていた。

「……あれは……」

木山の目線を追うと、全身真っ赤に染まった御坂美琴が、力無く立ち尽くしていた。

爆風が収まり、ぼやけていた視界が元に戻ると、そこは凄まじい戦場と化していた。

超高層ビルは下層が完全に吹き飛び、地崩れを起こしている。ぶつかり合った場所だけほぼ全てが灰と化し、荒野と成り果てていた。

太陽が二人を写し出す。なるほどどちらも立っている。だが、その姿はもはや屍と言うに相応しく、お互いの身体は真紅の流血によって包まれている。思わず絶句し顔を逸らした悠二は、その目に焼け付けてしまった二人の姿を見て吐き気を催し、口を押えている。

「……御坂美琴……!」

「木山!行くな!!」

ツナの言葉を見無視し、木山はふらふらと歩みを進め、御坂の元へと急いだ。

「……大丈夫……なのか……?」

木山は半ば物に話しかけるように、御坂を見つめた。

答えのない彼女に木山は触れようと試みる……だが。

「うっ……!」

突然の呼吸困難に、木山は慌てふためる。何かに首を絞められてい

るような、そんな感覚。そして……。

「……！？……まさ、か……」

……その瞬間、鮮血が迸った。

木山が自分の腹部を見ると、そこには磁場によって生成された砂鉄の剣が刺さっており、木山は崩れ落ちた。

35話 く狂能力く

いつの間にか空を覆いつくしていた雨雲が去り、夕暮れの太陽が目
に飛び込んできた。

その太陽に照らされて、あでやかな真紅の羽衣を纏ったかのような
二人が茫然と立ち尽くし、その隣で木山は音も無く崩れ落ちる。

「木山！！！」

ツナは駆け寄ろうとしたが、歩みを止めようとした瞬間、凄まじい
息苦しさに襲われ、まともに息ができなくなる。

「くっ……！！！」

かろうじて炎の噴射にてその場を離れ、空間を脱したような抵抗感
があった後にその息苦しさは完全になくなった。

「……まさか……あの空間内の酸素濃度を弄ったのか……？」

もちろん、今の御坂には木山曰く『電撃だけではなく、分子自体を
操る能力』があるらしいため、その程度のことは確かに容易ではあ
る。

しかし、その切り離されたような空間内の酸素濃度を本当に弄って
いるとすれば、その能力を使用している御坂自身の命も危ない。

フェイトも正気を保っているとは言い難く、多量の出血を伴いなが
らも立っているものの、生気を感じることもままならない。

「どうすればいい……このままでは……3人が……」

刹那、御坂がおもむろにフェイトの方へ向き直る。

「……”Buster”中将相当：フェイト・テストロッサの生存を確認、攻撃を再開します……。」

「……!?!?」

血まみれであるはずの御坂は痛みを感じないのか、普段と同じスピードでフェイトに迫る。

フェイトは立っていることもやつとの状態であるが故に、避けることはできない。

その差に、ツナは違和感を覚える。周りの分子を弄れる能力は、自分に危険が伴う。ましてや、人間レベルであるそこまでの怪我を負った状態で無闇にそんな空間を作り出す意味もなく、かつ自分にまで影響が出ることを考えないというのは明らかに無理が生じる。

その考えも一瞬で消える。

御坂の手刀がフェイトを捕らえていた。

「まつ、待て……!」

その声が響き渡ると、フェイトの周りに不可視の何かが発生し、御坂の手を受け付けず、そのまま吹っ飛ばす。

「……はあ……はあ……。」

目を移すと、木山春生が右腹を押さえつつ立ち上がり、右手をかか
げていた。

紛れも無く、パラレルワールドから白蘭と共に持ってきた立華奏の
能力の一つである、あらゆるものをねじ曲げる『Distortion』ディストーション

on』だった。

「対象：木山春生を”Buster”側として認定。攻撃を続けま
す。」

御坂は木山に対して殴りかかってくる。

その御坂に対し、木山は先の反動で動くことができない。

「くっ……!?!」

「……X-BURNER!!」

声と共に圧倒的な密度の炎が御坂、木山、そしてフェイトのいた場
所を包み込む。

直撃の瞬間に激しい爆発が起き、たちまち黒煙が上がっていった。

「……綱吉君!? あんた、なにやって……!?!」

「……大丈夫だ、ゆり。……これでいい……。」

目を移すと、そこにはその炎に驚く3人が一切の動きを止め、目を
見開いていた。

「……御坂美琴。……なるほどな。」

「”Buster”将クラストップ：沢田綱吉。ただちに殲滅を・
」

「お前に俺を消すことは不可能だ。」

ツナの眼が、ツナの姿が御坂を震え上がらせていた。

「武力的脳内介入でお前が手にした能力は・・・分子を弄る能力じゃない。・・・電気エネルギーを他の力に変換し、自然現象を作り出す能力だったんだな。」

「・・・！？それは・・・一体・・・？」

「レベル5の御坂美琴だからこそ、今までは電撃を操る能力という資料だったが、昔は違ったはずだ。・・・そう、発電体質。」

沈黙。

誰も喋ろうとも、動こうとしようともしなかった。

「人間が発電に利用している物質。・・・火力、水力、風力、原子力、光力。それらを電気エネルギーの逆置換によって原子、分子レベルで組み換え、あたかも魔法のように再現してた・・・そういうわけだな。」

ツナは語りかけながらも再び構える。

「・・・だが、その強大な力故に制御が効かなかった。さっきの稲妻の後からお前は物理攻撃に頼り切りだ。それは何故か。・・・答えは簡単だ、不用意な稲妻発生によって空気中の酸素がやられ、その場所が無意識に真空状態空間と化したのを恐れたからだ・・・！」

ツナはその言葉が終わるや否や、一気に御坂の後ろに回り込む。

御坂は振り向き様に拳を上げるも、ツナの速さは圧倒的であり、その拳をあっさり受け止められ、もう一方の手が御坂の額に載せられる。

「チエックメイトだ・・・！」

ツナから細かい炎が放出され、御坂の脳へと直接響かせる。

「・・・！」

一瞬目を完全に開いた御坂は、やがて目を閉じその場に倒れ込んだ。ツナは御坂とフェイト、そして木山もゆり、奏に任せ、本部への連絡を試みた。

「こちら沢田綱吉。オペレーションルーム、聞こえるか？」

「お勤めご苦労様です。こちらオペレーションルーム、古泉一樹です。涼宮さんと彼の無事が確認できました。もう安心して大丈夫です。」

「・・・そうか。」

「今回は新戦力のおかげ、と言っておくべきでしょう。貴方が懸念されていた部隊が、”Buster”への契約をお待ちです。」

「わかった。そちらへ戻る。だが、本部は大丈夫か？」

「”Collapse”側に我々の本拠地がバレってしまった以上、

何かしらの手は打たねばなりませんね。幸い、本部丸ごとを移動させる手段は残されていますが、いくつかの階が壊滅状態です。修築が必要かと思われませぬ。」

「……了解。」

ツナは溜息をつきながら、怪我人を含めた本部への輸送を開始した。

”Collapse” 領内に激震が走った。

「……キヨン様、朝倉様。ご報告があります。」

「……どうした？」

「”Collapse” 第6格納砦より連絡が入り、敵襲を通告されました。」

「……敵襲？”Buster”がか？」

「詳細は不明です。……ですが……。」

言葉に詰まる部下に、朝倉は怪訝そうに声を掛けた。

「ん？・・・何か問題でもあるのかしら？」

「実は・・・迎撃として現在あらゆる手を駆使している現状なのですが、圧倒的に少ない人数にも関わらず、"Collapse"側の者が成す術なく力尽きているそうです・・・。」

「・・・第6格納砦は嚴重に戦力を配置しているはず・・・!!！」

言いかけて、朝倉は驚愕する。

「・・・まさか、あの一派が失われた7人セランス・ロストを・・・!？」

場所は変わって第6格納砦。凄まじい戦争が勃発していた。

「何故貴様らがここにいる!？何故ここの場所を!？」

「何故何故うるせえぞお、雑魚があ!!！」

刹那、"Collapse"軍の兵士がまた一人、対象に触れられずに消滅する。

「おいおい、ほどほどにしとけよ？そんなにグロテスクなシーンなんて見たくねえぜ？」

「うるせえ。てめえとだって本当は組む気は無かったんだ。今回限りにして欲しいくらいだ。」

「・・・ああ、そろそろ入口が見えてきましたね。あそこです。」

「早くお会いしたいものですね、失われた7人に。」
セブンス・ロスト

それぞれの会話が流れ、真っ直ぐ”Collapse”側の敵を見据えた。

その視線の凄みに、兵士達は尻込みし、圧倒的数の差にも関わらず劣勢を感じ取り、本部に連絡をする。

「こちら第6格納砦！Buster”側と交戦中、援軍を要求します！！・・・対象は4人！！・・・カムシン・ネブハーウ、喜緑絵美理、一方通行、そして上条当麻です！！」

その瞬間、連絡を試みた兵士ごと、入口の1個師団が壊滅した。

36話 く合流と始まる闇

「キヨン・・・よく無事でいてくれた・・・!」

ツナたちが帰ってきて早々、俺は様々な奴らに握手を求められていた。・・・なんだなんだ・・・? 新手のドッキリでも企んでるのか? まあ、そう言いつつも皆目に涙溜めながら握手してくるもんだから、俺も目のやり場に困ってはいたんだがな。

「沢田綱吉、ね。」

俺とツナの固く握った手を振りほどき、ぴよこんと俺の前に出たのは紛れも無くアリアだった。やれやれ、このアリアさんとやら、どっかの誰かを思い出すほどの唯我独尊っぷりだな。

「改めて、私は東京武偵高校、バスカービル所属副リーダーの神崎・ホームズ・アリア。私達武偵一門は貴方達”Buster”への正式加入を申請するわ。」

「承諾した。こちらで書類を書いてもらうことになる。詳細人数と名前の記入を頼む。あとはこちらからデータをパラレルワールドより転送、照合し、保管させてもらう形になる。良いか?」

「ええ、問題ないわ。」

そんな話を続けているので、俺は古泉と共にハルヒの寝ている病室へと足を運んだ。

「今回はお前も大変だったみたいだな。」

「……ええ、勿論大変でしたよ。死を覚悟もしましたしね。」

そんな大層なことを言う古泉の顔は、何故か微笑みを映し出していた。

その微笑みは決して明るくは無く、むしろ悲しみを含んでいた……ような気がする。

そんな顔を見ると心が痛む。俺はなんとかその場をやり過ごそうと試みる。

「なんだ、その顔は。気色悪い。」

「おっと、これは失礼。やはり貴方は貴方なんですネ。僕も墮ちたものだ、貴方と会話するだけだというのに、これだけ警戒するなんてね。」

「……何かあったのか？」

「……名答です。実際これを貴方に話すかどうか迷ってはいたのですが……まあ、ここまで話してしまえば貴方が引き下がる可能性は皆無です、正直にお話しましょう。」

古泉はまず俺の顔を眺め、視線をハルヒに移して起きていないか少し見つめてから、再び俺の方へ向いた。

「先の戦闘で我々の所属する”Buster”本部を襲撃してきた首謀者が……”Collapse”側の貴方だったんですよ。」

……なるほどな。

向こうの俺が古泉や長門と戦っちゃったってわけか。
自負するほど俺は大それた人間じゃないんだが、それでも俺はSO
S団の一員だ、仲間と戦うことなんてできっこない。それを・・・
古泉は担ったんだ。

「・・・朝比奈さんもまさか・・・」

「ご心配なさらずに。彼女は攻撃の意思は全くありませんでした。
むしろ、貴方のことを心配なさっていたんですよ。涼宮さんと共に
無事でいてくれるかどうかだね。僕たちは”Buster”の貴
方が真の貴方だと確信しています。貴方も僕たちを信頼して頂ける
と光栄ですね。」

「ああ、わかってるさ。これからも頼んだぜ、古泉。」

古泉は一瞬目を驚いたように開いたが、すぐにいつもの胡散臭いス
マイルに戻り、部屋を立ち去っていた。

・・・そうだな、お前にはその嘘くさいスマイルが死ぬほど似合っ
てるぜ。

俺は折り畳み式の椅子を見つけ、ハルヒの傍で腰かけた。

形の整った寝美しい顔に、俺は一瞬硬直する。

ハルヒ・・・すまん。

もう少しだ・・・もう少しで終わるから・・・。

それまで・・・何も知らないままでいてくれ・・・。

「すっこんでろ、三下ああああ!」

アクセラレータ

一方通行は凄まじい勢いで敵をなぎ倒していく。

これまで数千もの兵をほぼ一人で片付けている。

その状況には、さしものカムシンも尊敬を通り越して呆れていた。

「ああ、さすがですね。これなら仕事も早く片付きそうです。」

「とても『さすがですね。』と思ってるようには見えねえよ。まあ、元々俺達のいた学園都市が誇るいくつかのレベル5のうちの最高位だからな。能力がチート級なんだから、この結果は当然だろうよ。俺達の出る幕はなさそうだけ。」

当麻がそう対応する。彼もまたとてつもない能力を持つてはいるものの、ここにきても全くその力を行使していない。いかんせん、一方通行アクセラレータの能力が桁違いである。

「彼が味方で良かったですね。心強い限りです。」

そう褒め称える喜緑も、心底心強いと思っているかどうかは定かではない。

そう言っているうちに、アクセラレータはこの階の敵も全て一人で片付けていた。

「ふん、なんなんだ、コイツらは。弱すぎて話になんねえ。カムシ

ン、地下牢はまだか？」

「ああ、この先です。この辺りから魔力の流れを感じます。」

（ふむ。どうやら特殊な結界が張られておるようじゃな。だが、その上条当麻の能力を使えば、問題はないじやろう。）

カムシンの声に応じたのは彼と契約をした紅世の王『不拔の尖嶺
ベヘモット』。穏やかである分、何事にも事務的で冷徹なのが特徴
である。

「ああ、それは問題ないと思っぜ。俺のイマジンプレイカーなら、
結界云々は関係ねえからな。」

「ならさっさと行くぞ。つたく・・・!？」

歩み始めようとしたアクセラレータは、すぐに止まり、言葉を切っ
た。

「ん？どうしたん・・・だ・・・!？」

アクセラレータの言動に疑問を持った当麻だったが、前を見てすぐ
に我に返る。

殺気はない。だが・・・何故か怖い。

「よくここまでできたもんだな。一応先鋭をここに配置したつもりだ
つたんだが・・・貴様らが相手では確かに30分も持たんな。」

「・・・てめえは・・・!」

「貴方が・・・」

アクセラレータの言葉を遮り、喜緑が表情を崩さず喋りかけた。

「・・・貴方が”Collapse”のリーダー・・・キヨン君です。噂はかねがね聞いています。」

「喜緑さん・・・か。懐かしい人に会ったもんだ。だが・・・ここは通すわけにはいきませんからね。俺に出させてもらいますよ。」

そうしてキヨンはニヤリと笑う。悪魔のような恐ろしい微笑み。普通のキヨンには絶対にあり得ない口の形。間違いはなかった。

「なあ、キヨン。どいてくれねえか？俺達はお前らと戦争をしに来たんじゃない。」失われた7人^{セブンス・ロスト}を取り返しに來ただけだ。互いが互いを傷つけるようなことはあんましたくないだろ？」

当麻が落ち着いて話しかける。

しかし、その言葉がキヨンの耳に届くはずもなかった。

”Collapse”のキヨンは”Buster”のキヨンとは違う。

「失われた7人^{セブンス・ロスト}か。実に興味深いものだ。圧倒的力を持つ者、雷を操る者、特殊状況下での二重人格者や狂戦士を操る者・・・ たっぷり研究させてもらったぞ。・・・特に”あいつ”はな。」

「何・・・！？てめえ、まさか・・・！？」

「好奇心で触らせてもらったよ。彼女は偉大だ。人の脳を弄る方法から、次の多次元宇宙からの扉さえ割り出すことさえ楽々となし

た。さすがだな。……………あの書庫は。」

「……………!! てめえ、『インデックス』に何をした!!」

当麻は怒りに燃える。制止させるものは何もなく、ただ感情が爆発していく。

「良い表情だな、当麻。なに、武力を用いたわけではない。ただ教会の名を借りただけだ。」

「……………なんだとおお!!!!」

走り出しそうになる当麻よりも先に、無言で飛び出した者がいた。それは握り拳を作り、キヨンに迫る。

キヨンはそれを受け流し、そのまま一本背負いで投げ飛ばしていた。「全く、人の話を最後まで聞く礼儀もないのか、貴様は。……………やれやれだな。」

「うるせえ。俺は早くこんな仕事を終わらせてえだけだ! 幸い”Collapse”のリーダーが直々においでなさったからなあ、思う存分暴れさせてもらうぜえ!!」

「……………!」アクセラレータ「一方通行さん、伏せてください!」

「なに!!? ……!!」

喜緑のセリフよりも早く、アクセラレータは地面にとてつもない勢いで打ち付けられた。

「何を見たのかは知らんが・・・あっちの雑魚の俺と一緒にすんじやねえぞ?」

キヨンは再び悪魔のような笑みを浮かべていた。

37話 く圧倒く

曇天の空が周囲を覆い、漆黒の闇が露わになる。

そこは誰もが知っている場所。ほとんどの人間が訪れたことのある場所。

その中に彼らはいた。

「……ん？奴はどうした？」

「やっぱりダメダメだったね。」 Buster ” に取られちゃったよ。所詮は学園都市の一派、どちらにしるグルだったってわけね。」

そう言いつつもニヤリと笑みをこぼす白蘭は逆に問いかける。

「それよりも、僕らの主はどうしたんだい？君がここらを出歩くってことは……まさかのお出かけかい、セフィロス？」

「……そのようだ。どうやら第6格納砦が襲撃を受けたらしい。” Buster ” 側のSSクラスの人間を送り込んでいたと聞いたな。それゆえに直々に出るそうだ。」

セフィロスは自分の近くにあつた椅子の埃を指でなぞり、そのまま弾く。

そのまま椅子に座ったかと思うと、今度は別の方面から声が聞こえ、二人はそちらを向いた。

「第6格納砦、か。確かそこには失われた7人がセブンス・ロスト隠されていたはずだ。彼らがそれを狙ってきたということか。ははっ、全くもって面白い奴らだ。……僕が行ってみたいくらいだね。」

「敵は仮にもSSランクが4人だ。そのうちの一人は幻想殺し（イマジンプレイカー）の上条当麻・・・貴様のような術式を頼るガキ風情に何ができる？」

セフィロスは微笑し、会話主の少年姿の人間を見る。

褐色のマントに茶色がかった女性のような長髪。何よりも、連れには語らぬ赤き巨人がまるで石像のように付き従っている。

「・・・それは僕に対する挑戦と見て良いのかな、セフィロス。君と僕のランクには差は全くない。・・・それに、僕の力は幻想殺し（イマジンプレイカー）程度じゃ止められない。せいぜい危惧すべきなのはキヨンという男の力だ。」

「君達は本当に血の気が盛んだなあ。僕らの勝ちも元々目に見えてるんだ、そう焦ることは無いさ。そうだろう、ハオ？」

白蘭がポケットからマシユマロの袋を取り出し、音も立てずに頼張る。その余裕に二人の戦意も失われたようで、お互い踵を返して席に着いた。

「皆様相変わらずのようですね。私も安心しましたよ。」

またしても人がやってきていた。

タキシードを身に纏い、鋭い型の眼鏡をかけたその男は、無数に用意されている椅子のうち、セフィロスたちに最も近い場所を選んだ。

「おお、ブラドちゃんじゃん。何か報告でもあったのかな？」

表情を崩さず笑顔で質問する白蘭に、ブラドも笑顔で応対した。

「はい。・・・我らが主と彼らが接触しました。」

地面に打ち付けられた一方通行は、アクセラレータすぐに起き上がって一旦”CO
lapse”側のキヨンの間合いを取る。

「何だア、今のは!?!」

「何か空気ごと押し潰されるような、そんな攻撃が来ていました。」

喜緑が冷静に説明する。

だが、その説明は空しくも否定された。

「押し潰す? 違うな。俺はその空間を無に帰しただけだ。」

「・・・!まさか、一時的に座標通りの場所の空間を吹っ飛ばすこ
とができるってのか!?!」

当麻も慌てふためく。

実際アクセラレータが攻撃された時のキヨンの振りはなく、どこか
ら打たれたのかも全くわからない。

攻撃の瞬間を特定するのは至難の業である。

「そんなの関係あるかあ!?!」

有無も言わず飛び出したアクセラレータは、再び地面に打ち付けられるかのような衝撃を受ける・・・も。

「はあああああ!!!!」

どこからともなく飛んでくる攻撃を、どんどん拡散させていった。

「ほほう、さすが学園都市の誇るアクセラレータ、無の力のベクトルを瞬時に判断、勅も交えつつ拡散させてやり過ぎしたか・・・確かに邪魔な能力だな。」

「邪魔だア!?それはてめえのことたるオ!!!!」

そのまま足元に対する力のベクトルを変化させ、凄まじいスピードでキヨンに突進していく。

キヨンは動かず、ニヤニヤ笑っている。

アクセラレータはキヨンに触れ血の流れを変えて一気に倒すべく、拳を振り上げた。

「・・・その能力、邪魔だ。」

・・・・・・・・・・ピキーン・・・・・・・・・・

何かが崩れ去ると共に・・・アクセラレータはその場でうずくまる。口から幾度も血を吐き、ついには倒れ込んだ。キヨンの足元はたちまち血の海と化する。

「・・・一体・・・何が起こったんだ・・・?」

当麻も目を見開き黙ったままにいる。無論、喜緑もカムシンも表情

自体は崩してはいないものの、驚愕しているという印象は受ける。

「やっぱり学園都市一派もこの程度ということか。能力を無に帰すということは、一瞬でも脳の演算能力に異常をきたして、脳が爆発的な熱量を帯び、簡単に言うオーバーヒート状態を起こすということと同義。そんな程度で俺に挑むようなコイツもつくづく運の無い奴だけだな。」

キヨンは再び、先と同じ悪魔のように口元が大きく伸びた笑顔を作る。アクセラレータの笑い方にも酷似するそれは、当麻を怒りに燃やした。

「てめえ……よくもコイツを……」

「幻想殺し……イメージブレイカーの上条当麻、か。確か俺の力と似てたな。異能の力を全て打ち消すことができる……だったか？」

「よくわかってるじゃねえか!!!」

刹那、当麻は飛び出す。

キヨンは今度は動きを作り、当麻の左手の拳をゆるりとかわす。……そこには。

「これでどうだあああああ!!!」

当麻の右腕が待ち構えていた。

「……あらかじめはつきりさせておこう。」

パチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

とてつもない音量の効果音が辺りを響かせ、弾き、拡散し、収まる。
当麻はその瞬間、目を見張った。

当麻の右手は・・・キョンの開いた右手にすっぽりと収まっていた。

「・・・!?!」

「打ち消しと無に帰すでは」

そして、当麻が不可視の何かによって、大きく吹き飛ばされた。

「・・・何もかもが違うのだ。」

38話 幻想殺し潰し

吹き飛ばされながらも、当麻は必死で体制を整え受け身を取る。改めて”Collapse”側のキヨンを見た当麻は、愕然とした表情を浮かべた。

一方通行は多量出血によって動くこともできず、喜緑、カムシン双方も行動は起こさない。

ただただニヤリと大きく笑みを浮かべるキヨンと、やっとの思いで立ち上がった当麻を傍観しているようにも見える。

「なっ・・・なんなんだ・・・？今俺はあいつに触れたはずだぞ・・・？イマジンプレイクの感触もあったのに・・・何故・・・？」

「異能の力を打ち消す能力は、俺の指示によって無へと帰した・・・とでも言うておくか？確かにお前は恐ろしい能力を持っている・・・だが、所詮それは能力。能力を無にするという上書きを重ねればいいだけの話だ。」

「お、おい・・・そりゃ反則だろ・・・！？」

キヨンの言葉に当麻は一滴の大きな冷や汗を流していた。

今まで異能の力をことごとく破ってきた上条当麻。彼にとってこの能力は不幸に苛まれるものではあったが、その手の戦闘においては圧倒的な戦力となっており、なおかつ切札ジョーカーとして揺るがぬ信頼と共に当麻自らも自信を覗かせていた。

その力が”Collapse”のリーダーによって一瞬にして砕け散った。

確かに手ごたえはあったはずである。イマジンプレイカーの能力は確かに発動していたはずだ・・・だが、そこに何かが起きた。

曰く、『全てを無に帰す力』の発現である。
だが当麻自身にはそれは受け入れ難い真実であり、同時に絶望を感じさせる一発だった。

相変わらずキヨンは悪魔のような笑みを浮かべたままその場をピクリとも動こうとしない。

「考える俺・・・どうしたらいい？どうしたら彼奴を倒せる・・・！？」

「俺を倒す、ね。せいぜい頑張ってみればいい。・・・結果は見えてるがな。」

そう言つてキヨンはまた何かをつぶやく。
直後、一つの声上がる。

「上条さん、座標指定237,318,41への強制干渉です。右斜め前方に避けてください。」

当麻は咄嗟の指示に戸惑いながらも慌てて指示方向に転がり込んだ。すると先程当麻の左足の膝の存在していた辺りから地面にかけて大きく歪み、その場に穴を作った。

「あ、あぶねえ・・・」

当麻は盛大に尻もちをつく。確かにその場につっ立っていたら、左足を持って行かれただろう。その事実にも当麻は溜息を付きつつ再び立ち上がった。

「喜緑さん・・・さすが長門の仲間・・・対有機生命体コンタクト

用ヒューマノイドインターフェースだけのことはある。不可視のはずだったんですが・・・よく俺の座標指定を狂いなく割り当てましたね。どうやったのか聞いてみたいもんだ。」

「人間ではありませんから・・・とでも言っておきましょうか？」

あくまでにこやかに、喜緑は取り繕う。

「情報統合思念体・・・か。懐かしい響きだ。だが貴方が出たところで何も変わらない。情報統合思念体とのコンタクトを絶ってしまえばいい。そうすれば貴方はもう・・・ただの人間だ。」

「私達の情報制御を乱すというわけですね。」

喜緑は当麻の元へ駆け寄り、小声で囁く。

当麻はいきなり近づいてきた喜緑に一瞬焦るも、その小言の内容を聞いて啞然とする。

「彼に貴方の力が通用しない以上、この面子で彼に勝利できる可能性は1%を下回ります。でも、彼でなければ貴方の力は届く・・・先に行ってください。彼は私達が何とかします。」

「そ、そんなことできるかよ！？お前らは・・・!？」

半分怒鳴り声を上げた当麻の口に、喜緑は人差し指を当てた。

「失われた7人は、セブンス・ロスト貴方が居なければ解放することはできません。お願いしますね？」

にっこりと微笑む喜緑に当麻は・・・走り出した。

「なんだ、何か作戦があるのかと思って待ってやっていたら・・・
そういうことかよ。」

キヨンは再び何かをつぶやこうとする。

しかし、それはいきなり目の前に突進してきたカムシンによって、
完璧に拒まれた。

「チツ・・・偽装の駆り手・・・！宝具は確か鉄棒メケストだったか・・・
面倒くせえ・・・！」

キヨンは大きく跳躍、カムシンとの距離を取った。その間に当麻は
階段を降り、すでに視界からは消えていた。

「さて、どうしましょうか？」

「・・・やれやれ、やってくれたものですね。まあいい、あいつ一
人が行ったところですのでどうにもならない。」

「・・・？」

キヨンは怪訝そうな表情をする喜緑に一瞥をくれ、カムシンを向く。
カムシンは落ち着いた物腰でメケストを振り上げキヨンに迫る。

その攻撃をギリギリのところかわし、カムシンに拳を突き上げ吹
っ飛ばした。

「ああ、なるほど、そういうことですか。」

先の拳によって口元を切ったカムシンはだったが、冷静な顔一つ崩
さずにキヨンを見つめている。

「……どころやら貴方は物体をそのまま無にすることはできないようにですね。」

初めてキヨンが揺れた。

「ほほう、面白いことを言う。何故そう思ったんだ？」

「ああ、もし貴方が物体を無にできるなら今頃僕達は存在してないでしょう。それに打撃戦闘で貴方は能力を行使しなかった。」

「良い推理だ。……だが」

突然の言葉に警戒するカムシンだったが、キヨンは動かない。……その代わり再び悪魔のような笑みに戻っていた。

「少し甘い。……メケストは『宝具』だ。消せる。」

刹那、とてつもない金切声のような、苦痛に叫ぶような音と共にメケストがひん曲がり……切断された。

「……!?!?」

驚愕するカムシンにキヨンは一気に間合いを詰め、深く腰を落とす。凄まじい勢いで拳がカムシンの鳩尾に突き刺さり、壁に激突させる。

すると、稲光のように今度は喜緑が突っ込んできた。

その一瞬の出来事にさしものキヨンも怯み、破壊力のある蹴りをまともに喰らった。

「がつ……!!……この……統合思念体の犬があああああ
!?!?!」

半ば焦点の定まらぬ目でキヨンは喜緑を睨みつける。
するとその瞬間、喜緑が目を見開いた。

「……っ!?!?」

音も感じ取れぬような叫びとともに……喜緑も倒れ伏せた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……。情報統合思念体……お前ら
だけは……お前らだけには……償ってもらおうぞ……。」

キヨンはふらふらになっている身体を無理に起こし、降り階段へと
向かった。

39話 く失われた7人く

「はあ……はあ……はあ……」

当麻は階段を駆け下り続ける。

この格納砦、地下室は一応地下一階とは言つものの、かなり奥深くまで階段が続く。

息は切れ切れではあつたが、当麻には早急にクリアすべき課題がある。

『失われた7人の救出』
セブンス・ロスト

そうでなければ、一方通行、カムシン、喜緑の身が危ない。

喜緑は「Collapse」のキョンを倒すことは現時点で不可能だ」と言っていた。

彼女のような宇宙規模の力すら及ばぬ、まさに神のような存在。

幸い失われた7人全員が「Buster」側であるという情報がある。うち幾つかの名前はすでに彼らにも知らされており、信頼のできる力を持っていた。

そもそも失われた7人はこの世界で起きたことではなかった。

セブンス・ロスト
多次元宇宙での「Buster」、セブンス・ロスト「Collapse」間の戦争の際、「Collapse」によつて強制的に連れ去られた7人を指す。

その7人は「Buster」内部でも段違いの能力持っており、それを逆に利用され「Buster」は結果的に規模を少しずつ萎縮させる羽目になり、今ではこれだけの人数となつてしまつている。最も、同じ「Collapse」の人間も相当数の犠牲を払つてはいるものの、元々圧倒的な軍事力を持っていたため、未だその力差

には大きな開きがあった。

そのため、実際問題失われた7人を取り戻すということには”Buster”にとつて大きな意味がある。セブンス・ロスト

そのためこの4人は一時独立して隠れていたのだ。来るべくセブンス・ロスト奪還の日がくるまで。

ついに階段を降りきった当麻は、大きな地下牢につく。
・・・人影は・・・ない。

「どこだ・・・？どこにいる・・・？」

ひんやりと冷たい地下牢は、不気味なほどに静まり返っていた。そこへ。

「”Buster”による聖域汚染を確認・・・迎撃してください。」

闇に染まる地下牢に響く声に、当麻はハッと気が付く。

この声は・・・聞いたことがある。

「・・・！どこだ！？どこにいる・・・インデックス！！」

焦る当麻が歩を進めた刹那、当麻目掛けて何かが迫ってくる。

浮遊したそれは、暗闇に目と口を映し出し、そのまま突進してきた。いた。

「・・・骸骨！？くっそおおお！」

とっさに当麻は右手を開くと、猛スピードで突進してきた”骸骨”

は辺りに響き渡る超高音と共にはじけ飛んだ。
その攻撃によって女性の声_がまた耳に入ってくる。

「・・・対象の消去は無効化されました。引き続きデータ解析による敵陣の情報を照合・・・エラー。この情報は選択的に除去されています。現状データのみでの迎撃を行います。・・・Start。」

「インデックス!!」

声のする方向に当麻は走る。

・・・しかし。

キイイイイン!

足元に何かが突き刺さった。

すると、辺りはいきなり明るくなる。

何事かと当麻が驚愕の表情を浮かべていると、突き刺さった物が当麻の身長ほどもある大鎌であることが判断できた。

「フフフ・・・」

また違う女性の声_がする。

そして、突き刺さった大鎌が声のする方に帰っていった。

その鎌を目で追っていくと、一つの答えが当麻の頭に浮かびあがってくる。

この女性には見覚えがある。

「・・・失われた7人の一人_{セブンス・ロスト}・・・デッドマスター・・・またの名を・・・小鳥遊ヨミ・・・!」

デッドマスターを睨むと、当のデッドマスターは不敵な笑みを浮かべるままだった。

コツ、コツ、コツ………

デッドマスターの後ろから誰かが歩いてくる。

白地に所々黄金を貼りつけた修道服。淡い水色の髪。碧眼。聖少女の姿がそこにあった。

「……インデックス……？」

あまりの唐突さに当麻は言葉を失った。何故か。

普段の彼女ではなかったからだ。美しく輝いていた碧眼からは精彩が失われ、ほぼ虚ろ状態である。よく見てみれば、デッドマスターの眼にも色彩が感じられない。

何かが狂っている、それだけは隠しようのない事実だった。

「インデックス……お前……」

「警告します。」 Buster ” 将相当：上条当麻と確認。能力解析結果は……エラー。能力解析に対する脳内妨害により強制終了します。……能力値不明の場合、聖域死守を最優先課題として設定、当該者の確実な殲滅を行います。」

「……!? なっ……!? 」

ふと見渡せば、いつの間にか当麻は完全に包囲されていた。

地下牢の中でも比較的広い場所であるこの空間に、当麻を中心に楕円形に6人、きっちり立っていた。

「……インデックス、デッドマスター、佐々木、遠山金一、八神はやて、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンか。……何人が予想外の面子はいるようだが、紛れも無く失われた7人の該当者セブンス・ロストのようだな。さしずめ誰かに操られてるってわけか。……ん？
……一人足りないようだけど……ビリビリはどうした？」

その言葉と共にセブンス・ロストが動いた。

デッドマスターは無数の鎖を鞭のようにしなやかに当麻に向ける。

当麻はそれをいくつか潜り抜け、鎖の中央付近を右指でなぞり、消滅させるた。

そこへ隙なく3発の銃弾が撃ち込まれる。

反転した当麻によって3発の銃弾が粉々に砕け散ったかと思うと、圧倒的質量のスフィア状魔力球体が襲ってくる。

それぞれが的確に当麻を狙うも、彼自身ギリギリの所で回避し、イマジンブレイカーを駆使しつつ、次々と防いでいく。

それが例えギリ貧になっていくとしても、彼から失われた7人への打撃的ダメージは同じ”Buster”側の人間として、あるいはセブンス・ロスト彼の性格上、不可能であった。

しかし、その当麻にもやがて疲れはやってくる。

イリヤの呼び出した狂戦士バサカーの重い一撃を薙いだ後、膝がガクツと落ちてきた。

当然、当麻はその場に膝をつくより他は無い。

「全く……こんなもんか……俺は……？」

うつすらと笑みをこぼしつつ足を動かそうとするものので、すでに疲労困憊の意を示しており、まともに歩くこともままならない。

「……やっべえ。」

またしても彼は、6人に包囲され、退路も絶たれていた。

「殲滅します。」

インデックスの掛け声と共に、各人が当麻に飛び掛かる。

大きな爆炎が起こった。

40話 〈動き始める”Buster”〉

「んっ……ここは……？」

「目が覚めたか。」

”Buster”本部の医療室。その中でもここは一般病院で言う集中治療室のような個室である。

顔こそ微笑んではいたものの、ツナの顔は明らかに悲しみを隠しきれずにいた。

「よく帰ってきたな………御坂美琴。」

「……え？わたしは……確か……”Collapse”のギルガメッシュと戦闘して……」

ツナは思わず顔を歪める。

その戦闘があつたことは紛れもない事実だ。……しかし、時代が違う。今の世界と御坂の言っている世界は別次元宇宙であり、その時代の変化に御坂は取り残された。無論、失われた7人^{セレンス・ロスト}幽閉後の話となる。

ツナは重い口を開き、御坂に一切の事情を話し始めた。

多次元宇宙論のこと、現在起きている”Buster””Collapse”間の戦争のこと、今の”Collapse”の狙いのこと……そしてこれからのこと。

御坂は話を聞いている間、所々驚愕の表情を浮かべたり口をキツと歪めたりしていたが、徐々に生気が戻っていき、顔色はすでに完全に回復していた。

「そう……。私が”Collapse”で武力的脳内介入されたとはね……。どうりで記憶が繋がらないわけ……。か。」

「失われた7人はお前も含めて全員必要な戦力だ。ただでさえ俺達”Buster”は圧倒的な数的不利というディスプレイアドバンテージを抱えている。……絶対に取り戻す。」

「でも、私は”Collapse”に居た時の記憶なんてこれっぽちもないわよ？他のメンバーを探せなんて……」

御坂はそこまで言っただけで口を噤んだ。

元々彼女は”Buster”との契約の際に『私の力で何かを救いたい』という願いを込めている。

安易にできない……。とは言えなかった。そこへ、一報が入ってきた。

「沢田さん。」

「遊佐か。どうした？」

「モニタリングの解析結果が出ました。ジャンヌさんが沢田さんとの面会を求めています。」

「わかった。繋いでくれ。」

迅速なツナの動きに、御坂は肩をすくめる。

相変わらずツナはツナらしい、”Buster”のリーダーにこれ以上の存在はいないだろう。

するとモニタの回線が移り変わり、ジャンヌ・ダルクの藍色の瞳が

映し出された。

「ジャンヌ、わかったか？」

「うむ。この機器は全て精鋭だな、少し弄っただけでここまで情報が得られるとはさすがに思っていなかった。本題だが、どうやら失われた7人の所在はポイント223-51、この廃墟のようだ。^{セブンス・ロスト}先程セブンス・ロストの攻撃波形と全く同じ電磁波をキャッチした。もう間違いないだろう、奴らはすでに戦闘態勢にある。」

「・・・戦闘か・・・。付近に戦闘中の”Buster”の爪痕は残されていないか？」

「確かに記録されている。その死体の山をしてみる。おそらくこの並びは・・・。」

「・・・レイジオン。上条一派か。」

その言葉に御坂は動揺する。レイジオンは彼女が”Collapse”に囚われるまで所属していた”Buster”のチームの一つで、”Buster”内でも有数の突破力をもつ主力団体の一つと言っても過言ではない。ただし、主力であるからこそ、並の戦闘では動くことはまずない。

「ん・・・？レイジオンだけじゃないな。他の”Buster”の反応もあるようだ。」

「ああ。現在もレイジオンは主力であることに代わりは無いが、戦力がセブンス・ロストの件もあって分散されてしまっている。そのためレイジオン独自に”Buster”メンバーを規定数代役とし

て送り込むことができるように設定してある。その点については問題ない。」

「……では、これはなんだ？」

「む……？」

その反応色からして、”Buster”ではない。……だが、”Collapse”の色でもなく、鮮やかな朱色を示している。

「……！まさか……”Collapse”のキヨンか……！？」

ツナも一気に青ざめる。

いくら主力団体とはいえ、あらゆる面であつちの”キヨン”相手では分が悪い。全てを無に帰す能力は衰えを知らず日に日に強大になつており、その力は今では当麻をも凌ぐはずだ。

「急遽援軍を送る！準備の整っているメンバーは何人だ！？」

「安心しろ、沢田。すでに応急処置で援軍を飛ばしてある。問題はキヨンの処理だ。どうする？」

「……キヨンと今戦える者は”Buster”にはいない。”Collapse”領内に還せる術師を用意してくれ。」

「了解した。」

モニタ画面が自動で閉じ、ツナは再び目を御坂に移した。

御坂は心配そうな目つきでモニタを見ていたが、我に振り返り向き直つ

た。

「御坂、頼みがある。」

「な、何？」

「お前の信頼している”アイツ”の力を貸してほしい。」

凄まじい爆炎と共に当麻は一瞬で吹き飛んだ。

その爆炎の主はセブンス・ロストの一人である八神はやて。有無も言わず再びチャージに取り掛かっている。

「いててて……！！」

間髪入れずに同じくセブンス・ロストのイリヤの所有する狂戦士^{バーサーカー}が当麻を薙ぎ払いにかかる。

当麻は横に薙ぎ払う棍棒をとっさに屈んで躲し、右手の力で逆に押し返した。

「くそつ……これじゃキリがねえ……」

嘆く当麻にまたしてもセブンス・ロストが攻めに来る。

デッドマスターが自分の持つ身長ほどもある大鎌を振り回し、当麻の喉に狙いを定めて刈ってきていた。

突然の刃物に当麻は驚愕し、尻もちをつく。

先程からのとてつもない疲労感もあり、この数相手ではまともに動くこともできなかった。

そして無防備になった当麻目掛け、バーサーカーの重い一撃が迫りくる。

「……やっべ……!」

当麻は手を顔の前で組み、顔面へのダメージを軽減しようとした……。

……痛みはない。

それどころか、敵の声すら聞こえない。

不思議に思う当麻は怪訝そうに目を開けると……そこは格納砦の外だった。

「これは……!?!?」

驚愕に満ちた表情の当麻が振り返ると、更なる驚愕が待っていた。

「お前……!?!?何でその能力が俺に……!?!?」

見慣れた緑色の腕章に赤毛のツインテール。

つられて追ってきたセブンス・ロスト面子も皆相応に驚きに口を開けている。

その少女は当麻を一瞬見て、セブンス・ロストに向き直り、声を高らかに張り上げた。

「……ジャッジメントですのー！」

41話 くレイジオン集結

突然の来訪者に当麻は口をあぐり開けている。

何しろここは”Collapse”陣。それに・・・普通なら当麻への能力の恩恵は幻想殺しがある限り、絶対に受けることはできない。

だが現に失われた7人の狂戦士による攻撃は当麻には当たっておらず、今までいた場所からかけ離れていることから黒子の瞬間移動は確実に当麻を捕らえていた。

「・・・何でお前がここにいるんだ？それに何でお前の能力が俺に・・・？」

「あら・・・何も聞いていないんですね。」

「・・・？」

怪訝そうな表情を浮かべる当麻に、黒子はしれっとした顔で答える。だが、その顔を見ても当麻の疑念は尽きるわけでは無く、彼は黙り込むしか選択肢は無かった。

「ここはあくまで”Collapse”領地内。しかも捕虜である失われた7人のいる格納砦ですよ？敵勢力が私達”Buster”の進撃に備えていないとでもお思いですか？・・・あなた方はここに入った時からあらゆる能力に対する干渉を受け、普段の自分の力の半分も出せていないはずですよ。いくら”Buster”主力部隊であるレイジオンのメンバーで入っても、きちんと対策を練らなければこのような惨劇になる・・・ま、今回ばかりはそのおかげで貴方をお助けうる事ができたのですけれども。」

呆れた口調で話す黒子に、当麻は愕然とするよりなかった。いや、今まで油断しすぎていたのかもしれない。

一方通行の戦いを見ていて、多少の安心感があったのは事実だろう。そう考えると無自覚だったとはいえ、自分に腹が立つてくる。もう少し用意を周到に・・・せめて”Buster”本部に予め連絡を取っていれば、こんなことにはならなかったのかもしれない。

「とりあえず沢田綱吉と御姉様のご協力のおかげで何とかこれだけ集められましたわ。」

黒子の指した指先へと視線を移動させると・・・

「やれやれ、何てザマだ。僕としては君が絶望するシーンをもう少し眺めても良かったんだけどね？久しぶりだ。」

「我々もようやく出ることができそうですね、感謝します！」

「何やってんのよ、そんなんじゃ彼奴を助けることなんざできないよなあ。」

「もうちつとシャキツとしゃがれです。レイジオンはこんなものじゃないはずですよ！」

「上やん、俺達は”Buster”なんだぜ？少しは仲間を信頼するにゃー。」

上から順に、赤髪の魔術師『ステイル』マグヌス、聖剣七天七刀を持つ神の娘『神裂火織』、神裂の信頼する部下である『建宮斎字』、元ローマ清教の三つ編み少女『アニエーゼ』サンクティス、そ

して当麻の親友である陰陽術師『土御門元春』。
全て”Buster”主力部隊の”レイジオン”メンバーであり、
同じパラレルワールドからやってきた仲間でもある。

「まだバラバラになったレイジオンメンバーを全員見つけたわけではないですけど・・・今はこれで十分ではなくて？」

「ははは・・・お前らよくもやってくれたよ・・・これで負ける要素は無くなったな。」

よろよろと立ちあがる当麻だったが、何故か力が入らない。
それを見た黒子はニヤリと作った笑顔を真剣な顔に戻し、何かを思い出したかのようにポケットに手を突っ込んだ。

「ああ、そうでしたわ。私達がこの場所の影響を受けないのは、これがあるからです。」

ポケットから出てきたのは緋色の液体の入った小型注射器。
その鮮やかな色に、当麻は顔を引き攣らせた。

「・・・見るからに怪しそうなんだが・・・」

「長門有希さんのオリジナルのナノマシンです。本部オペレーションルームにいる初春や遊佐さんがこの場所全体にかかっている不可視の特殊コーティングの結界のようなものを見つけまして、それに対する遮断フィルターの入った防御壁のようなものをつけてくれたんですよ。それを使えば今の状況下でもこの空間の操作はシャットアウトされますわ。」

当麻は恐る恐るながらも注射器を受けとり、腕に注射する。すると、

一瞬にして視界が明るくなり、身体も軽くなっていた。

「うし、これで大丈夫そうだな。黒子、作戦はあるか？」

「幸いこちらも数は揃ってますの。貴方の役目はセブンス・ロスト本体への脳干渉ですわ。」

「脳干渉？」

「ええ。今現在あの子たちはインデックスを通じて”Collapse”からの武力的脳内介入を受けていて、『繋がり』という系のようなもので脳を直接弄られていますの。なのでそれを消せば・・・」

「あいつらは元に戻る、か。」

当麻は久々に笑みをこぼした。

下手に難しい作戦よりは、役目がはっきりしている方がわかりやすいし、何よりやりやすい。

刹那、セブンス・ロストが動いた。

デッドマスターが猛スピードで当麻に接近し、再び大鎌を振り回してくる。

しかし、当麻の前でその大鎌は長剣フランベルジェにあっさり止められ、逆に吹き飛ばされた。

「おっと、そんな素人の鎌じゃあ、俺には傷はつけられんよなあ。

今だ、行け！」

その掛け声と共に当麻が飛び出し、デッドマスターの頭に触れる。するといつものパチィィィンという効果音が鳴り、効果があったことが実証された。すると、黒子と八神はやてが同時に動いた。八神はやては即座に魔法陣をくみ上げ、遠距離からいくつもの魔法弾を撃ちあげてくる。それに黒子は何とかレポートによって難を逃れ、すぐさまデッドマスターの前に立った。

「私は力の繋がりが切れたセブンス・ロストの搬送役をしますの！
アニエーゼ！」

「了解ですぜ！コテンパンにしてやるです！」

アニエーゼが持っている杖『蓮の杖』ロトタスワンドを振り回し、地面に高々と打ち鳴らす。すると不可視の座標攻撃がはやての右上の翼を捕らえ、ダメージを与える。

「くっ……！？」

呻き声をあげたはやては何か態勢を整え、一気にエネルギーチャージを加速、3つの魔法陣からその絶大な魔力を放出した。

ラグナロク。

強力な直射型砲撃魔法であり、一時的に力を消耗し、回復まで一定の時間が必要となるほどの大技である。
……彼がいなければ。

「うおおおおお！！！」

その砲撃を、当麻は正面から受けて立つ。
前に突き出された右手が難なくラグナロクを受け止めて・・・

パチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

瞬時にラグナロクをかき消した。

そのあっけなさにさすがのはやても驚愕の表情を浮かべる。
魔力が尽き、地上へと落とされたはやてに、当麻は優しく手を頭に
差し出し、繋がりを解いた。

「上条当麻！今度はこっちだ！」

「やれやれだな、忙しいぜ。」

叫んだステイルと神裂の目の前にいるのはバーサーカーとイリヤ。
金切り声のような雄叫びを上げ、迫ってくる。

「魔女狩りの王！」
イノケンティウス

魔物には魔物を、と言った所だろうか。

炎の巨人がバーサーカーの棍棒を軽々と受け止め、腕を押さえる。
しかし、バーサーカーの怪力は留まることを知らず、イノケンティ
ウスの押さえを突破し、二人へ再び突進してくる。

「はあああああー！」

そのバーサーカーを今度は神裂が斬る。

それでも12回の死を迎えなければ、バーサーカーを完全に断ち切
ることはできない。

「ステイル！イノケンティウスを俺の動きに合わせて動かしてくれ！」

その声と共に当麻が走る。

そこへバーサーカーの棍棒が突き出される・・・も、イノケンティウスが瞬時に対応し、バーサーカーの死角へ当麻を逃がしていた。

「ナイスだ、ステイル！」

「・・・ふん、今回限りだ、君の言うとおりに動かすのは。」

そして当麻はイリヤの頭にも触れる。

「さあて、こつちももう平気だにやー。佐々木も遠山金一も戦闘要員じゃないから大人しく捕まってくれたぜよ。」

土御門が二人を差し出し、あと残るは一人。

「・・・インデックス・・・。」

振り向くと、インデックスは未だ武力的脳内介入を受けているため、暴走している。

その姿を見て当麻はいてもたってもいられなくなり、叫んだ。

「今行くぞ！！」

当麻は走り・・・しかし歩みを止める。

「……随分と暴れてくれたな。」

「……お前つ……”Collapse”のキヨン……!?!?」

満月が不気味な笑みをさらに怪しく映し出していた。

42話 く訪問者の応酬く

夜の光が辺りを包み込み、”Collapse”領土内を薄く照らす。

その中で、当麻は息を呑み、この戦況を改めて見た。

・・・敵は二人。そのうち、一人は当麻の力で元の場所に還さねばならない。

それも、自分にとって大切な者を。

「キヨン・・・お前・・・まだ邪魔すんのかよ。」

「ふん、『これ』は俺の計画にも使わせてもらったからな・・・それに、まだ使い道はある。」

”Collapse”のキヨンは、”Buster”のキヨンとは異なる笑みを浮かべる。それこそ、残酷な笑みを。

彼の目的こそ未だ”Buster”は掴めていないが、”Collapse”のキヨンは次々と”Buster”の仲間を苦しめ、幾人もの仮初の死を与え続けてきた。

先の言い分もあり、当麻はカツとなり口走る。

「てめえ・・・人を物扱いしてんじゃねえ！インデックスは俺達の大切な仲間だぞ！！」

「やれやれ、説教なんざ聞き飽きたぜ？それに、『これ』は俺の目的を達成するために必要なだけだ。すぐ返してやるさ・・・そつちの俺とハルヒと引き換えならな。」

「・・・この野郎・・・！」

当麻が駆け出す。

その怒りの籠った覇気にステイルや建宮は一瞬狼狽したものの、後に続こうと駆け上がる・・・も。

「来るな！！お前らの魔術は全部キヨンの力でかき消されちまう！逆に足手まといだ！！」

その声に嫌が応にも足が止まった。

実際問題、一方通行はその能力を無に帰され、脳内の異常動作によって成す術なく敗北している。

攻撃が魔術に頼り切りである彼らに、”Collapse”のキヨンを止める力は残念ながら持ち合わせていない。

当麻はステイルたちが足を止めたのを確認した後、一気にスピードを上げてキヨンとの距離を縮め、右拳を振り上げる。

キヨンはそれを正面から受けにかかる。

パチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

異能の力を打ち消す幻想殺し（イマジンプレイカー）を発動させた。ただ、”Collapse”のキヨンには邪悪な笑みが絶えず、またもや何かを口走る。

その瞬間、当麻の腹部に何かに圧迫されたかのような急激な痛みが走り、思わず当麻は痰を吐く。

そのままキヨンは前屈みになった当麻の顔面を蹴り上げ、大きく吹き飛ばした。

「ぐあっつっ！！！！」

「なんだ、力を戻してもたつたそれだけなのか？ 全く、もう少しまともな力だと思ったんだけどな・・・とんだ期待外れだ。」

”Collapse”のキヨンは溜息をつく。

しかしその溜息は何故か喜んでいられるようにも感じ取られた。

「まだ・・・まだだっ・・・!!」

当麻は決死に起き上がろうとするも、腹部の衝撃が色濃く残っており、まともに力を入れることもままならない。

仲間も仲間で助けようと思う反面、その異常なキヨンの力に怯え、震える足を動かせないでいる。

「ま、お前が死ぬことによって大きな脅威が一つ減ることに繋がつて、より計画も成就しやすくなるってもんだ・・・悪く思うなよ?」

キヨンが何かを喋ろうとする・・・その時だった。

「上条当麻・・・起き上がりなさい。」

どこからともなく耳に直接何かが響いた。

「誰・・・だ・・・?」

「沢田綱吉の命により、ここは僕に預らせて頂きますよ、少々久しぶりですがね。」

”そこ”にいきなり人が現れた。

まるで今まで霧のように包まれていた枷が外れ、いきなり辺りが鮮明になったかのように。

当麻の前に見覚えのある男が立つ。

背が高く、特徴的な一点に集中したとんがり頭。

三又の槍が悪魔を連想させ、一瞬見た者には敵か味方が想像もつかない。

「お、お前……」

「クフフフ……」

その声で当麻は完全に姿を一致させる。

”Buster”側でこの特徴的な笑い声ができるのは、当麻が知っている中では一人しかいない。

「舞い戻りましたよ……輪廻の果てより。」

六道骸。

沢田綱吉の本職である『ボンゴレファミリー』の霧の守護者であり、その圧倒的な生命力は当麻もよく知っている。

「ほほう、お前が出るとはな。だがお前らが一番良く知ってるんじゃないか？……お前らに勝機が億が一にも無いってことくらいはな。」

「クフフ……貴方は沢田綱吉を侮らない方が良い。僕は彼らと馴

れ合つつもりは毛頭ないですが、今回は彼も考えましたね・・・彼を連れて行くよう命じたのですから。」

骸が笑みをこぼし、追わせた指の向こうには・・・

「・・・よう、元気だったか？」

「・・・!?!」

「その様子じゃ、やっぱ俺がやるってのは効果的みたいなんだな。・・・やれやれ。」

キヨンが居た。

「・・・何故”Collapse”に追われる立場であるお前がここにいる？わざわざ獲物が向かってくるなんざ正気の沙汰じゃねえぞ?」

さしもの”Collapse”のキヨンも驚愕していた。

今回ばかりは意図が見えない。

確かに自分と同じ『無に帰す能力』を所持しているとはいえ、まだまだ未完成の器であるはずであり、ガチンコで戦っても”Bust

er”のキヨンに勝てる見込みはないはずであった。

「今回俺には二つ役目があつてだな・・・」

「ふん、うるせえ。おいインデックス、あの凡人を黙らせる。」

反応は・・・無い。

「・・・インデックス、お前何やって・・・!!」

後ろを振り返ると、インデックスはすでに意識を失っており、その周りには黒子を始めステイルや神裂が包囲している。

「・・・」

「やれやれ、人の話はきちんと聞けよ。一つ目の俺の役目は・・・大元のインデックスを操作している”何か”との繋がりを無にするつてもんなんだよ。」

”Buster”のキヨンは肩をすくめた。

逆に”Collapse”のキヨンは啞然としており、かつ沸々と怒りが込み上げてきているのがわかる。

「なるほどな。少しお前を見縊つてたかもしれん。未完の利器とはいえ、成長が速い・・・さすがその頃の俺と言ったところか・・・まあいい、大きな役目は終えたしな。もう一つの役目も大体わかつたぜ。お前・・・俺を何とかできると思ってるな？」

「話がはええじゃねえか。まあ、まだまだ上手く使いこなせないんだがな、そんなチート能力は同じ能力を持つてる奴しか倒せるわけ

ねえだろ？その原理だよ。」

その言葉を放った瞬間、”Collapse”のキヨンは高らかに笑い声をあげた。

「愉快だな、俺よ。”Buster”の中でも少しは頭が使えるのかと思つたが・・・とんだ誤算だ。・・・覚悟はできてるんだろうな、お前・・・ぶっ殺されるぞ？」

「全く・・・物騒なことは嫌いなんだがな・・・。」

お互いのキヨンが同じ姿勢をし、同じように構え・・・同じように衝突した。

43話 脱出と残滓

「・・・僕が”Collapse”の親玉を”Collapse”領内に還す役、ですか。・・・クフフ、沢田綱吉。君は人を信頼しすぎている。僕はマフィア風情と組むのは有り得ないと以前・・・」

「今は”Buster””Collapse”間の話をしている。」

ツナの言葉に話を遮られた骸は肩を竦めた。

骸自身のポリシーが変わらずとも、現状況下ではそんなに暢気なことを言っていることはできない。

今は一刻も早く失われた7人を救出し、なおかつ上条一派である『セブンス・ロストレイジオン』に加勢を送らねばならない。

何せ相手は”Collapse”の総大将であるキヨン。何もかも無に帰すあの力を持つ限り、”Buster”の精鋭を何人連れて来ても、勝利という選択肢は残念ながら無い。

そこで、術師によつて”Collapse”のキヨンの動きを止め、セブンス・ロストを回収しつつできるだけ多くの”Buster”メンバーを救出せねばならなかった。

「ほう・・・。確かにボンゴレと”Buster”は全く違う。ただし、あくまでも僕は自分のために動くということを忘れて貰っては困る。それに久々の戦闘で”Collapse”の親玉とのビッグマッチだ、相応しい場所を予め用意する必要がありますね。」

一瞬言葉に詰まったツナに予期していなかった人物から声がかかった。

「・・・俺が行く。」

後ろからその声質を聞いただけでツナは目を驚愕の色で満たす。普段、彼はそんなことは言わない。何故なら・・・彼は被害者なのだから。

「・・・貴方は確か・・・」

「・・・キヨン!?!」

キヨンは真つ直ぐツナと骸を見る。

その表情は硬く、喉から振り絞って何とか声を出した感があからさまにわかる。

逆に、それだけにツナは不安色を浮かべた。果たして”Buster”のキヨンはいかなる考えの元で自ら出ると言ったのだろうか。疑問がツナの周りを巡った。

「お前らが使ってる超能力みたいなやつ、全部消されちまうんじゃないのか？もし俺と同じなら、だけどな。そんなチート能力を持ってる奴に普通の戦い方しちゃうだめだと思っぜ？ドツペルなら何も変わんねえだろ？」

・・・事実上、その通りである。

ツナの炎を含め、何かの護りが入った武器すらも”Collapse”のキヨンによって無に帰す。少しでもそういった力を持っていれば反応するような厄介な力なため、お互い無に帰す力の使えるならば、それ以上の戦力はない。

しかしツナは迷う。”Collapse”の狙いは間違はなくハルヒとキヨン、安易に行つて返り討ちにされれば完全に不利な状況に

立たされるのは目に見えている。

「・・・わかった。ただし一つだけ条件がある。それは」

「・・・チツ、お前が来るとは予想外だったな。いなけりやもう少し簡単に事が進んでいたのにな、やれやれ。」

「そのやれやれ、そっくりそのまま使わせてもらいたいぐらいだね、全く。いつまで皆を傷つけりや気が済むんだよ。」

”Collapse”のキヨンの拳を”Buster”のキヨンはスレスレで受け流し、自分の拳を”Collapse”のキヨンの顔面に思い切りぶつける。

その拳をまともに受け、”Collapse”のキヨンは態勢を崩した。

「・・・うぜえな。」

今度は”Collapse”のキヨンが態勢を崩したまま蹴りを”Buster”のキヨンの鳩尾に突き刺し、えぐられるような感覚を与えられる。

必死に痛みに耐えながら”Buster”のキヨンは両腕で”Collapse”のキヨンの後頭部を打ち付け、頭を地に叩きつけた。

「……くっ……！」

「いてえじゃねえか!!！」

刹那、”Buster”のキヨンの腹部を不可視の衝撃が襲った。この力はキヨンにある『全てを無に帰す力』に直結する。

「……!?!?ぐっ……俺が力使ってる暇がねえ……」

不完全であることによつて集中力の必要な”Buster”のキヨンは自分の力を使用できないまま吹っ飛ばされた。

”Buster”のキヨンはそのまま力無く頂垂れる。

そこに間なく”Collapse”のキヨンが突っ込んできて……

「クフフ……そこまでです。」

その言葉と共に、”Buster”のキヨンが消えた。

あまりの唐突さに”Collapse”のキヨンは驚き、骸を見る。

「クフフフ……貴方は何故僕がここに来たのかをもっと考えるべきだ。……まあ、おかげさまで無事に事が運んだようですがね。」

見渡すと、すでに黒子や倒れていた一方通行、当麻とインデックスを含めて全員消えており、この場には”Collapse”のキヨンと骸しかない。

「何の制限無く彼がこんな場所に投棄されるはずがないでしょう？
沢田綱吉からの条件は、僕の能力で予め敵陣に有幻覚を用いた場所フィールドを用意すること。そして彼の二つ目の役目は……速やかにこの場所から退避すること、だったんですよ。」

骸がニヤリと笑みをこぼした。
正直”Collapse”のキヨンの無に帰す力は未知数であり、
骸に与えられた作戦が通用する可能性もまた未知数であった。

「……あはははは！！」

いきなり狂ったように笑う”Collapse”のキヨンに対し、
骸は少し不信感を抱く。

「なるほどな、こりゃあつぱれだ！……で、俺を邪魔したお前も
ノコノコと逃げられる、そんなことは思っちゃいねえよな？」

「……クハハハハ！当然ですよ。僕がそんな臆病者に見えますか
？」

骸の右目が『一』を指す。

すると骸の足元から”Collapse”のキヨンの足元にかけて
凄まじい威力の火柱が起きる。

これが骸の幻覚を見せる能力である輪廻の一つ『地獄道』である。

「……そんなもんか？」

”Collapse”のキヨンはそれを何事も無かったかのように
無に帰し、拡散させ、破壊し、邪悪な笑みを絶やさずにいる。

骸は額から汗を流しつつもその目を『四』に移行した。

『修羅道』。

俗に言う格闘能力の向上である。

それを駆使し骸は一気に前進、自分の三又槍を持って”Colla
pse”のキヨンに突進した。

そしてその瞬間、”Buster”のモニタに写っていた二つの反
応のうち、一つが消えて無くなった。

44話 二つの決断

新しい”Buster”本部。

以前の襲撃時に大破した部分を軒並み捨て、かろうじて機能が使用できるレベルの階層同士を組み合わせて強化、改築を行った。

無論、”Collapse”の襲撃があつたために場所も炎の力を使った転送システムによつて別の場所に移動させている。相変わらず地下ではあるものの、セキュリティをさらに強力にし、かの有名な多次元宇宙に存在する『学園都市』に匹敵する程の防衛網を構築していた。

その下層部、地下37階には地上監視のためのオペレーションルームがあり、そこを司令部として置いている。そこには精密機械による情報収集を専門とする新戦力：武偵のジャンヌ・ダルク、”Buster”主力部隊：レイジオンメンバーの初春飾利、特殊偵察部隊に任じられた部隊：SSSのメンバーの遊佐等があり、今も敵陣の解析を行っている。

「相変わらず”Buster”が誇る司令部だ……この陣営はさすがですね、澤田綱吉。」

「セイバー……ついに完治したか！」

ツナは突然の来客に一瞬驚きの表情を浮かべたが、その姿を確認するや否や引き攣っていた顔を一気に緩める。

「全く、大分眠ってたみたいね。ま、事情はヴィルヘルミナから大体聞いたけど。”Buster”初期戦線メンバーがこのザマにな

るなんて、我ながら情けなかつたわ。」

「そんなに自分を責めるな、シヤナ。君らがいなければキヨンは確実に奴らに渡っていたんだ、それを考えれば良くやってくれたよ。」

シヤナは腕組みをしながらうーんと唸っていたが、どうやらこちらも外傷も内傷も完治しているようだった。

彼女達は”Collapse”の一人の男によって動けない状態にまで追い詰められていたものの、その圧倒的強さは健在であり、これから心強い武器となるだろう。

ただでさえ”Collapse”に数で圧倒されている”Buster”。今欲しいのはキヨンと涼宮ハルヒを守りきれぬ力であり、多に越したことは全くない。むしろセイバーやシヤナは敵陣の一個艦隊クラスの数の敵を一人で片付けることができる程の実力とポテンシャルを秘めている。それだけで一気に戦況は変わる。

「BRSももう治ってるわ。フェイトと上条当麻はもう少しだけ時間がかかるでしょうけど、それもそんなに時間は要らない。・・・私は今がチャンスだと思う。」

唐突に本題を持ってきたシヤナにツナは少し狼狽した。

ツナはその議題を彼女達の復帰後にそれぞれの意見として聞くことと、思っていた所であり、まさか彼女達の方からそれを出されるとは微塵も思っただけでなかった。

「しかしシヤナ。私はその意見に賛同しかねます。”Collapse”は数で圧倒するだけの戦いではない。セフィロスを始めとした個々の圧倒的戦力も一つの戦法、我々がこのまま全面戦争を仕掛けたとしても勝てる見込みは少ないでしょう。」

「ならばどうするセイバー。そこまで言うということとは、そっちなも考えがあるんだろう?」

ツナはセイバーを真っ直ぐ見る。無論、セイバーは相変わらず凜とした様子でツナの瞳を見つめていた。

「そうですね、ツナ。我々が”Collapse”の溢れる程の軍勢と対峙するために残された道は一つだけ。」

その言葉は時間の許されない”Buster”にとって本来できることではなかった。

「強化するのです。．．．しかも並外れた強化ではない。．．．あのプログラムを起動させるのです。」

やれやれ．．．ようやく戻ってこれたぜ。

さすがにもう一人の俺に会いに行く時は死ぬほど緊張したが．．．何とか救出はできたみたいだな。

．．．犠牲者は出たんだが．．．。

やっぱり俺にはこういう仕事は向いてないね。俺は今まで人並みの凡人生活を送ってきたんだ、こんなトンデモパワーを行使するのはできればご免だ。

まあ、そうもいかないんだが。

俺はただツナ達の仲間を辛うじて助けただけであって、根本的な解決には何一つなっていないんだ。

「……どうせ”Collapse”側の俺のあのチート能力、俺でしか止められない」とかいうオチが来るんだろ？ いずれにせよまた使わなきゃならん時が来るってわけだな。

そんなことを珍しく考えている俺。……それだからと言っても良いだろう、慣れないことはやるもんじゃないね、二重に俺の頭を悩ませる問題が起きちゃった。

「……キヨン……。」

目の前にいたハルヒは俺を見るや否や目を細めた。

「……コイツらしくもない、悪いことの前触れだろうか。」

「ど、どうしたんだよハルヒ、お前らしくもない顔しやがって。」

「……。」

ハルヒは黙って俯く。

何か言いたげな様子ではあったが、中々切り出しにくそうな表情である。……一体どうしたと言っのだろうか。

「何だ？何か言いたいことがあるのか？なら言って……。」

「……のよ……。」

「……はい？」

「・・・あなた・・・一体何をやってるのよ・・・？」

いきなり答えあぐねる質問が飛び込んできやがった。

何をしてるって・・・今帰ってきたところでブラブラしてただけなんだが。

「・・・あなたはどこで何をしてたの・・・？何であたし達はこんな地下にいるの？・・・何で・・・何でこの内部にいる人間の中であただけが何も知らないの・・・？・・・あなたは何か知ってるんでしょ！？答えなさいよ！！！」

・・・思わず息を呑んじまったね。

俺の真正面に、それも思い切り近づいてきて胸を張るハルヒの目は・・・泣いていた。

・・・何なんだ、この気持ちは・・・そんな顔すんなよハルヒ・・・お前らしくないぜ・・・？

「・・・何でよ・・・あたしの質問はここにいる誰もが知ってるはずなのに・・・それなのに・・・何故いつもはぐらかされるのよ・・・」

・・・この辺が潮時かね？

顔をくしゃくしゃにして抗議するハルヒの姿に・・・俺はもう、いてもたってもいられなくなっていた。

「・・・わかった、話してやる・・・今現在の状況ってやつをな。」

もっとうなるうと知らん。なるようになれだ。
それに、ハルヒにバレるのは時間の問題だったしな。

・・・ハルヒ。

・・・今度こそ理解してくれよな？

45話 く終わらない問題く

俺は現状語れる範囲全てを話した。

勿論、ハルヒが神様云々つてのは全く話しては無い。

ハルヒが誘拐されたこと、いきなり巻き込まれた”Buster”と”Collapse”間の戦争のこと。俺達が一体何をやっていて、”Collapse”が何を狙っているのか。これから俺達はどうしなきゃならんのか。

初めこそムスツとしながら聞いていたハルヒだったが、話が進むにつれてその表情は明らかに変化していったのが見て取れた。如何せん説明下手な俺だったからきちんと伝わるかどうか内心不安だったのだが・・・それはなさそうだな。

全て話し終わると、俺達の間を暫しの沈黙が訪れた。

実際俺も何と声をかければ良かったかなんてわからないし、こいつもこいつで色々と考える時間は必要だろう。

・・・何せ自分達が狙われてるんだもんな。

「・・・。。。。。。そつか。。。。。」

ハルヒはいつものこいつに似合わない、酷く悲壮に満ちた・・・あの意味大人びた表情をして正面に向き直る。

本当は一瞬だったのかもしれないが、その沈黙が俺には物凄く長く感じた。

「・・・ハルヒ。」

気づけば俺の方から声をかけていた。・・・後先考えずに行動が先に出るのはハルヒだけだったと思ったんだが、こりゃ俺も人の事言

えんな、やれやれ。

一方のハルヒもハルヒで正面を向いたまま、振り向こうとはしなかった。

「・・・何よ。」

「・・・本当に今まで隠し続けてすまなかった。・・・でも俺はハルヒ、お前には笑っていて欲しかったんだよ。ずっと・・・俺達のSOS団団長様としていつもの先頭立って切り込んで・・・。そんなお前でいて欲しかったんだ。・・・すまない。」

我ながら変な理屈ではあるし、何も考えずに言ったもんだから思い返してみればこっ恥ずかしい台詞である。

でもこれは俺の本心。

こいつにあんな血だらけの戦争に巻き込みたくなかった。おそらく俺ですら戦いつてもんを知らない部類に入るんだろう。古泉や長門、もしかしたら朝比奈さんの方がこんなエグい光景を目の当たりにしてきたいるかもしれない。

それでも・・・ハルヒ、お前はこんなこと知ってちゃいけなかったんだよ。

「・・・。」

再び沈黙。

ハルヒの顔を伺うと、別段怒っているようには見えなかった。端正な顔立ち、黙っていればこいつは本当に思わず見とれてしまうほどの綺麗な作りをしている。

「・・・キヨン。」

沈黙を守り続けていたハルヒの口がゆっくりと動き始める。
途端、俺の身体にも緊張が走った。

「・・・果たして俺はどう言われるのか。こんな状況は嫌だ、早く元の世界に帰りたい・・・だろうか。何で早く言わなかったのか・・・と怒られるのだろうか。」

結論から言おう。俺の予想は全てハズレだった。

ハルヒはいつになく優しい笑みをこぼし、俺の手に自分の手のひらをゆっくりと載せる。

「・・・ありがとう。」

その台詞に俺が驚愕した・・・瞬間だった。

辺りがいきなり暗く、真っ赤になり、喧しいほどの警報が鳴り響いた。

「一体どうした!？」

ツナは情報司令室に駆け込み、遊佐に状況説明を求めた。

「沢田さん、事態急変です。第3医療用寝室及び特別処置室第1、6ポッドで療養中の失われた7人の容態セブンス・ロストが変わりました。現在7人全員が原因不明の苦痛を訴えています。」

「……原因不明の苦痛？」

回線を切り替えたツナは処置室で様子を見ていた各人に確認を取るべく急ぐ。

「こちら情報司令室だ！第3ポッド、どうした!？」

「こちら第3ポッド看病人遠坂凜！綱吉君、イリヤが……イリヤが何かおかしいの!!！」

回線から凜とは別の、苦しみの声が聞こえてくる。

「あアツ……あがつ……ガツ……ぎイツ……いやああああああ!!！」

その叫びからして痛みは尋常ではない。……だが、もうすぐ完全回復できると主治から言われたばかりであり、その理由は未だ定かではない。

すると、他のポッドから緊急通信が入る。
慌ててツナはその回線を受け取った。

「こちら情報司令部、沢田綱吉!どうした!？」

「こちら第6ポッド、機動六課の高町なのはです!ツナ君、はやてちゃんが無かに怯えているみたいなの!痛みも一緒に来てるみたいなんだけど……!!！」

ツナは回線に耳を澄まし、失われた7人の一人：セブンス・ロスト八神はやての声を聞いた。

「うっ……あがッ!?アアア……く……くる……!?アレ
がッ……こつちに来て……ま……うっ……がアッ……!
!」

「……一体何が起きてる……!?」

「7人全員がこのような反応を示しているみたいです……!御坂
さんもベッドの上で苦しもがいてるって……!」

と状況報告をしたのは同じ情報司令部の初春飾利。

”Buster”内部が動揺に包まれた。

医療グループの方で最新の設備によって対処を試みてはいるが、全
くと言っていいほど効果は出ていない。

「……沢田さん、どうされますか?」

「……今集めている医療グループは俺達”Buster”が誇る
最新鋭の人材と設備が揃っている。ましてや機動六課やレイジオン
からも人員を借用している……彼らにどうしようもない問題を
俺達が片付けられるか……」

「……しつくりきませんか?」

冷静に言い放つ遊佐に対し、ツナは明らかな焦りを見せている。

原因不明の苦しみ、しかも対象が全てセブンス・ロストメンバー……
……何かが起きる、そう思った。

それは現実となる。

刹那、激しい爆音が地上から発されたかと思うと……

「沢田綱吉！地上ポイント：4・6にとつてもない反応が出たぞ！この反応の種類は・・・魔力エネルギーか・・・！？」

ジャンヌがデータ解析をしつつ怒鳴った。

その声にツナは我に返る。・・・まだ失われた7人セブンス・ロスト関連は終わりを告げてはいなかった。

「反応、その勢力を維持しつつ増殖していきます！2・・・3・・・計7つ！！」

「・・・やはりか。おそらく何らかの形でセブンス・ロストの関係ある魔力反応があったというわけか・・・”Collapse”・・・何を考えている・・・？」

「反応、収まります！」

恐ろしく大規模な魔力反応はその規模のまま7つに分裂した後、一時収束し、形として安定する。ツナはすぐさま初春達に指示を出す。

「ポイントの映像を早く映し出せ！場合によっては戦力を裂く必要がある！！」

「了解しました！」

情報司令部は落ち着きを取り戻し、特定に入った。

「地上映像、出ます！」

その映像を見て、司令部にいた全員が驚愕の表情を浮かべる。いきなり映し出されたのは・・・顔。白い角に異形の生物・・・まさに神話に出てくるような竜のそれである。

「・・・これは・・・!?!?」

啞然と立ち尽くすツナ。司令部も一切の動きが止まる。

「・・・武装生物ウエホン・・・!?!?」

その生物は大きく咆哮する。

46話 武装生物

「第一次非常事態宣言を発令、”Buster”内現時点での戦闘可能なメンバーを全て司令部に召集してくれ！」

「・・・了解しました。」

ツナの指示に遊佐は回線をメインに切り替え、”Buster”全階に召集を促している。

その無線にいち早くセイバー、シャナ、BRSが応じ、真っ先に駆けつける。開口一番はやはりセイバーであった。

「何があつた、綱吉。」

「ああ、どうやら失われた7人の特殊な魔力セブンス・ロストのようなものを利用してセブンス・ロスト。本部地上付近に7体の魔法武装生物「ウエポン」が出現した。規模は7体とも全長60メートルほど、うち4体が飛翔可能と見ている。」

「ふむ・・・ウエポンか・・・。奴らは一体一体が著しく凝縮された力の塊のようなもの。その膨大なエネルギーをセブンス・ロストで補っている・・・とでも・・・？」

セイバーは怪訝そうにツナに問いかける。

確かに失われた7人に刻まれている特殊なエネルギー体は一般人の数億倍とも言われ、故に”Collapse”からも狙いの対象とされ、実際問題一度は強奪されている。

しかし”Collapse”側との繋がりが切れた7人である以上、直接ウエポンの動力源になっているとは考え難い。ましてや高密度

のエネルギー結晶を人間を媒介にして抽出するなどという实例は全くもって無い。

「俺もその可能性に関しては否定的だ。・・・だが7人が苦しみ始め、地上にウエポンが現れてから、セブンス・ロスト全員の特殊エネルギーコアが急速に収縮している。・・・間違いなく彼女達は何かの影響を受けているんだ。」

そう話しているうちに召集のかかったほとんどの”Buster”メンバーが集まっていた。レイジオンを中心にSSS、機動六課、グレイル、バスカービル等主軸を軒並み呼ぶ事態となっている。

「先の説明で遊佐から大まかな事情は伝わっていると思う。地上にウエポンが7体、”Collapse”戦力の一端を担っている。あれほどの規模の化け物だ、単独で行動しているうちに手を打たねば最終局面に持ち込んだ時に、ただでさえ数的不利のある俺達にとって最悪の状況になる。ただちに殲滅、そして敵の戦力を少しでも減らす必要があるんだ。皆、協力してほしい。」

ツナの言葉に皆静かに肯定の意を唱える。

その後、少し言葉に詰まるような仕草を見せつつ、ツナは声を絞り出した。

「だが一つ問題がある。実は主力部隊レイジオンを現場待機させなければならず、なおかつSSSとバスカービルには最重要特別司令が出されている。しかも機動六課は部隊長及びライトニング分隊が不在、グレイルはイリヤスフィールと遠坂凜が不在。応急処置としてここにいるセイバー、BRS、シャナがバックアップで応戦するが、おそらく苦しい戦いになると思う。・・・すまない、覚悟を決めて欲しい。」

ツナは思わず後ろを向く。ツナも”Buster”総リーダーとして、誰も失いたくはない。だが、ここまでの規模の戦闘を行えば、おそらく犠牲者が出る。

そんなツナに対し、一人が前に出た。

「私は今まで”Buster”として戦ってきました。創成時のメンバーでは無かったから当時の事情まではわからないけど・・・それでも結構長い間戦ってきたかな。私達が目指しているのは”Collapse”を完全に消滅させて、元居た各自の世界に戻ることにするために戦っているんだから・・・覚悟なんて、皆とつくの昔に決まっているんじゃないかな？」

前に出たのは・・・高町なのは。

8人から始まった”Buster”がまず最初に契約を交わした大規模団体：機動六課。そこで一際圧倒的な輝きを見せていたのが彼女であり、機動六課勢力の中でもその力はずば抜けている。

その言葉にツナは改めて振り向く。

「そうだったな・・・。」

そしてツナを含めた司令部全体の空気が一瞬で変わる。

「皆・・・頼むぞ。」

「了解！」

地響きのような物凄い揺れと共にまずセイバー、高町なのは、シヤナが勢いよく飛び散った。

その地上はまさに地獄絵図と化しており、すでに近くの山脈が二つほど崩壊し、湖も干上がっている。

セイバーは自身の最も近くにいた、蠍みそじのようなウエポンを上から一気に斬ろうと試みる。

「はぁあっ!!」

自慢のエクスカリバーがウエポンの巨大な尻尾に突き刺さる。

しかしウエポンに痛がる様子は無く、そのままセイバーを振り落すべく尻尾を上下に思い切り薙ぎつけてくる。

セイバーは急いでエクスカリバーを引っこ抜き大きく跳躍、ウエポンの細い肩部分の上に乗っかり、そのまま剣先を首に向け一気に突き刺す。

・・・も、ウエポンの首は異常なほど頑丈であり、鈍い金属音と共にエクスカリバーを押し戻される。

「ちっ・・・!」

一旦間合いを取ったセイバーは再び急接近、頭目掛けて剣を振り下ろす。

するとウエポンは瞬時に腕を動かしてエクスカリバーをガード、跳ね返してセイバーを地に叩きつけた。

「何て硬さ……」

「セイバー、大丈夫か？」

駆け寄ったのはグレイルのアーチャー。セイバーを起こし、自らも二刀を構える。

「アーチャー、ここは私が引き受ける。他を撃って欲しい。」

「……正気か？」

「私の動きからして援護を受けると逆に行動が制限され自由が利かなくなってしまう。」

その言葉がかけられるや否や、ウエポンは鉤爪のような太い爪を叩きつけるようにしてセイバーたちに浴びせる。

間一髪避けた二人は無言で別れ、単独となったセイバーは剣に力を込めた。

「果たして私の剣をどこまで受けきれるか……」

セイバーの周りの空気が変わり、不安定な風が彼女を包む。

刹那、ウエポンは双方の腕を左右から一度に振り回してくる。

それを躲すように大きく飛んだセイバーは光に包まれた。

「エクス……カリバー!!!!!!」

光の粒子が剣に注がれ膨張、数百倍もの長さになってウエポンを斬る。

シリシリとウエポンの固い鱗を引き裂いていき、遂にはウエポンの

肢体は真つ二つに割れた。

・・・しかし。

「・・・!？」

目を見張ったセイバーは一瞬の隙をつかれ吹き飛ばされる。

一旦二つに割れたかに思えたウエポンは何の前触れもなくコンマ秒の速さで修復、セイバーを鉤爪で打ち据えたのである。

「・・・まさか、こいつ・・・魔力補給型か!？」

セイバーの顔に一粒の大きい汗が流れた。

高町なのは自身の部隊でもあり教え子でもあるスバル、ティアナと共に大鷲のようなウエポンと相対していた。

しかし、そのウエポンの機動力からして二人はまともに攻撃を与えることができておらず、すでに幾度とない攻撃によって疲弊の色を濃くしていた。

「スバル、ティアナ!他の皆と協力して地上型の武装生物ウエポンと対峙して!」

「りよ、了解です!」

スバルとティアナを移動させ、既に合流していたシャナと共に大鷲のようなウエポンを見た。

「なのは、まだ行ける?」

「大丈夫、まだまだ全然被弾してないしね。シヤナちゃんこそ大丈夫？」

「あたしは普段最前線だから。この程度で足は止めないわ！」

そう交わした直後、ウエポンの長距離砲が二人を襲う。それぞれに散って避けた二人は、型の違う攻撃を繰り返していく。

シヤナは炎でできた翼を一気に加速させてウエポンに詰め寄り、同じく炎を纏わせた大太刀『贄殿の遮那』で薙ぎ払う。

またしても身体が堅く切れてはいないものの、その炎圧と武器の勢いがウエポンを大きく仰け反らせていた。

「・・・今！」

刹那、シヤナはいきなりウエポンから距離を取る。

直後に反対側からウエポンとの距離を取っていたのはが自分のデバイスを向けた。

「Divine Buster！」
ディバイン・バスター

なのはの凝縮された魔法弾がウエポンに直撃、大きな爆発を起こす。煙が収まると、ウエポンは粉々に砕け散っており原型を留めてはいなかった。

「よし！まずは一体・・・！」

一瞬喜びを見せるシヤナだったが、その顔は一気に驚愕のものへと変わる。

「なのは！後ろ！！」

「え……！！？」

なのはが振り向いた先には……先のウエポンとは比較にならない程巨大な、岩のような白いウエポン。

そのウエポンがなのは目掛けて鋭利な槍のようなものを眼のような部分から発射していた。

「なっ！？」

「Round Shield」
ラウンドシールド

なのはのデバイスであるレイジングハートの意思によって魔法陣による防御魔法が発動するも、1秒と持たない。

「！！！！」

「なのは！！！！」

叫ぶシャナを後目に、なのはは鳩尾から鮮血が零れ落ち、落下していく。

そしてウエポンはその落下していくのに対して、更なる追撃を加えようとしていた。

「……待て！！！！」

その声に、
” B u s t e r ”
全員が基地を見た。

47話 く決意とて

喧しいまでの警報。

そいつが俺達の耳をキンキンさせるようにして部屋中鳴り響く。・
・
・今度は一体何事だよ？

「キヨン!!これ見て!!」

ハルヒが指差したモニターに出た文字を見て、嫌な予感がした。正直な話、警報が鳴った時点で嫌な予感はあったけどな。もっと大きなもんだ。

「第一次・・・非常事態・・・宣言・・・？戦闘のできるメンバーは全て司令部に召集・・・だと？」

「どういうことかしら・・・ってきいあつ!？」

突如として地響きのような音と共に大きく揺れる部屋。・・・だが地震とは明らかに違う、まるで何か地上から踏んづけられているような揺れに俺も驚いて・・・いる暇は無かった。態勢を崩したハルヒが倒れそうに、しかも転がりそうになっちまったからな。

慌てて支える俺。・・・と言えば聞こえはいいもんだが、生憎だったな、諸君。

ハルヒを支えたは良いものの、今度は俺が滑って転んで見事なまでに尻をぶつけ、目から火花が散ったかのように思った瞬間には偶然にもそこにあつたハルヒの足に・・・踏んづけられたよ、ったく・・・。

「あ、あんた大丈夫!？」

「そこそこにはな・・・やれやれ。」

それにしてもこの揺れ、さっきの非常事態宣言。只事じゃ無さそうだな。

そう思つて俺は古泉と連絡を取るべく携帯を取つた。・・・何故だろね、ツナと連絡を取るつて選択肢がまるで無かつたわけだ。

「古泉、聞こえるか？」

「・・・！そちらは大丈夫ですか！？」

「ああ、ハルヒも俺も何とか無事だ。それより聞かせろ、何があつた。」

しばしの沈黙があつた・・・気がする。

「・・・地上にて武装生物、通称『ウエポン』という名の生物が現れまして、それが"Collapse"の差し金によるものだと判明したそうです。そのため、できる限りの戦力によつて鎮圧をしようとして試みています。」

・・・その時、俺の脳裏にマージョリーさんの光景がフラッシュバックした。

彼女はもう、死んだ。セフィロスに、一瞬で。"Collapse"相手にだ。

その姿が・・・この時の俺はどうにかしてたんだな、ハルヒと被つて見えちまつた。

・・・嫌だ。

・・・こんなのはもう。

・・・ハルヒを・・・皆を失いたくない。

「・・・ハルヒ、行くぞ。」

「へっ？どこに？」

「・・・何を考えですか・・・？・・・まさか・・・！」

俺も大分ハルヒに毒されちまつてるみたいだな。考えるよりも行動が先にでていた。

「貴方が何を思ったのかは定かではありません。ただ、今貴方の考えていることは普通ではありません！落ち着いて・・・ブーツ、プーッ」

悪いな・・・古泉。もう俺の中で何かが切れちまつた。・・・それに普通は好きじゃない。落ち着いて・・・はいないがな。

「ちよつと、キヨン！どこ行くつてのよ！」

「・・・俺に考えがある。」

・・・あまり良い案じゃないが。

とある場所に着いて、俺はハルヒの方を向く。

「・・・な、何よ。」

「ハルヒ・・・頼みがある。これから俺がやるうとしてることは古泉が言つてた通り普通じゃない。・・・もしかしたらお前に迷惑をかけることになるかもしれん。・・・だが、もうこうするしかない

んだ。頼む・・・俺がこの後何を言っても信じてくれるか？」

少しの間の後、ハルヒは凜とした態度でこう言い放った。

「ふふっ、バカキヨンね。・・・あたしは普通じゃないことが大好き。あんたもよく知ってるでしょ？任せなさい、団長自らあんたの一言一句に責任をとってあげるわ！」

その笑顔をしっかりと胸に収めて、俺はハッチを開ける。

・・・地上だ。そこに映し出されたのは・・・ウエポンの攻撃によって鮮血と共に落ちていく高町なのはさんだった。

さらにウエポンは追撃を試みようとしている。

・・・まずは止めなきゃな。

「・・・待て!!!」

その瞬間、”Buster”全員が画面やその光景に驚愕する。ウエポンを前にハッチを開け飛び出したのは・・・誰であろう、キヨンと涼宮ハルヒである。

「・・・キヨン・・・!?何をやってる！何故外に出た!？」

無線でツナはキヨンに警告を送る。最悪だ。キヨンには無に帰す力が宿っているとはいえ、未だ未完の大型。しかも彼らが”Collapse”の手に渡ってしてしまうことだけは避けねばならないのにこの状況。

しかし、キヨンには全く聞こえていない・・・わけではない。完全無視を決め込んでいるらしい。その無線を聞き取っているはずのハルヒさえ、何も言わない。

すると、キヨンがいきなり叫ぶ。

「おい!!どつかそこらにいるんだろ!!いい加減出て来い!!お前はそんなに臆病者だったのか?俺達を舐めてんじゃねーぞ!!!」

その叫びがこだまする・・・ような錯覚に陥ると、なのはに致命傷を負わせた巨大なウエポンの口のような部分から人が出てきて・・・キヨンの前に降り立った。

「ふん、覚悟を決めてきたか。そうだよな、これだけ他の奴が傷つけられて黙っているような奴じゃないよな?」

「やれやれ、さすがだな。同じだからこそ俺の性格までまるわかりってわけだな、俺よ。」

キヨン、そしてハルヒの前に降り立った人物。それこそ・・・もう一人のキヨン。”Collapse”のリーダーである。

「あんたがキヨンの話に出て来たもう一人のキヨンって奴?さすがね。こっちのキヨンとは大違いだわ。嫌なオーラしか感じない。」

「随分言ってくれるな、ハルヒ。この世界のお前の存在なんざほとんどありやしねえのにな。全k」

「おい!・・・これ以上ハルヒに暴言吐くんじゃねえ、屑野郎。お前の目的はわかってる。・・・俺とハルヒを捕らえにきた、違うか?」

その発言に全員の視線が凍りつく。・・・何をやるうとしているのか、そんなことは誰もが想像できた。・・・だが、有り得なさすぎ

た。

「ほう……わかってんじゃないか。ということは覚悟はついに決まったと見える。……良いんだな？」

”Collapse”のキヨンのセリフにツナは怒りの声を上げる。

「待て、キヨン！早まるな！！」

しかし……キヨンにはまるで聞こえていないかのようだった。

「……ああ。その代わり……ここにいる化け物は全部消せ。」

「良いだろう。」

キヨンの合図に合わせて、ウエポンは全て消失……そしてキヨンたち3人も姿をくらました。

ツナは怒鳴る。

「……キヨンと涼宮ハルヒ、おそらく首都圏内のどこかにはいる
！！早く探し出せ！！！！！！」

48話　風向きの変化

3日が過ぎた。

彼らはひたすら待っていた。

”Buster”本部では、最後の戦闘に気合を入れる者、現状に意気消沈する者、神に祈りを捧げる者など他者多様であった。

「10代目！」

”Buster”本部地下36階、会議室に獄寺が走り込んできた。

「特殊偵察部隊が敵地から戻ってきました！」

「本当か!？」

ツナは階段を駆け上がり、特殊偵察部隊を迎え入れた。

「大丈夫か、ゆり？」

「ええ。特殊偵察部隊SSS、全員無事よ。」

「・・・そうか。」

沢田綱吉は肩の荷が下りたように安堵の溜息をつく。常時ハイパーとはいえ、仲間思いの彼がSSSを心配しないはずがなかった。

「それで、状況はどういったものでありましたか？」

任務優先をモットーとするヴィルヘルミナが報告を催促した。

「“Collapse”の根城を発見、そのある部屋にて拘束されているキヨン君とハルヒちゃんを見つけたわ。」

「でかしたぞ！その場所は？」

思わず声が大になったセイバーを始め麻倉葉、B R S、シャナたち幹部陣が集まってきていた。

「その場所は・・・」

「何！？」

その回答を聞き、誰もが驚愕した。

何時ぞやのマフィア戦のように、同じ地下にあつたり上空にあつたりするであろうという皆の予想を外れ、とんでもない場所を立華奏は示したからである。

「それは誠か！？」

「ふん！貴様頭が悪いな。偉大かつ勇敢なる音無さんとその従者である僕達が直々に、“Collapse”本部に命懸けで潜り込んだんだぞ？もう少し考えたらどうだ？」

「こらこら。お前こそ口の聞き方には気をつける。」

「ええー、だって音無さん、こいつが僕達のことを疑うから・・・」

直井を宥める音無を見て懐かしく思うツナたちであったが、すぐにそれを振り切った。ほのぼのとするやり取りを見ても、安心できる状況下に彼らはいない。

「長門さん。」

「・・・なに？」

スツと立ち上がったツナは、長門の元へと歩み寄る。

「SOS団の他の方々、古泉さんや朝比奈さんにこのことを報告して、レイジオンや時空管理局機動六課、バスカービル等に緊急で連絡をしてくれるか？」

「・・・了解した。」

ツナ、セイバー、BRS、ゆりの4人は本部地下37階にある地上監視のモニターの前へ来ていた。

「ツナ、場所を特定できたのはいいが、どうやって攻めるつもりだ？もし奴らが地上を牛耳っている場合、あの場所へ着いた瞬間に総攻撃を喰らう。さすがに私でもそれを全てかわしてキヨンとハルヒを助けに行くことは難しい。」

「大丈夫だセイバー。地上からはその場所には行かない。」

「・・・どついつことだ？」

「すでにカムシンを始めとする結界師が空中から結界包囲網を作りに行っている。俺達が最新鋭ステルス搭載のヘリに搭乗して上から突入すれば、俺達が向かっていることに気づかれず、対策を練られずに済み、奇襲をかけやすくなる。さらに周りからその場所を認識することはできず、民衆から見られることもない。」

「なるほど・・・集団戦法のボンゴレらしい戦略ってことね。」

二人を納得させたツナはB R Sと共にジャンヌの元へと向かう。未だ確認せねばならないことはある。

「ジャンヌ、全員のコンディションはどうだ？」

「うむ、とりあえずはセブンス・ロストの脅威を完全に取り除いたからな。高町なのは怪我も同じ機動六課のシャマル、そしてレイジオンの冥土返し（ヘヴンキャンセラー）によってすでに完治済みだ。ほぼ完璧と言っても良いのではないか？」

ジャンヌの発言に再び安堵の息をつくツナ。

「今までにない風向きが”Buster”を支えている、そんな気がした。」

「ジャンヌ、ご苦労だった。司令部には遊佐を始めとして初春や俺の守護者が残る・・・お前も前線にてバスカービルの援護を頼みたい。」

「良いのか・・・？・・・恩に着るぞ、沢田綱吉。」

そしてツナは決意の表情を示し、モニターを一直線に見る。

「遊佐。」

「……なんでしょう、沢田さん。」

「夜明けに”Collapse” 総本山を奇襲する。全勢力のポイントを絞ってくれ。」

「了解しました。……特定座標を入力してください。」

「ポイント1-7。千代田区永田町。」

「……それでは……」

「ああ、総本山の場所は……日本政治の中心点……国会議事堂だ。」

地上監視として”Buster”本部に残っていた遊佐ですら驚きを隠せなかった。

それもそのはず。国会議事堂を占拠しているのであれば、地上を制圧したことに等しいと言っても過言ではないからである。

「……いよいよね……。」

「ああ……。」

「全勢力モニターにポイントを通告、回線の受信が受諾されました。沢田さん、お願いします。」

「全勢力に国会議事堂奇襲を命ずる！これは・・・俺達の命運を賭けた最終戦争だ！」

49話 開戦

重火器のように重みのある音。

しかし最先端のサイレンサーによって普段よりも遥かに静かなプロペラ音を発している。

ツナたちの乗る最新鋭ステルス搭載ヘリは計15台。各分隊がそれぞれ搭乗しており、各パラレルワールドの技術結集により完全無人操縦ヘリとなっていて、東京上空を飛行中である。

「あそこだ。」

ツナが指差す方向に、楕円状の結界が見える。

半径10キロといったところだろうか、内側からは不可視、外側からは緋色に視認できる。

「なるほど・・・旧ベルカ式と天草式をミックスさせてカデシウの心室と血印で包んだんだね。確かにかなり強力な結界かも。」

「さすがだ、インデックス。この距離で結界の中身を全て解析するとはな。」

ツナは苦笑する。

改めてインデックスに埋め込まれた10万3000冊の魔導書の力に驚嘆、失われた7人の一人であったことを思い知らされる。

実際、今回の戦争でインデックスには前線に赴き、敵陣戦力の分析と対策を担当してもらうことになっている。

同ヘリにはシャナと古泉、長門が同乗していて、全機中最後に“Collapse”陣本地へ降下する予定だ。

「悪いな、インデックス・・・本当はレイジオンの一員として戦列に加わってもらうのも手の一つではあったんだが・・・」

「大丈夫、とうまは平気なんだよ。一人じゃ危ないかもしれないけど、今はレイジオンの皆が付いてくれている。それに、私がすべきことは他にあるんだから。」

その優しい笑みに勇気づけられ、ツナのへりはまた高度を上げた。

国会議事堂。

暗闇と化したその場所に、一つの灯りがついた。

「おや、これはどうかなさいましたか、キヨン？」

わざと恰好を付けるように頭を垂れるブラドに”Collapse”のキヨンは薄気味悪い笑みを浮かべた。

「やれやれ・・・”Buster”。面倒くさい限りの連中だな。」

「そうでしょうか？我々の手中にすでに涼宮ハルヒともう一人の貴方がおられる・・・彼らの戦力から見ても快勝の予感しかしませんが・・・」

その言葉に”Collapse”のキヨンは小さく舌打ちをし、静

かに怒鳴った。

「お前は『皇室』へ行け。そしてここにセフィロスを呼んでこい。」

「……かしこまりました、我が主。」

ブラドはそそくさと部屋を出る。

”Collapse”のキヨンもキヨンであることに変わりはない。変に煽てられるのは逆に腹が立つ。

数分後、セフィロスが部屋に入ってきた。

「どうした、何か用か？……私を呼ぶということは何かあるからだとは思うがな。」

その質問に”Collapse”のキヨンはニヤリと不気味に笑い、セフィロスを見た。

表情からはセフィロスは何も感じ取ることができていなかった。

「……今日で全てが終わる。」

「何の話だ？我々が”Buster”最終襲撃を行うまでまだ3日あるぞ？何か別のことを終わらせるつもりなのか？」

「……違う。」

キヨンはセフィロスの言葉を遮る。

やがてその不気味な笑みは恐ろしいほどの悪魔のように怒りの籠った表情となる。

その顔にセフィロスも緊張を覚え、何事かとキヨンを見たままになる。

「・・・客人だ。」

刹那、国会議事堂の数キロ先で大爆発が起きた。

東京上空。

各分隊の配置が終わり、後はタイムリミットを待つのみとなっている。

「沢田さん、全ての配置が完了しました。突入開始まで残り1分26秒です。」

「こちら沢田綱吉。遊佐、ご苦労だった。引き続きエリアサポートを頼む。」

「・・・了解しました。」

さしもの沢田綱吉にも緊張の色が見える。これからの戦争は順番が命である。相手の行動予測は予めある程度の環境下を考慮しているため、逆に言えば”Buster”側のミスは許されない。時間は刻々と迫る。

「・・・3・・・2・・・1・・・」

遊佐の声に、全ヘリのプロペラ音が応答する。

「・・・0。作戦開始。」

「いくぞ！！！！」

その瞬間、ヘリが猛スピードで国会議事堂へ接近、結界も完全に解かれた。中へ入ると動物のような形をした者から岩のような姿をした者まで、幅広い異形の魔物がはびこっていた。

そこへ第一機目のヘリから全乗組員が飛び降りる。ヘリはそのまま国会付近の”Collapse”の砦に突っ込み、大爆発を起こす。降下していく乗組員に多種多様な光弾が飛び交う。しかし、その光弾は一人の男の片手によって全て粉碎されていく。

「おおおおおおお！！行くぞおおおおお！！」

掛け声と共に拳を振り上げ、着地点にいた岩巨人ゴレムの顔を殴り完全に消滅させたのは・・・上条当麻。『レイジオン』リーダーである。さらにその数十メートル先でもう一人、別の人間が降り立つ。

「ははははははっ！！ほおら、スクラップの時間だア！！」

降り立つと共にその男は周囲で光弾を撃ち続けていた魔物を一瞬にして粉々に砕いた。

『レイジオン』副リーダーである一方通行アクセラレータだ。

その消滅と共にステイルが、神裂が、アニエーゼが敵陣に突進していく。その後、次々と”Buster”のへりが広い路地に着き、機動六課、バスカービル等の戦力が降りると同時に彼らは様々な方向から敵陣の番兵たちを除去しつつ、本拠地：国会議事堂を目指す。ツナたちもへりを降りてすぐ、周囲の獣を焼いていきながら、全力疾走する・・・と。

キイイイイイインンンン！

鈍い金属音のような音。その音と共に見覚えのある巨大な生物がツナ達の前に立ちはだかった。

「・・・！武装生物！！」
ウエボン

「あれは・・・鋼鉄炭塊型武装生物だね。名前の通り原子時点できつついてるから完全破壊が困難なウエボンなんだよ！あれを壊すには一番肉質が堅くてダメージが通らない左胸部のコアをやらないとダメかも！」

インデックスはツナに向かって思い切り叫ぶ。

ツナもその説明に困惑するも、考える余裕は無かった。

見た目によらずとてつもないスピードで腕を動かしてきたダイヤモンドエポンは、その拳をツナへ真っ向から突き進む。

その拳をツナは高速で避け、自分の拳でコア部分を叩くも全く効果がない。

「チツ・・・！バーナーを使うしか・・・！？」

その一瞬の考察に対してもダイヤウエポンは口のような場所からレーザーを発し、隙を与えさせてくれない。それどころか、レーザーを避けたツナの場所に、拳が迫っていた。

「しまっ……！」

「Plasma Zamber Breaker!!」
プラズマザンバーブレイカー

術式発動と共に、恐ろしく長く大きい光の剣が、ダイヤウエポンの拳を真つ二つに斬った。

「フェイトか!?!」

「……はい！」

機動六課のフェイト。どうやらツナとダイヤウエポンを見るや否や、超高速で向かってきたらしい。

ダイヤウエポンの拳も、千切れた腕を何とも思わず、レーザーやもう片方の拳で応戦してくる。

フェイトも愛機バルディッシュを軽々扱い、何とか受け流してはいが、元々攻撃特化のフォームとして作られているため、装甲は脆い。

このまま消耗戦になるのはフェイトとしても避けたいところだった。

そこへ、再びダイヤウエポンの拳が飛んでくる。

フェイトはそれを避けると……その先に千切れたはずの拳があった。

「……!?!」

「ツナさん！離れてください！」

「・・・！？」

言われるがままにツナ、そしてフェイトはダイヤウエポン、そしてなのはとの距離を取った。

一方のなのははと言うと、ダイヤウエポンの周りに散った魔力残滓を特定の動きで魔法陣に一気に溜める。

その魔力は一瞬にして急増、強大なものとなり、ダイヤウエポンのコアを完全に捉えた。

「Starlight Breaker!!!」

スターライトブレイカー

圧倒的質量の魔力光がダイヤウエポンの恐ろしく堅かったコアを一瞬にして消し飛ばし、その威力のまま付近にいた神話に出てくるワイバーンのような魔物に被弾、その存在も吹き飛んだ。

その威力にツナもインデックスも顎が外れたかのように口をポカーンと開けていたが、フェイトは地上に降りたなのはに駆け寄り、また声を掛ける。

「ほ、本当に大丈夫、なのは？」

「にはははっ、ちょっとやりすぎちゃった」

「もう・・・ちょっとどころじゃないよっ・・・！一発目から魔力全部使っちゃって・・・いくら希少スキル「魔力収束」を持つてるなのはとはいえ回復するまでに時間かかるんだよ？」

「え〜・・・だつて〜・・・」

そのやり取りを見て、ツナ、インデックスも急いで二人に駆け寄った。

「助太刀恩に着る、二人とも。後は任せてもいいか？」

「大丈夫。私となのはと機動六課の皆が国会上空を制圧するから、ツナさんは一刻も早くキヨン君たちを。」

「了解だ。」

そう言ってツナとインデックスは国会議事堂に向け再び走り出した。

50話 く剣士の誇りく

「キヨン、一体どうするつもりだ？」 Buster” の襲撃は僕らの予想より遥かに早い。奴らは” Collapse” の猟犬の鼻すら誤魔化しのきく大結界によって襲撃のタイミングを感知させず、完全にこちらのペースは乱された。いくら数で上回っても勢いで圧倒されればもしものこともありうるぞ。」

議事堂内。とある部屋にて、” Collapse” のキヨンに迫ったのは陰陽術師ハオである。

その佇まいこそ冷静ではあったが、目の奥に見えるものには何か焦りを感じさせていた。

対し、キヨンはその表情一つ変えることなく、しかも余裕すら感じ取れる表情で笑う。

「どうした、何かに怯えているのか？何が起ころうと計画に狂いはねえ。もうこれは既定事項ってやつでな、今日でケリがつく。」

ハオは掴んだ胸倉を離し、ギロツと攻撃的な目でキヨンを見た。

「その言葉・・・忘れるなよ？」

「ふん・・・早く自分の場所に戻れ。」

セイバーは4機目のへりとしてバスカービルと共に同乗、右回りに

雑魚を蹴散らしつつ、各部の砦を破壊していく。

「セイバー！キヨンと涼宮ハルヒの拘置場所は特定できているのか！？」

愛用のベレッタで大型犬のような、狼のような獰猛な魔物を撃ち抜いたキンジが叫ぶ。

同様に狼のような魔物を一振りで真つ二つにしたセイバーは息を若干上がらせながらキンジの質問に応えた。

「断定はできない。ですが、特殊部隊のSSSが潜入した際は彼らのある部屋で見たという情報がある。それを元にすれば・・・こちら側から攻めるのが最も近い。ただし、おそらくこちら側の警備は厚く強固なものとなっている可能性があるのも事実ですね。」

「ってことは、各方面から攻めるってというのはどうということなの？」

横から割って入ったアリアが、愛銃ガバメントを二丁拳銃として軽々扱い、岩巨人^{ゴレム}をバラバラにしている。

「それは我々一部隊が制圧に気を取られているうちに脱出されないようにです。地上、上空全方位からの攻撃を仕掛け、ルートを押さえれば合流もしやすい。」

「なるほど・・・」

大まかな作戦自体は簡略化されており、その中での動きに複雑性がある。大前提には『“Buster”のキヨンと涼宮ハルヒ奪還』が掲げられており、次点で『“Collapse”戦力の壊滅』と

なっている。

そんな話をしているうちに、巨大な鮫のような、それでいて人型も加わっているかのような生物が見える^{まみ}。

「・・・コイツは・・・デプスウエポン海洋魚雷型武装生物か・・・！」

最初に言葉を発したのはジャンヌ。続いて理子、白雪、レキと各武器を構える。

「チツ・・・こんな敵に時間を食われては・・・」

セイバーに一滴の汗が滲んだ。

確かに未だ議事堂に辿り着いてはなく、一刻も早い潜入をしなければならぬ東グループ。規模から言っても、簡単に終わるような相手にも見えない。

・・・と思つた矢先だった。

「それなら大丈夫なんよ。」

間の抜けた声と共に一本の木がざわめいた・・・気がした。

宙を見ると、デプスウエポンの頭すら超えた頂点へ飛び出した男が一人、日本刀の剣を抜いた。

程よい茶髪、耳にはヘッドホン。半裸に白い羽織を纏い、その男は叫ぶ。

「後光刃！！」

その言葉と共に持っていた刀が光に包まれ、何の抵抗もなくデプスウエポンの固い皮膚を切り裂いていく。

勢いを付けたまま地上に降り立った時には・・・デプスウエポンは完全に二つに斬られており、砂のように崩れていった。

「貴方はもしや・・・沢田綱吉が言っていた、大戦時のみ契約を交わした麻倉家の!!」

「ああ、麻倉葉。葉で良いぞ。」

デプスウエポンを一瞬で切り去った時とは打って変わって、にんまりとした表情を浮かべる葉。その姿に、セイバーやバスタービルのメンバーも完全に呆気にとられていた。

「ほら、ぼやっとしてんなって。この辺はオイラがやっつくから、突入するんよ。」

「一人で任せても大丈夫ですか？」

「ははっ、何とかなるさ。」

再び歩みを進めたセイバーたちは、やがて議事堂前の広場に行きついていた。

不思議とここでは魔物の気配はしなかった。・・・魔物の気配は、もっと強大な、異質ともいえるこの殺気。

セイバーには体験した記憶がある。

「・・・約束通りだ。よく辿り着いたな、セイバー。」

「・・・・・・セフィロス！」

白銀の長髪を揺らし、セフィロスはゆらりと舞い降り、セイバーたちの前に立ちふさがる。

その手に持っている大太刀は村雨・・・ではなく、大戦用に取っなおいたのだろう、『正宗』の形をそれはしていた。

「お前達がまさかこれ程までに速く陣形を整え、しかもわざわざ”Collapse”の本拠地まで乗り込んで来られるとは、正直驚愕だな。そうまでして奴らの力が恋しいか？」

「我ら”Buster”はキヨンと涼宮ハルヒの力など使用するつもりはない！元居た世界に戻そうとしているだけだ！」

「それは惜しいことをする。我々に必要なのは創造主たる力と全てを無に帰す力だ。その二つが完全な状態で手に入れば、私はまた星を巡ることができる。」

話を通じないと見たか否や、セイバーは自身の剣『エクスカリバー』を抜いた。”約束された勝利の剣”・・・その名にセイバーは誓う。

「キンジ、アリア。ここは私が引き受けます。バスカービルは全員突入を。」

「何！？一人でやるつもりか！？」

キンジは驚愕に満ちた表情でセイバーを見る・・・も、その決意に

満ちた表情に一步下がる。

「セフィロスを倒せるのは私だけです。そこにいる白雪殿も、ジャンヌであっても奴を止めることは不可能だ。」

それだけ言うと、構えを取る。

そこに、一言の声がかかる。

「任せて……大丈夫ね？」

「お任せを……カナ。この剣に誓って、この戦いに……」
"Buster" に勝利をもたらしてみせます。」

バスタービルはその言葉と共に次々と中に入る。

……最後尾のキングが中へ入った瞬間、激しい金属音が辺りに鳴り響いた。

51話 く約束された勝利の剣

分厚い雲と激しく唸る雷鳴が、この戦争の激しさを象徴するかのよ
うに辺りから爆発や火花が飛び散っている。

葉は幾人かの”Buster”メンバーと合流、制空権を懸けて戦
う機動六課と同じく地上制圧権を懸けて戦っていた。

「真空ぶつた斬り!!」

掛け声と共に刀から剣圧のようなものが発生し、次々と敵を真つ二
つに斬っていく葉。それに続くのはレイジオンの土御門元春、そし
てグレイルのサーヴァントたち。

アーチャーが先陣切ってなぎ倒して行けば、倒し損ねた者をイリヤ
とバーサーカーが屠る。

後衛にはライダーが控えており、持前の機動力で前衛への反撃を許
さない。

盤石の布陣と言って相違ないであろう、葉と土御門は専ら強大な武^{エホン}
装生物を狙っていた。

そこへ、一陣の風が吹いた・・・気がした。

「・・・!?!」

その風に気づき、ハツとなつたのは葉。

慌てて議事堂の方向を向くが・・・何も無い。しかし、一瞬にして
葉はあることを感じ取り、この戦争が始まって以来初めて焦りの色
を見せた。

「……？葉、どうしたんだにゃー？」

怪訝そうに葉を見た土御門だったが、敢えて口調はいつも通り崩さない。

「……土御門、議事堂に向かってくれ。」

「……？何の話d」

「バスカールビルがハズレを引いた！アレはダメだ、勝てる勝てないの問題じゃないよ。ましてや特殊な能力がほぼ皆無なあの集団にやらせたら、間違いなく全滅しちまう！……幸いこっちにも陰陽術師がいる。土御門、オイラを除いて奴を倒せそうな一般兵はお前しか残ってないんよ。……頼む、オイラはまだオイラのミッシェンをこなしてない。持ち場から離れられない……！」

葉の話から推測するに、バスカールビルと当たったのはアレだろう。

土御門もその人物と仮定する。

確かにバスカールビルの主戦武器はあくまで銃撃であり、炎を扱える白雪、氷を扱えるジャンヌを考慮したとしても、如何せん分が悪いのには変わりは無かった。

「……わかった。葉、ここは任せるぞ？」

「……頼む。」

悔しそうな顔で、しかししっかりとした目で葉は土御門を見送っていた。

無数の剣圧が回りの木を薙ぎ倒しながらセイバーに迫る。

セイバーは左右に散るタイプと真っ直ぐ自分の邪魔をしてくるタイプと瞬時に判別し、後者のみを斬っていくという非常に難しい戦いを強いられていた。

しかも、セフィロスの剣撃による剣圧の威力自体も妖刀正宗の影響により比べものにならないほど上がっており、セイバーの疲弊を誘う。

「……何がお前を変えた、セイバー？」

「……？何の話だッ！」

そう言いつつ、セイバーは気合を込めてなおもセフィロスが繰り出してくる剣圧を吹き飛ばしていく。

セフィロスの方は笑みを崩してはいないものの、所々で一瞬驚愕の表情を浮かべている。

「以前戦ったときとは何もかもが違う。以前のお前は私の導きで力を得ていた……」

「戯言を言つな、セフィロス！」

剣圧が瞬間的に止んだ所を、セイバーは一気にスピードを上げ突っ込んでくる。

セフィロスは背丈よりも長い大太刀正宗をエクスカリバーに思い切

り叩きつける。

キイイイイインンン!!!!

名剣同士のぶつかり合いが、派手に火花を散らし幾度となく交わされる。

セフィロスの剣から複数の剣圧が現れるも、セイバーは激しく飛び交っているため、軌道が合わずに消滅した。

足場のしつかりしている場所であるからこそ、空くうを使って攻め立てるセイバー。

立ち位置を固定させないその戦法は、相手の中距離技を完全に封じ込める有用なものと言える。

「迷いを絶ったのか・・・？剣に以前のような鈍さを感じなくなつたな・・・。」

セフィロスはそう笑みを零し、あくまで剣圧と共に圧倒的な手数で攻める。

その型はどこか・・・隙だらけのように見える。

ただ、セフィロスの攻撃は不規則に変化するため、セイバーも対策を練る余裕は全く無い。何度も剣を交えてはいるが、戦況を一変させるような一手とはいかず、どちらも優劣付け難かった。

「どうした、セフィロス！まるでがら空きだ、そんな舐めた態度で私と剣を交えるか！」

「何を焦っている、セイバー？」 Buster” の誇る最高の軍師と恐れられたアーサー王はどこに消えた？」

「ちいっ!!--!」

先に動くのはセイバー。聖剣エクスカリバーが黄金に煌めく。

「エクスカリバー!!!」

瞬時にエネルギー体を収束した剣は、至近距離からセフィロスを喰らう。しかし、セフィロスもただ待っていただけではなく、正宗を片手に持ち、型を作る。

” 八刀一閃 ”

黒く邪悪に光った正宗は、エクスカリバーをも飲み込み・・・エネルギー体同士が消滅する。

セイバーはその機を逃すことなく、宙に舞い、セフィロスに詰め寄る。

「はあああつっ!!」

セイバーの剣がセフィロスの腹部を捉えた・・・かに思えたが、そこにセフィロスはいない。

「・・・まさか、上！」

セイバーが見上げると、セフィロスが空を舞っている・・・片翼の黒い翼をはためかせて。

「ほう・・・。これを見られたのはお前が二人目だな。どうやら私の方も、勝ちにいかねばならないようだ・・・。」

そう言い放つと刹那、セイバーの周りに7つの闇色の球体が突如と

して現れ・・・爆発する。

「くっ・・・!!!」

かろうじて跳躍によって直撃を避けたセイバーだったが、爆風で多少の傷が付き、更には追い討ちのごとくセフィロスが間合いを一気に詰めてくる。

セイバーは何とか足場を固定させ、空中から正宗を下にして降下するセフィロスにエクスカリバーを構えた。

” 獄門 ”

セフィロスの落下速度が急激に増し、セイバー目掛けて一直線に迫る。その速さからセイバーは瞬時に『受けきれない』と判断、剣でガードしつつ後ろに跳ぶことで再度、直撃は免れた。

「・・・まだ甘いな。」

セフィロスはニヤリと笑みをこぼす。と同時にセイバーが空を舞っているその場所に、3つの大きな黒い球体が現れて。

大爆発。

直撃被弾、だった。

・・・しかし、セフィロスは怪訝そうにセイバーを見ている。
セイバーは・・・残っている。しかも、目立った外傷も全くない。

「・・・何？」

更にセフィロスは硬直する。

身体が、セフィロスの全身が動かない。

剣を片手に持った無防備な状態で、どう動こうにもその身体は言うことを全く聞かない。

?.....セイバー!!!!?

そこへ、セイバーの脳裏に直接その文字が伝わる。それと同時にセイバーはその声の主を知る。

驚愕の色を隠せないセイバーだが、すぐにその驚愕の瞳も決意へと変わる。

?一瞬を躊躇うな!!!!?

「!!!!!!」

セイバーは言われるがままにセフィロスに突進、聖剣エクスカリバーが再び煌めいていき、動きの無い・・・正確には、動きの止められたセフィロスに降り注がれる・・・!

「エクス.....カリバー!!!!!!」

その光の粒一つ一つがセフィロスを方から一刀両断し・・・セフィロスは黒い羽のように消えていく。

「.....なるほどな、それがお前の答えかー」

セフィロスが消えると・・・いや、セフィロスだったものが、一つの人影を生み出していた。

「よく・・・俺の声に合わせてくれたな、セイバー。さすが、”約束された勝利の剣”だよ。」

ニコツと笑うその顔に、セイバーは一筋の涙を浮かべ、たちまち顔をくしゃくしゃにしていた。

「やはり・・・貴方だったのですね・・・・・・・・・・・・・・・・マスター
・・・・・・・・！」

セイバーは大粒の涙を次々にこぼし、士郎に抱き着く。

そう、セフィロスから出て来た彼は――

パラレルワールドでセフィロスの母、ジェノバに殺されたセイバーのマスター、衛宮士郎その人だった。

52話 く虚偽情報く

ここは………そうか、俺は”Collapse”の俺との取引で……。

そういえば身体が動かねえ……。意識もさつきから朦朧としっ放しだ……。

どうやら俺は嵌められたらしい。霞んだ視界で何とか辺りを見回せば、ここはどこかの一室。しかもえらく豪華な……。まるで王室のような場所。

そして、俺の身体が動かないのも、手を動かそうとしてわかった。何か手錠のような、鎖のようなものが俺の周りを囲っているらしく、それによって物理的に身動きが取れないんだろう。

耳を澄ませば、何やら様々な音が聞こえてくる。鈍い金属同士が激しくぶつかる音、耳が痛くなるような爆発音、そして人……？の呻き声のような音。

本当にここはどこだ？

そして………

ハルヒ……ハルヒはどこだ……？

国会議事堂内に突入したバスカービルは、事前会議の通り上部に存在するであろうと特殊部隊SSSに指示されたとある部屋を直指し

ている。

最前線には緋色のツインテール、アリア。そのすぐ後ろにはリーダーである遠山キンジ、そして『失われた7人』セブンス・ロストの一人であるカナが走っている。

中盤には黒髪ロングの白雪、碧髪シヨートのレキ、茶髪シヨートのエルが全方位からの攻撃に常に警戒態勢を張っており、後方からは金髪パーマの理子、銀髪のジャンヌが罠の有無をチェックする。

このバスカービル、少数精鋭ではあるものの個々の力は高く、編成も非常にバランスが取れていた。

これに加え、司令部に残っている人材もレベルが高い。特に司令部のメインコンピュータを操作できるほどの力を持っている中空知は、同じ司令部の情報系の総責任者であるSSS所属の遊佐からも信頼を置かれている。

「ここか……。」

キンジが溜息混じりに部屋を指す。

SSSが予測したポイント座標と一致するその部屋は、見た目としてはただのオフィスのようにも思える。

「まずあたしが行くわ。安全を確認し次第、あんたたちも入ってきて。」

アリアの言葉に全員頷き、肯定の意を示す。

アリア自身も自らの心の中でカウントダウンをし、その値が0を差した瞬間、ドアを突き破って単身中に突入した。

「"Buster" 多義分隊：バスカービルよ！キヨン、ハルヒ、いるー!？」

叫ぶアリアに……反応はない。それどころか、その言葉が『響き渡った』部屋全体に、アリアは思わず息を呑みこむ。

固まったまま動かないアリアに、キンジたちが最新の注意を払いつつ、怪訝そうに中へ入って……絶句した。

「……何だ、ここ……？」

そこは”部屋”と言うよりも”ホール”に近い。階段も無く、ただ筒状に恐ろしく広い石畳となっており、その天井は闇に包まれ正確な高度は全くわからない。

無論、国会議事堂内にこのような建造物を構築すること自体不可能なはずである。外見から想定しても、この規模の物質は確実に無かつたはずだ。

考えられる理由として一番適切な表現をとするならば……『幻覚』。実際、”Buster”側にも六道骸のような幻術師が存在しており、彼もまた幻覚が現実かを迷わせるような物を作り上げることが可能だった。

「……虚偽情報か……。」

後方から部屋に入ってきたジャンヌが警戒を強めて言う。部屋がダミーであれば、何らかの罠がある可能性が高いのは事実であり、理子も注意深く辺りを見回している。

結論から言えば、その警戒は正しかった。

しかしこうとも言える。……誰も反応できなかった、と。

「……!？」

「キンジ!？」

声にならない一瞬の叫びと共に、キンジが吹き飛ばされ、何者かの右手がキンジの頭を壁に激突させていた。幸い、外傷ほど内部の損傷は無いらしく、何とか息は保っている。

「やあ・・・薄汚い平民たち。」

ニヤリと邪悪な笑みを浮かべたその姿は、男であるが異常なまでに伸びた髪に、王者の風格を漂わせるマント。顔はどこことなく、見覚えがある。

「Collapse」大幹部の一人・・・陰陽術師ハオ・・・。」

鋭い眼でハオと呼ばれた男を真っ直ぐ見る理子。

その声はハオの殺気故かキンジを案じて故か、心なしに震えていた。

「やはり待ち伏せていたのか・・・。」

「相変わらずちっちええな、ジャンヌ。」

ジャンヌの一言さえ一蹴するハオ。ただならぬ気配がバスカービル全体の恐怖感を煽った。

「僕はこの部屋で次の計画の準備をしていたんだ。お前らのような下民共を待つなんて仕事、誰もやらないさ。・・・ただ」

ハオは掴んでいるキンジの頭に力を込めた。

「お前らがbuster」であることに変わり無く、僕の世界を構築するための涼宮ハルヒの力を奪還しにきたんだろう?・・・」

なら潰してもいいね。」

ハ才は手に更に力を込める・・・刹那。

ービウウウウンン！ー！ー！ー！

ハ才の眉間を掠めた銃弾が、壁に突き刺さる。

誰も反応できず、ハ才でさえ撃たれたことには気づかなかった。

「その手を離さない。その子を殺そうとするなら次は当てるわよ？」

「・・・ふっ・・・はは・・・ははは！！大した茶番だよ！カナ、君は当事者であるのにまるでわかっていない。最初から弱いとわかっている奴をただ単に壊すなんてつまらないだろう？・・・だから待ってやったんだよ・・・アゴニザンテをね。」

「・・・！」

静に怒りを浮かべていたカナもハツとする。アゴニザンテは死ぬ間際の最後の一手。一番危険なHSSでもある。

「さあ、始めようか・・・スピリット・オブ・ファイア。」

その掛け声と共に一瞬にしてハ才は炎に包まれる。その炎の色は・・・赤。分解を示す。

そして、ハ才の身体を持ち上げるようにして手のひらが現れ、次には巨大な真っ赤な巨人が現れる。

「で、でか・・・」

「怯んでる暇はないわ、アリア。貴方たちでスピリット・オブ・フ
アイアを足止めしなさい。・・・私はキンジと共に本体を討つ。」

カナはアリアに呼びかけ、自分にも言い聞かせるようにして、重い
足を上げた。

53話 くそれぞれの戦争く

「、B RS、こつちっ！！」

シヤナが叫び、階段を駆け上がるB RSに催促をかける。既にバ
スカービルがハズレを引いたという情報は”Buster”全員に
伝わっており、シヤナたちも当たり部屋を探すため、議事堂内の一
角に来ていた。

「”Buster”の誇る最強の前線と後衛の指揮官、しかも”B
uster”^{ハス}創立時の8人の中の2人もこちらに来て頂けるとは・
・Fii Bucuros^{ハス}」

立ちはだかるは細身で長身に白いスーツを身に纏う眼鏡の男。
髪は銀髪、落ち着いた物腰はかえって不気味にも感じ取れる。

「この部屋の前にいるってことは・・・当たりかしらね、『無限罪
のブラド』？」

シヤナが少し笑みを浮かべ、ブラドを睨む。その声と共にB RS
は階段を登りきり、シヤナの隣に立っていた。

「ははっ、シヤナさんと言いましたか。貴方はわかっておられない。
僕は小夜鳴と言う者であり、ブラドではありません。・・・主が来
るためにはこうでない」と。

そう言っておもむろに一枚の写真を取り出し、床に投げ落とした。
その光景にシヤナもB RSも思わず目を見開いてしまう。
そこに写っていたものは、決して良いものではなかった。人間とし

て見てはいけないもの・・・虐殺。

一面焼け野原となった家々に血の海をのた打ち回る罪なき人々の絶望的な表情。

小夜鳴はその写真を凝視し、快感を得たような歡喜に酔いしれていた。

「この絶望こそが僕の生き甲斐だ！ふふっ・・・ははははっつっ！！」

狂っている。

このブラドは元々吸血鬼であり、優秀な血を吸収することによって力を増幅させていた。その優秀な血の中には同じ世界にいた遠山家ヒステリアサヴァンシンδροームのものも混在しており、性的興奮によって目覚める『HSS』を応用させ、人間が恐怖や絶望に浸る表情や仕草を快感として得ることで本領を發揮する。

「さて・・・ショータイムだ。」

牙を見せ文字通りニヤリと笑った小夜鳴はたちまち獰猛な二足歩行の狼のような姿になり、鬼人のごとく咆哮している。

「B RS・・・行ける？」

「・・・勿論！」

シヤナとB RSはお互いを確認し合い、大きく跳躍した。

『ホール』に激しい銃撃音が鳴り響く。

アリア、白雪、理子、レキ、ジャンヌ、エルとメンバーだけ見れば主力部隊【レイジオン】に匹敵するクラスの面々が実体があるのか無いのかも定かではないスピリット・オブ・ファイアに挑んでいる。

「白雪、お前の属性は奴に吸収される可能性がある。皆のサポートを痰でも良いか？」

「了解、ジャンヌはアリアと前線でアレを攪乱させて。私達はできるだけ有効な手段を考えるから。」

短い会話を終え、ジャンヌはそのまま跳躍し、スピリット・オブ・ファイアの手元に降り立つ。間髪入れずにジャンヌ愛用の魔剣デュランダルを腕に思い切り刺し、切り口から氷を発生させる。

”オオオオオオオオオオオオオン”

叫びともただの効果音とも取れる音が鳴り響き、スピリット・オブ・ファイアが大きく揺れる。

不安定になった足元を無理矢理氷結させ、ジャンヌは再び地へと着く。

その間にアリア、エルはそれぞれ『ガバメント』『SIG SAUER P226』で何発も的確に撃ち抜いてはいるが、全くと言って良いほど効果は出ていない。

「……チツ……！」

同時にアリアとジャン又は言葉を吐き捨て、すぐさま次の攻撃に移った。

「起きろよ、キンジ。君を殺したわけじゃない、アゴニザンテを引き出してやったんだ。こんなんでくたばった・・・なんて言わせないよ?」

ハオはキンジの頭を掴んだまま笑みを零している。

カナもさすがに怒りを抑えられず、再び銃撃を始めるべく・・・構えてはいない。

カナが使うのは『不可視の銃撃』インヴィジブル。構える瞬間を見られる者自体少ない。

「・・・カナ、待ってくれ。」

「・・・!」

キンジが初めて口を開いた。

ハオは笑みの顔をさらに崩し、大袈裟に肩を振るわせた。

「いやあ、愉快としか言いようがないよ。その口をいかにして封じてやるうか、鳥肌が立つほどにね。」

刹那、キンジはハオの手を受け流し、大きく跳ね上がり、壁を蹴つて自分の愛用銃『ベレッタM92F』を構える。カナも瞬時に『不可視の銃撃』インヴィジブルで対応させる。

その銃弾の軌道はハオを大きく外していたが、その先にはキンジの

銃弾がまっていた。

・・・銃弾撃ち（ビリヤード）。

銃弾を銃弾で逸らし、相手の思惑を大きく外した形で相手にダメージを与えることができる。

その銃弾はお互いを跳弾させ・・・ハ才を撃ち抜いた。

「・・・良いね。」

ハ才は自分の笑みを崩さず一気にカナとの間合いを詰め、拳を繰り出す。

カナの方もその拳を見切っており、簡単に避ける・・・も。

「・・・!？」

謎の鎌鼬がカナを襲い、カ頬を傷つけた。

途端に危険を感じ取ったカナはハ才を投げ飛ばし、自らも横転して受け身をとる。

ハ才に関してはゆっくりと地に足をつけている。

「ん？これだけかい？そんなもんじゃないだろ、もっと見せてくれよ。」

あくまでもにこやかに、こちらを挑発してくるハ才にキンジもカナもHSSとはいえ焦りを感じていた。

「・・・キンジ、複数弾いけるわね？」

「ああ、大丈夫なはずだ・・・ッ!」

キンジの声を合図に二人は別方向に飛び、銃を向ける。そのタイミングからして完全に二人が一致しており、一人の人物であるかのような錯覚さえ覚える。

その二人は八才を空中で囲み、同じく距離を詰めんと跳躍していた八才とすれ違いざまになる瞬間――

「「今だ!!」」

何発も何発もの銃弾が各々に跳弾し、まさに『銃弾撃ち（ビリヤード）』状態で八才を完全にふさぎ込む。

「ははっ、案は良いんだけどなあ。」

その瞬間、大きな爆発が起き、キンジは吹っ飛ばされた。

「くっ……!!」

吹き飛ばされつつもキンジが急いで目を八才にやると……

「……!!!!」

「やっぱり脆い、庶民なんだな。」

邪悪な微笑みを浮かべる八才と。

………スタスタに引き裂かれたカナがキンジの眼に映っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8365m/>

涼宮ハルヒの激闘 ~とある時空の平行世界~

2011年10月19日03時10分発行